

石川県埋蔵文化財情報

第 21 号

巻頭図版（杉平円山1・2号墳、栄町遺跡、二日市イシバチ遺跡、分校C遺跡）

平成20年度上半期の発掘調査から 調査部長 三浦 純夫..(1)

発掘調査略報

杉平円山1・2号墳(2)

栄町遺跡(4)

二日市イシバチ遺跡(6)

分校C遺跡(8)

平成20年度上半期の遺物整理作業(10)

環日本海交流史研究集会の記録

「弥生時代の家と村」

はじめに 所長 湯尻 修平..(14)

発表概要 北部九州における弥生時代のイエとムラ 山崎 頼人..(15)

山陰地方大山山麓にみる弥生時代の家と村 濱田 竜彦..(18)

石川県の村と家 浜崎 悟司..(21)

金沢市内における山手の集落 前田 雪恵..(24)

富山県の家と村 町田 賢一..(27)

新潟県における弥生時代の家と村 滝沢 規朗..(30)

東北地方日本海沿岸における弥生時代の家と村 小野 隆志..(33)

続縄文時代前葉から中葉の集落と住まい 守屋 豊人..(36)

討論と展望 安 英樹..(39)

調査研究

古墳確立期土器の広域編年 東日本を対象とした検討(その2) 田嶋 明人..(41)

2009年3月

財団法人 石川県埋蔵文化財センター

写真解説

杉平円山 1・2号墳 古墳と輪島の市街地

河原田川下流域を見下ろす眺望の良い丘陵上に2基の古墳が立地。

栄町遺跡 板塀完掘状況

奈良・平安時代の掘立柱建物群を取り囲む2列の板塀である。区画された範囲は南北46m×東西50m以上の規模を有し、調査区の周辺に公的施設もしくは有力者の宅地が存在した可能性が指摘されている。



杉平円山1・2号墳 古墳と輪島の市街地



栄町遺跡 板塀完掘状況

写真解説

二日市イシバチ遺跡 A区方形周溝墓

弥生時代後期の四隅が切れるタイプの方形周溝墓である。約6.6×6.6mの規模で、溝の深さは深いもので約70cmあり、西側の溝は他のものより浅く、深さ約30cmである。溝底から完形に近い土器が出土している。埋葬施設は後世の削平のためか、確認できなかった。

分校C遺跡 B区中世溝礫出土状況

幅約3m、検出面からの深さ40～50cmを測る中世溝である。中央部には礫が集中した状態で検出された。1次調査で中世墳墓の周溝とされた溝の、約10m東側を併走する溝である。中世墳墓との関係が注目されるが、区画内となる北西部分に埋葬施設等に確認されなかった。



二日市イシバチ遺跡 A区方形周溝墓



分校C遺跡 B区中世溝礫出土状況

平成20年度上半期の発掘調査から

調査部長 三浦 純夫

平成20年度は、石川県教育委員会から17件の発掘調査を受託した。関係機関ごとの件数は、国土交通省が3件、鉄道・運輸支援機構が4件、県土木部が9件、県企画振興部が1件である。

本書では、4月～9月に実施した発掘調査の概要を紹介する。

輪島市杉平円山1・2号墳は、河原田川右岸の丘陵に立地する。標高は2号墳の頂部で約32mである。1号墳は径約20mの円墳で、古墳時代後期の築造と見られる。2号墳は径8mの小型の円墳で、木棺を用いた埋葬施設を発掘している。輪島における高塚の古墳は、鳳至川流域で弥生時代後期～古墳時代前期の築造と見られる釜屋谷四ツ塚古墳群が知られていたが、杉平1・2号墳の内容が明確になったことにより、古墳時代後期における河原田川流域の動向が注目されることとなった。

七尾市栄町遺跡は、一般国道249号藤橋バイパス建設に係る発掘調査で、平成15～17年度に続く第4次調査である。これまでの調査で板塀をもつ奈良・平安時代の掘立柱建物群が明らかになっており、今次の調査では板塀の広がりを確認した。その結果、板塀の規模は南北46m、東西は50mを越えるものであることが判明した。なお、平成16年度調査で、塀をもつ建物の東に幅8mの道路遺構を確認しており、幹線道に面して配置された建物であることがわかる。

野々市町二日市イシバチ遺跡は、弥生時代と中世の遺跡である。弥生時代は、竪穴建物を3棟、方形周溝墓を1基検出しており、集落とそれに接した墓域が展開していることが明らかになった。この遺跡に近接する横江D遺跡や三日市A遺跡でも弥生時代後期の建物が発掘されており、弥生時代後期以降に野々市町北西部一帯で開発が本格化したことがわかる。

加賀市分校C遺跡は、丘陵の裾に展開する中近世の遺跡である。集落の一角も確認しているが、その主体は墓域である。平成19年の調査で周溝をもつ中世墓を確認し、今次の調査では土坑墓群を確認した。



杉平円山1・2号墳調査風景



分校C遺跡調査風景

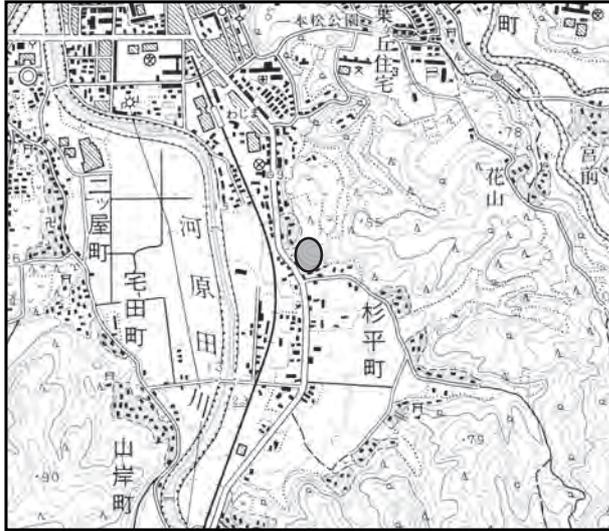
すぎ ひら えん やま
杉 平 円 山 1 ・ 2 号 墳

所在地 輪島市杉平町

調査期間 平成20年4月14日～同年7月22日

調査面積 380㎡

調査担当 端 猛 大西 顕



遺跡位置図 (S = 1 / 25,000)

調査成果の要点

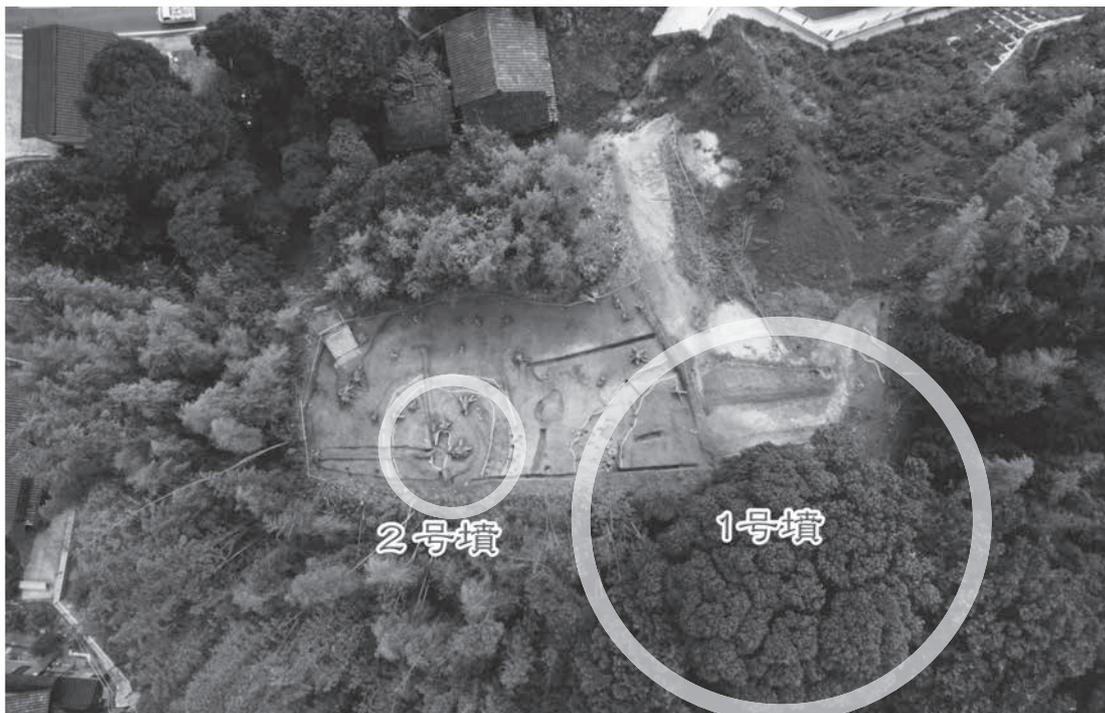
- ・遺跡は、輪島の市街地を流れる河原田川下流右岸の丘陵上に立地。
- ・2基の古墳を確認。1号墳は直径20m程度の円墳、2号墳は直径8mの円墳。
- ・2号墳の墳丘を利用した中世の塚を1基検出。
- ・弥生時代後期の竪穴建物を1棟検出。

杉平円山1・2号墳は、のと鉄道旧輪島駅から南東へ約600mに位置する。急傾斜地崩壊対策事業を調査原因として発掘調査を実施し、古墳を2基確認した。これまで、輪島では古墳時

代の横穴墓の調査例は多くあるが、いわゆる高塚古墳の発掘調査は初めてとなる。

1号墳は直径20m程度の円墳であると推定される。工事による掘削範囲のみを対象としたため一部分の調査となったが、周溝及び墳丘盛土を確認した。周溝からは須恵器の甕が出土している。また、今回の調査範囲では埋葬施設は確認されなかったが、古墳全域を対象に行った現況地形測量では、墳頂部の北東側にやや窪んだ地点があり埋葬施設の存在がうかがえる。

2号墳は直径8mの円墳と推定され、1号墳の南側に位置する。周溝及び方形(長さ2.6m、幅0.8m)の埋葬施設を検出しており、近接して出土した須恵器提瓶より6世紀代の古墳と推定される。ま



調査区全景(右が北)

た、周溝のさらに外、丘陵裾側に一部テラス状の段が巡っているのが確認された。

古墳のある丘陵からは輪島の市街地が眼下に広がり、市指定史跡の四ツ塚古墳群を望むことができる。四ツ塚古墳群は河原田川と鳳至川によって形成された平野を挟んで杉平と対峙する位置にあり、過去に地形測量を中心とした調査がなされている。墳丘の形状や築造方法より前期的様相を有する古墳群と報告されている。今回の調査により、周辺の横穴墓も含め古墳時代の輪島についての更なる検証が期待される。



四ツ塚古墳群と杉平円山1・2号墳の位置

なお、2号墳の墳頂部で中世の塚を1基検出した。古墳の高まりを利用して構築されたもので、周囲に石列を検出している。また、弥生時代後期の竪穴建物を1棟検出しており、調査区および周辺に該期の集落が営まれていたものと推定される。

(端 猛)



杉平円山1・2号墳平面実測図



1号墳の調査

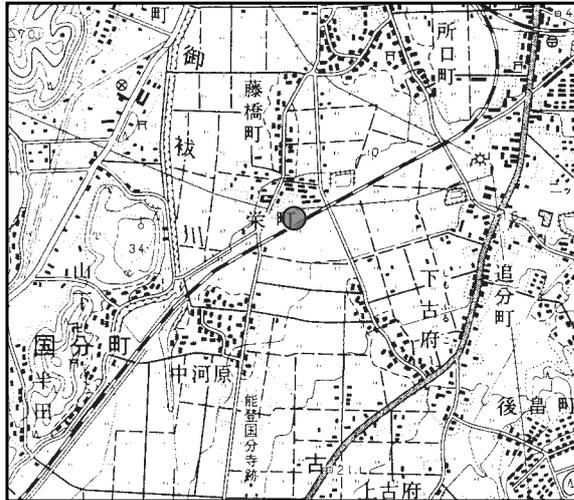


塚の調査

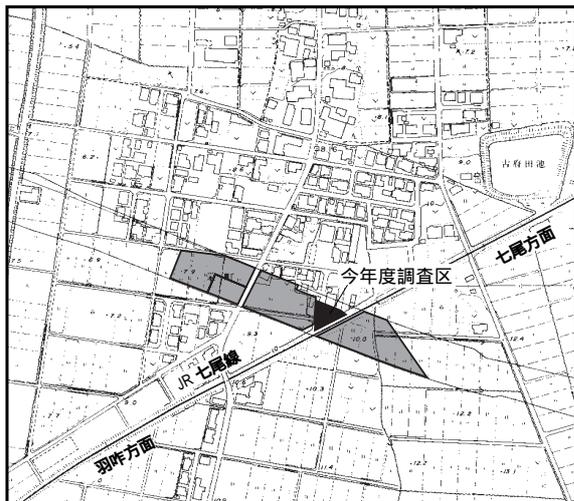
さかえまち
栄町 遺跡

所在地 七尾市栄町地内
調査面積 440㎡

調査期間 平成20年5月22日～同年8月5日
調査担当 土屋宣雄、林 大智



遺跡位置図 (S = 1 / 25,000)



今年度調査区と過去の調査区位置図

調査成果の要点

- ・七尾市栄町地内に所在し、弥生時代～中世まで断続的に営まれた集落跡。
- ・弥生時代後期の井戸や、奈良・平安時代の掘立柱建物、板塀などの遺構を検出。
- ・過去の発掘調査で検出した奈良・平安時代の板塀で周囲を区画した施設群が、さらに東側へ広がることを確認。
- ・過去の発掘調査で未確認であった弥生時代後期の遺構を検出。同時期の居住域が近隣に存在していた可能性が高い。

栄町遺跡は、七尾市内を北流する御被川下流域に位置し、御被川右岸の扇状地扇端部に立地している。遺跡南側には近接して能登国分寺跡が存在しており、周辺は能登国府域に想定されている。

発掘調査は、一般国道249号（藤橋バイパス）改築工事に係るもので、過去に平成15～17年度の3カ年に及び発掘調査を実施し、奈良・平安時代の板塀で周囲を区画した掘立柱建物群を検出したことから、調査箇所周辺に公的施設もしくは有力者の宅地が存在した可能性を指摘されている。

今年度の発掘調査では、奈良・平安時代の掘立柱建物7棟と共に、平成15年度発掘調査で検出したものと繋がる板塀2列を確認し、板塀で区画さ

れた施設群がさらに東側へ広がり、南北46m×東西50m以上の規模であることが明らかになった。

掘立柱建物のなかには、梁行2間(4.5m)×桁行5間(10.5m)で、板塀と主軸方向が一致する総柱構造の建物であるため、板塀機能時の倉庫と推測されるもの〔SB1〕や、梁行2間(3.4m)×桁行3間(4.6m)で、南側を板塀、その他を溝により区画されたもの〔SB3〕も確認できる。

板塀は3m前後の間隔で設置された支柱穴とそれを繋ぐ細い溝で構成されており、2列が並行して設置されている。南列のみに支柱根が残存することから、両者には時期差の存在する可能性が高い。

なお、調査区東側を中心に、掘立柱建物や板塀を切り込む南北方向の耕作溝が多数確認されており、板塀で区画された施設群の廃絶後は、畑地などの生産域になっていたことが推測される。

また、調査区南西隅では弥生時代後期の素掘り井戸〔SE1〕を検出した。過去の発掘調査で弥生時代後期の遺構は未確認であり、同時期の土器のみが散見されていたが、この遺構の確認により調査区周辺に同時期の居住域が存在することが明確になった。 (林 大智)



平成15年度調査区

平成15年度調査区との合成図 (S = 1 / 600)



遺跡完掘状況



掘立柱建物 (SB 5) 遺構完掘状況



板塀 遺構完掘状況

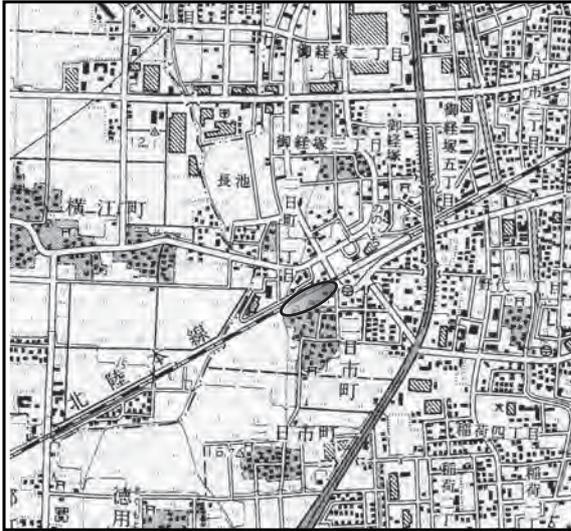


素掘り井戸 (SE 1) 遺構完掘状況

ふつ か いち
二 日 市 イ シ バ チ 遺 跡

所在地 野々市町二日市町地内
調査面積 1,850㎡

調査期間 平成20年4月28日～同年9月29日
調査担当 白田義彦 沢辺利明



遺跡位置図 (S = 1 / 25,000)

調査成果の要点

- ・弥生時代後期、中世、近世の複合した集落跡を確認した。
- ・弥生時代後期の竪穴住居を3棟、方形周溝墓を1基確認した。当期の遺構は広範囲に分布する。
- ・中世の井戸、溝等を確認した。当期の遺構も広範囲に分布する。
- ・近世の掘立柱建物、井戸、溝等を確認した。当期の遺構は調査区西側A区に集中する。

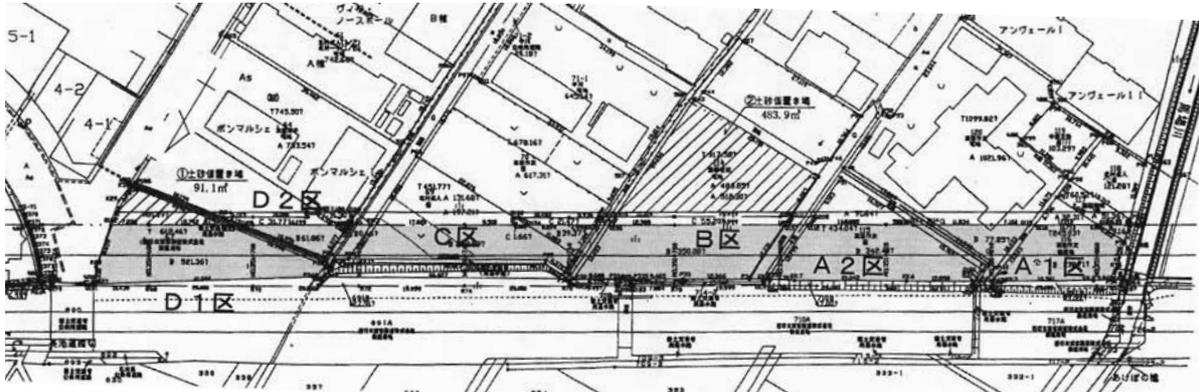
二日市イシバチ遺跡はJR野々市駅の南西に位置し、昨年度に引き続き調査を行った。今回の調査

原因は昨年度と同様に北陸新幹線建設によるものであり、今年度の調査区は幅約10m、長さ約210mの細長いものであり、現二日市町集落北側の線路脇にあたる。昨年度の調査区は今年度調査区南西側の線路脇で長さは約200mあり、今回の調査区と合わせると馬場川を挟んで約410m間の調査となる。昨年度の調査では弥生時代後期と中世(14世紀代を中心)の遺構を確認し、弥生時代の遺構は昨年度調査区南西側に偏在し、中世の遺構は広範囲に分布することが指摘されている。今年度調査区でも弥生時代の遺構は広範囲に分布している。

今回の調査では弥生時代後期の竪穴住居が3棟、方形周溝墓が1基確認した。竪穴住居はそれぞれ50m以上の間隔で点在し、方形周溝墓は調査区西側A1区で確認している。方形周溝墓は丁度調査区内におさまる規模であり、埋葬施設は確認できなかった。野々市町教育委員会の調査が当調査区の南側で行われており、方形周溝墓が確認されているので、墓域の広がりも今回の調査で確認できた。当遺跡の弥生時代集落の特徴は昨年度の調査で指摘されているとおり、遺構の絶対数は少ないが、広範囲に分布することであろう。今回の調査でもそのような集落形態が追認できた。

中世、近世の遺構は現在の地割に合うものが多く、条里地割の影響が考えられる。今回確認した近世の遺構は現集落の初源期のものと考えられ、現集落の形成過程を考えるうえでの資料となる。

(白田義彦)



調査区位置図 (S = 1 / 1,500)



遺構掘削作業 (B区)



竪穴住居 (A2区)



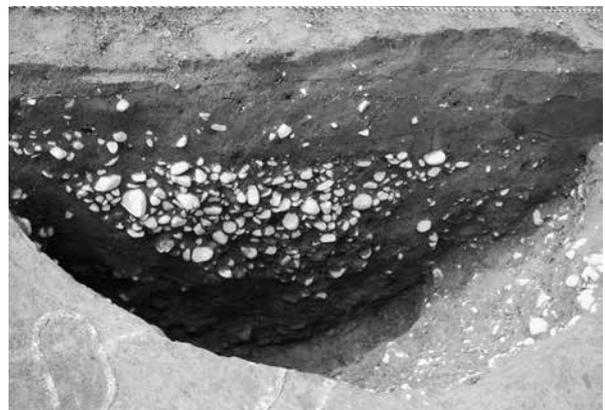
竪穴住居 (C区)



竪穴住居 (D1区)



方形周溝墓 (A1区)



中世井戸土層断面 (A2区)



近世井戸土層断面 (A1区)



近世井戸 (A1区)

分校 C 遺跡

所在地 加賀市分校町地内

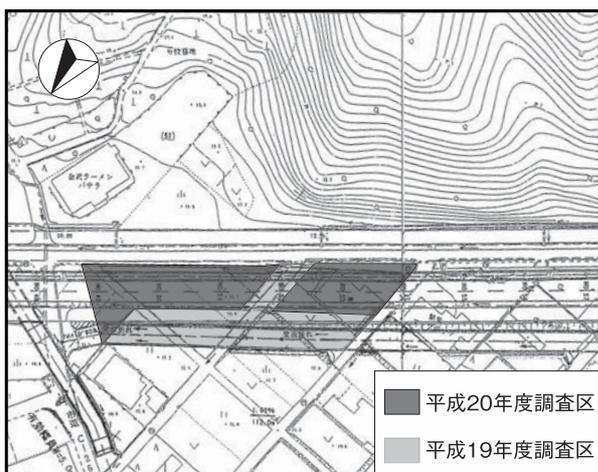
調査期間 平成20年4月24日～同年8月12日

調査面積 1,300㎡

調査担当 山川史子 金山哲哉



遺跡位置図 (S = 1 / 25,000)



調査区位置図 (S = 1 / 2,500)

調査成果の要点

- ・分校カン山古墳群のある丘陵の北側裾部に立地する。
- ・中・近世の遺構を確認した。
- ・中世の調査区付近の山裾は、溝により区画されていた。
- ・近世の調査区東半部付近では火葬や火葬骨の埋葬が行われていたと考えられる。

分校 C 遺跡は、加賀市分校町集落南端の国道 8 号沿い、分校カン山古墳群のある丘陵の北側裾部に立地する。調査原因は一般国道 8 号改築（加賀拡幅）であり、今回の調査は19年度調査に続く 2 次調査となる。調査対象区域は 1 次調査区と国道 8 号の間の約 1,300㎡で、調査区は市道を挟み東西 2 力所に分かれている。調査は、西側を A 区、東側を B 区として実施した。以下、各区について概要を述べる。

【A 区】国道 8 号側の南西側から分校集落側の北東方向へ傾斜する地形を呈する。斜面は国道 8 号建設前後の畑地利用等により階段地形に開削されており、とくに調査区西半部の攪乱が顕著であった。遺構については溝 4 条のほか土坑数基を、主に市道側の東半部で検出した。溝は、A 区付近の山裾を約 8 m 幅の長方形に区画して

いとみられる。各溝からは、土師皿、加賀焼、15世紀の青磁、石製品などが出土した。1次調査結果を鑑みるならば、確認した溝は中世墳墓の周溝である可能性も考えられるが、同区画内に埋葬施設となるような土坑等は検出されなかった。なお、土坑には柱穴と判断されるものもみられたが、認識できた建物はなかった。

【B 区】鞍部に位置する調査区である。東半部は肩部、西半部は谷部に相当する。調査区東端部は現代の瓦土採取により大規模な攪乱を受けた状態であったが、その他の区域については A 区に比して遺構の遺存状況は良好であった。確認した主な遺構には溝と土坑があり、出土遺物より所属時期はほぼ中・近世に限定されるものと考えられる。中世の溝には、1次調査で確認された中世墳墓の周溝の続きや、溝中央部に礫が集中するものなどがある。なお、調査区西半部の谷部と南東部において多数の土坑を検出したが、A 区同様認識できた建物は皆無である。

この他にも調査区東半部とくに南東部において、焼土や炭化物、焼骨片が多く含まれた溝 1 条や大

小土坑7基を検出した。土坑の中には土坑内面が厚く焼土化し、内部にはヒトの頭蓋骨が潰れた状態で出土したものもみられた。これらは1次調査の際にも確認された火葬墓であると考えられる。土坑からは所属時期を決定する土器等は全く得られなかったが、近接する近世溝から多数の焼骨片が出土していることから同じく近世に属する可能性が高い。東半部の検出面上には焼骨片を伴う焼土面も点在しており、付近一帯で火葬や火葬骨の埋葬が行われていたものと考えられる。 (金山哲哉)



A区中世溝完掘状況(北西から)



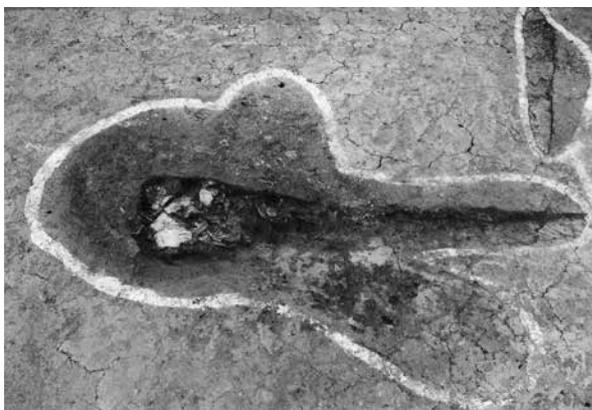
A区完掘状況(北東から)



B区中世溝遺物出土状況(北東から)



B区中世溝礫出土状況(南から)



B区火葬人骨出土状況(北西から)



B区完掘状況(北東から)

平成20年度上半期の遺物整理作業

国関係調査グループ

まず始めに、前年度より引き続き白江梯川遺跡（小松市、平成14年度調査）の出土品実測・トレース作業を行った。前年度に分類し、観察表も作成してあった為、作業はスムーズに進行出来た。実測遺物も重要とされる遺物は殆ど実測が終わっており、今年度の実測遺物は板や、棒など大きな遺物が主となったがあまり加工も見当たらない遺物が多く見られた。大きな遺物は2分の1の実測となった為、計算しながらの作業になり少し頭を悩ませた。



白江梯川遺跡の木製品実測作業



金沢城跡の分類・接合作業

続いて、大槻ブンゾ遺跡（中能登町、平成17・18年度調査）と金沢城跡（金沢市、平成19年度調査）を並行作業で行った。大槻ブンゾ遺跡は出土品実測・トレース作業のみの整理内容だったので短期間で終了した。金沢城跡は河北門の出土品整理・実測・トレース作業を行った。河北門は1つのパンケースごとに器種と個体数が数えられており、同じ袋やパンケースの中で接合されても個体数の変更や、別の出土地点と接合した場合は資料の作成など大量の資料を抱えながらの細かい整理作業となった。片付け方もラベルの番号と資料を照らし合わせての作業の為、2人1組になり何度も確認しながら、かなりの時間がかかった。瓦は軒丸・軒平が中心になり、軒丸は三巴が多く梅鉢はあまり見られなかった。しかし、金箔が貼ってあると思われる梅鉢の軒丸も見られた。軒平は三葉文・花文の中にも時代につれて模様になんぞつ変化があり、軒丸・軒平共に瓦に関する知識も必要とされた。実測の点検も鉛筆の線1本分の厚さ違いや、傾き、拓本の取り方など厳しいチェックが入りOKが出る迄が長く感じられた。それほど重要な遺跡だという思いを強く持った整理作業となった。

上半期最後に加茂遺跡（津幡町、平成16年度調査）の出土品整理作業を行った。加茂遺跡は縄文土器も出ており、細かい模様が施された破片が見られた。同じ様な破片も多くみられ、同一個体かと思ひ接合していると二個体の遺物になってしま



加茂遺跡の記名・分類・接合作業

う事もあった。その為、同一個体であると思われても、接点がない遺物は一緒に出来ないという苦悩もあった。小さな破片が多数あったが接合すると形になる遺物もあり、接合には時間がかかった。

(中尾望穂)

県関係調査グループ

上半期は、元菊町遺跡(金沢市、平成19年度調査)、若緑ヒラノ遺跡(かほく市、平成18年度調査)、七尾城跡(七尾市、平成17年度調査)、杉野屋遺跡(羽咋郡宝達志水町、平成19年度調査)の遺物整理作業を行った。

元菊町遺跡は近世の遺跡である。特定事業調査グループと合同で、洗浄から記名・分類・接合を行った。陶磁器の量が多く、近世の金沢の城下町の様子を感じられる遺跡である。若緑ヒラノ遺跡は昨年度からの続きで、縄文時代及び古代の遺物の実測・トレース作業を行った。石鏃の量が多く、細かい作業となった。

七尾城跡は戦国期の城下町遺跡である。昨年度に記名・分類・接合を行った遺物の一部を実測・トレースした。遺物は土師器、陶磁器、石製品、革製で漆塗りの兜の一部、鎧の小札、将棋の駒など、種類も豊富で出土量も非常に多い。取り扱いの難しい遺物もあった。兜と鎧の小札の実測に際しては裏打ちの張り替え、さび落としなど、保存処理担当者に大変お世話になった。

また、縄文時代から奈良・平安時代の遺跡である杉野屋遺跡では、須恵器、土師器、墨書土器、木製品、石鏃等の記名・分類・接合、実測・トレース、遺構図トレース作業を行った。墨書土器の実測に際して、今回初めての試みである赤外線撮影を行って文字判別の参考にした。撮影には、土器の置き方や画面の微調整などが難しく、なかなか明瞭な写真が撮れなかった。

(横山そのみ)



七尾城跡の石臼実測作業



杉野屋遺跡の記名・分類・接合作業

県関係調査グループの特徴として、遺物整理のメンバーに土器の復元を主に従事する職員と、遺物洗浄を担当する職員が属している。朝と昼と夕に顔をあわせたあとはそれぞれの持ち場に行ってしまうので、なんとなくさびしい雰囲気となる。

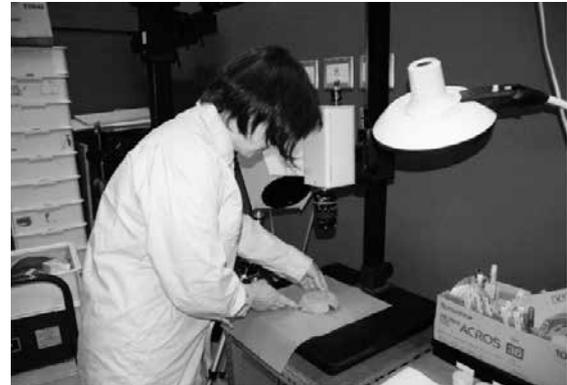
さて、土器の復元作業は、七尾城跡を中心にを行い、その後金沢城跡などを行った。今年度の洗浄は、新たなメンバーで行った。洗しやすい近世陶磁器がほとんどの元菊町遺跡のあとに昨年度調査の七尾城跡を行った。調整痕が明瞭に残っている土師器皿が多く、それを磨滅させないように丁寧に洗ったため、箱の数のわりに手間がかかってしまった。しかし、しばらくすると慣れてきたので、順調に作

業を行った。次は、さらに柔らかい土器ばかりの昨年度調査の五歩市遺跡を行った。水に浸すだけでも土器の表面がくずれそうな土器が多く、土器洗浄の難しさを実感した。

(伊藤雅文)



五歩市遺跡の土器洗浄作業



杉野屋遺跡墨書土器の赤外線撮影作業

特定事業調査グループ

上半期は、過年度調査分では、元菊町遺跡（金沢市、平成19年度調査）、金沢城跡（金沢市、平成19年度調査）、末松遺跡（野々市町、平成19年度調査）、七尾城跡（七尾市、平成17年度調査）、太田ツツミダ遺跡（羽咋市、平成19年度調査）、今年度調査分では、杉平円山1・2号墳（輪島市）、金沢城跡（金沢市）の記名・分類・接合および実測・トレース作業を行った。金沢城跡に関しては、9月16日～12月末日までの作業であったので、次号の情報誌でお知らせしたい。

元菊町遺跡は、江戸時代金沢城下町の一角ということで、遺物は土師器、陶磁器、土製品、石製品などであった。なかでもすり鉢や染付の器など陶磁器が多く、接合作業中は「チャリ、チャリ」と音が響いた。

平成19年度調査の金沢城跡は、現在復元工事中の河北門の出土品で、遺物は多数の瓦と少数の土師器皿や陶磁器であった。いぶし瓦はジェットマーカのインクが見えにくく、また表裏のわかりにくい小片、磁器の小片など、手書きをまじえての根気のいる作業であった。

末松遺跡は、平安時代の台付きの土師器椀や底部に墨書のある土師器椀、須恵器の蓋が身か判別しにくいもの、打製石斧などを実測した。遺物量は少ないものの観察を要するものが多かった。

七尾城跡は、戦国時代の城下町である。大量の土師器皿、陶磁器のほかに、染物屋や鍛冶屋などの工房と思われる町屋の一角ということで、埴塼、鞆の羽口などを実測した。昨年度この遺跡の接合作業を担当し、破片数が多く、破片自体の重みで接合に苦労した越前の大甕を、今年度実測できたのは格別の感があった。

太田ツツミダ遺跡は、弥生時代後期から古墳時代の土師器、須恵器、石器のほか、矢板などの木器を実測した。作業台8台をずらりと並べ、矢板を実測する姿には圧倒感があった。



元菊町遺跡の記名・分類・接合作業

杉平円山1・2号墳は、今年度調査の遺跡である。掘りたての「ホヤホヤ」の遺物をまずは洗浄することから始めた。土師器、須恵器、陶磁器などの実測をした。6世紀代の須恵器提瓶は、部分的な破片しかなく、図上復元の実測となった。

今年度からグループ制の導入により、調査員と整理スタッフは、同じグループで仕事を進めることになり、私たち整理スタッフは、記名・分類・接合および実測・トレース作業のほか、報告書刊行までのすべての作業に関わるようになった。パソコンを使う作業が大幅に増え、アナログな仕事人間だった私たち整理スタッフも、デジタルに対応できるようになったのは大きい成長であった。

(西川朗聖)



七尾城跡の大甕実測作業



太田ツツミダ遺跡の木製品実測作業

環日本海交流史研究集会の記録

「弥生時代の家と村」

はじめに

所長 湯尻修平

当センターの研究事業の一環として平成12年度から開始した「環日本海文化交流史研究事業」は、今年度で9年目を迎えることができました。事業の目的は、日本海沿岸のほぼ中央部に位置する石川県の歴史的特徴を理解するために共通のテーマを掲げて調査研究を行うと同時に、沿岸各地との交流をはかることにあります。また、本県はもとより沿岸各県の埋蔵文化財調査機関で毎年新しい発見が続いており、累積した膨大な調査成果をどのように研究し、活用していくか大きな共通課題となっております。研究集会はこのような調査成果の検討についても議論できる場としてきております。これまでの基礎的な調査研究の成果については、本誌の隔号にその概要を紹介してきているところでもあります。

毎年の研究事業のテーマ設定については、一昨年度から当センターが行う各種講座や体験学習などの関連づけることとしており、平成20年度は「古代の暮らし」に関係した「弥生時代の家と村」をテーマとして開催することとしました。

大陸から北部九州へ伝わり、列島を東進して広まった弥生文化は各地に新しい生活様式をもたらしており、日本海沿岸地域はその主要な伝播ルートの一つと考えられています。研究集会では、各地方の弥生時代の家の構造について時期的な変遷をたどることと、家がどのように構成されて村が成立しているか、という二つの視点から検討することとし、南から北へ発表をお願い致しました。九州は小郡市埋蔵文化財センターの山崎頼人さん、山陰は鳥取県教育委員会の濱田竜彦さん、北陸は当センターの浜崎悟司さん、金沢市埋蔵文化財センターの前田雪恵さん、富山県文化振興事業団埋蔵文化財調査事務所の町田賢一さん、新潟県埋蔵文化財調査事業団の滝沢規朗さん、東北は秋田城調査事務所の小野隆志さん、北海道は北海道大学埋蔵文化財調査室の守屋豊人さんに各地域の実態や状況についてご報告をいただきました。

「弥生時代の家」が地域により大きく異なる実態であったことは意外でありました。まとめの報告によると、弥生時代には九州から北陸までの範囲で縄文時代とは明らかに異なる家が確立しており、東北と北海道は縄文時代から余り変わらない家が展開している地域であったことが明らかとなっております。東北地方で弥生前期に竪穴が大型化する九州と共通した変化が見られたことは、弥生文化の影響をみるうえで重要なポイントであります。「村の構成」については地域によって様々な構造の建物が存在し、同時期であっても各地域で特徴があることなどについて相互理解を深めることができました。

当センターでは今後ともテーマを変え、年1回の「交流史研究集会」の継続開催を進めて行く予定ですが、本事業が日本海を媒介とした地域間交流史研究の進展に一定の役割を果たし、本県が持つ歴史的意義の解明に寄与することを願っております。

北部九州における弥生時代のイエとムラ

小郡市埋蔵文化財調査センター 山崎頼人

1. はじめに

北部九州地域における弥生時代の住居構造や集落構造については、特に集落構造を中心に古くからの調査研究の蓄積がある〔鏡山1956～1959、高倉1975、橋口1987、武末1990など〕。集落構造研究については、良好な調査例（大規模開発）によるところが大きいですが、近年では小規模調査の積み上げによる集落構造・変遷理解も進んでいる〔小澤2000、久住2008〕。また、蓄積された資料から、集落研究の基礎的遺構である住居遺構についても地域単位での変遷、地域性が明らかにされつつある〔寺井1995、埋蔵文化財研究会2006、山崎・沖田・廣木・柿本2008など〕。

2. 竪穴住居構造の変遷

北部九州地域（主に福岡県域）では地域性や遺跡毎の特徴がみられるものの、大きく以下の住居変遷が考えられる（第1～3図）。

第1画期：松菊里型住居の流入（弥生早期～前期前半）

第2画期：松菊里型住居の変容・在地化（弥生前期前半～中期末（一部後期初頭））

第3画期：方形系住居の増加・盛行／円形系住居の減少・衰退（弥生中期末～後期初頭）

第4画期：住居構造の画一化（方2柱・壁際土坑・ベット状遺構の付設）（弥生後期段階）

第5画期：支柱構造の変化（方4構造の採用・流入）（弥生終末～古墳時代初頭以降）

3. 集落の様相

ここでは主に集落内における住居の状況と貯蔵・倉庫管理についての変遷を示す。

弥生時代早期から中期前半では、貯蔵穴・倉庫の管理体系が小規模・自己完結的な小集団であり、それぞれの居住単位で貯蔵施設を維持する基本的な生活領域が形成される。

江辻遺跡では、弥生時代早期から前期の環状に配置された松菊里型住居群とその内包される部分に掘立柱建物、さらにそれら両者を取り巻くように溝がめぐる（第4図）。明確な貯蔵穴は調査区内にみられず、貯蔵施設・倉庫としては掘立柱建物が見られる。当初の中央部は広場になっていて、掘立柱建物が7棟建つ。うち1棟は、梁行4間×桁行5間の平屋建物と推定され、この集落の公共的な大形建物とも考えられている。

一ノ口遺跡Ⅰ地点では、弥生時代前期後半から中期前半の住居跡119軒の他に、掘立柱建物4棟、貯蔵穴279基、道状遺構7条、柵列状ピット群などが検出された（第5図）。全時期を通して、円形住居は径5～6mが大半を占め、7m以上のものが16軒（うち1軒は11mを超える）である。方形系住居は長辺3～5mが多く、6mを超えるものもある。円形住居は丘陵頂部、もしくは尾根部に立地し、方形系住居は円形住居に付随、もしくは斜面上に立地する傾向が強い。貯蔵穴は住居周辺に伴う形で検出される。周辺では、貯蔵穴には住居周辺につくられるものと住居から離れた場所にまとまりを持つ2者がある。その群をなすものには環濠を有するものがある。貯蔵穴専用環濠は、周辺の集団が協力して掘削したと考えられ、小集団間を超える貯蔵域の創出が行われ、管理集団の萌芽がみられる。そのようななかで、大規模集団では集落内分業の集約化が一部確認できる。

中期後半から後期では、居住単位の基本生活領域を持ちつつ、集落内における特定貯蔵域・倉庫域・生産域の明確化（集落レイアウト）が看取できる。機能集中・集住化することで集落大形化が促され、集落経営が長期的・安定的なものになる。

比恵・那珂遺跡群では中期後半以降、段丘上を区画する大溝が掘削される。大溝は集落のレイアウト

トの基軸で、環濠とはならない。中期末には、那珂遺跡の大溝の西北側に中央に屋内棟持柱を有する5×8間の大形建物がみられる。周囲では青銅器製造関連遺物が多く、前面の大溝に祭祀土器群が集中し、青銅器生産と祭祀行為とが関連して執行された[久住2008]。比恵遺跡中央部では、径11m以上の大形円形住居を有する住居群ブロックがあり、周囲には径9~10mを中心とするブロックが分布する(第2図)。「ブロック」は大形・中形の円形住居、7m以下の中・小形長方形住居、掘立柱建物、井戸からなる径100~200mの居住単位である。中・小形住居のみのブロックもあり、集落内での階層性を示す可能性がある[吉留1999]

後期における比恵・那珂遺跡群は方形環溝(大形建物)を中心とする「中枢域」や比恵遺跡の中央北部における倉庫群の成立など、より機能的に再レイアウトされる(第6図)。集落の再編成に伴い、新たな条溝(大溝)が各所で掘削され、比恵・那珂遺跡群の段丘上を機能的に、ブロック状に区画する。弥生時代終末期には、比恵・那珂遺跡群を南北に貫く、全長1.5km以上の長大な道路状遺構の成立があり、集落の新たなレイアウトをきめる基幹道路となる[久住2008]

平塚川添遺跡では後期後半以降、多重環濠を伴う(第7図)。その中心部には大形建物が並び、その周囲には環濠によって区画された別区を有する。この別区の間には工房域や倉庫域と想定されるものがあり、集落構造での機能分化が窺える[川端1994]

【主要参考文献】 小澤佳恵2000「弥生集落の動向と画期 福岡県春日丘陵域を対象として」『古文化談叢』44 鏡山猛1956~1959「環溝住居址小論(一)~(四)」『史淵』第67・68、71、74、78 川端正夫1994『平塚川添遺跡 発掘調査概報 II』 甘木市教育委員会 久住猛雄2008「福岡平野 比恵・那珂遺跡群 列島における最古の「都市」」『集落からよむ弥生社会』 弥生時代の考古学 8 同成社 高倉洋彰1975「弥生時代の集団組成」『九州考古学の諸問題』 東出版 武末純一1990「北部九州の環溝集落」『九州上代文化論集』 乙益重隆先生古稀記念論文集 寺井誠1995「古墳出現前後の竪穴住居と形態変化 漸移性と画期」『ムラと地域社会の変貌 弥生から古墳へ』 第35回埋文研究集会 橋口達也1987「集落立地の変遷と土地開発」『東アジアの考古と歴史』 中 岡崎敬先生退官記念事業会 埋蔵文化財研究会 2006『弥生集落の成立と展開』 第55回埋文研究集会 山崎頼人・沖田正大・廣木誠・柿本慈2008「松菊里型住居の変容過程 筑紫平野北部三国丘陵における住居動態」『古文化談叢』59 吉留秀敏1999「福岡平野の弥生社会」『論争吉備』 考古学研究会

三国丘陵周辺の住居変遷図

	円形住居群型(系)			円形住居並列型		方形・長方形並列型
	甲7式	乙1式	丙2式	1体目	2体目	
縄文時代前期						
表注目1~4項 ※2777ADP, 288						
板付1式併存期						
板付目3式(古)						
板付目3式(新)						
板付目3式(新)						
板付目3式(新)						
板付目3式						
板付目3式						
板付目3式						

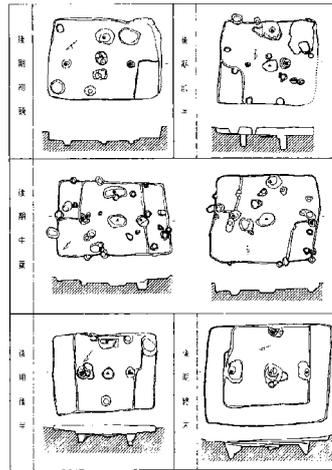
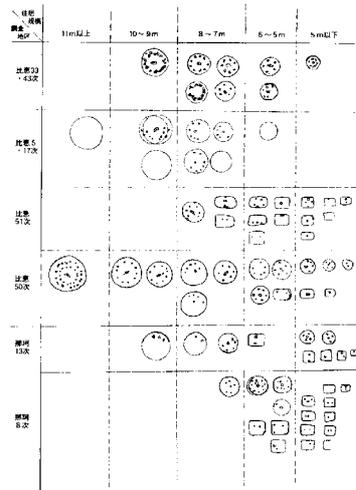
【凡例】※それぞれ別の住居形式(群集)のなかでの構成を示した図。右トには、2005年3月時点の集落域を表記。
※板付目3式は環溝式まで、その後は環溝1式までを対称。

	小形円形	方形	長方形	小形長方形
縄文時代前期				
表注目1~4項 ※2777ADP, 288				
板付1式併存期				
板付目3式(古)				
板付目3式(新)				
板付目3式(古)				
板付目3式(新)				
板付目3式				
板付目3式(古)				
板付目3式(新)				
環溝1式				
環溝目3式				

※本は、集落域外のものから採出。
※長方形並列型の集落は、一口溝溝、比和尾口溝跡からの採出。

図212 三国丘陵周辺の住居変遷図

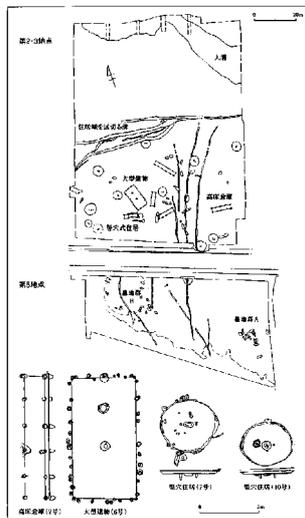
第1図 三国丘陵における住居変遷概念図(弥生時代前半期)[山崎・沖田・廣木・柿本2008]



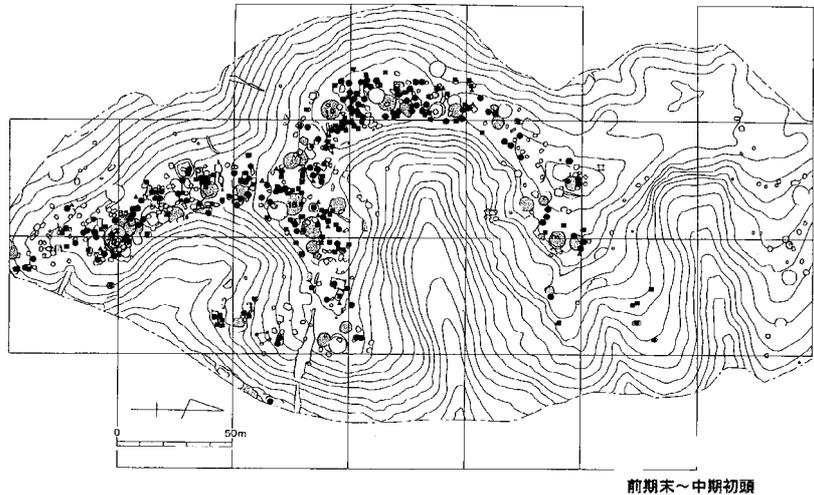
左：第2図 比恵・那珂遺跡住居規模
(中期後半)[吉留1999]

右：第3図 弥生後期住居変遷図
[片岡1996]

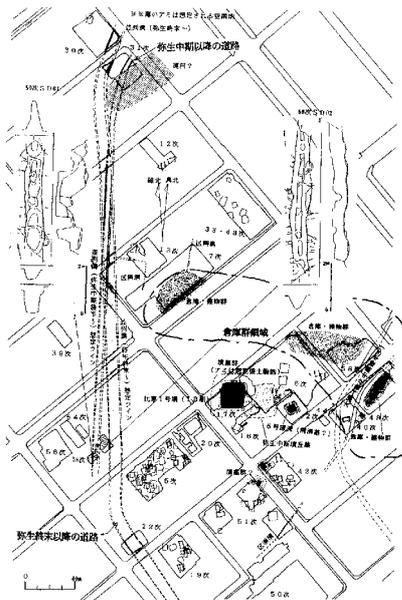
(○)の中心が柱遺構、●が柱穴、▲が伊、■が柱内貯蔵穴



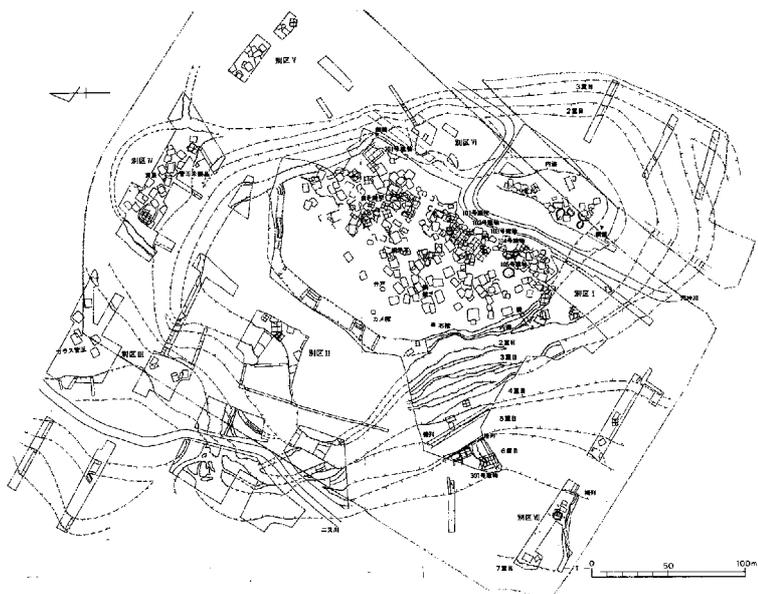
第4図 江辻遺跡遺構配置図
[武末2000]



第5図 一ノ口遺跡遺構配置図 [速水1994]



第6図 比恵遺跡遺構配置図
[久住2000]



第7図 平塚川添遺跡遺構配置図 [川端1994]

山陰地方大山山麓にみる弥生時代の家と村

鳥取県教育委員会文化財課 濱田竜彦

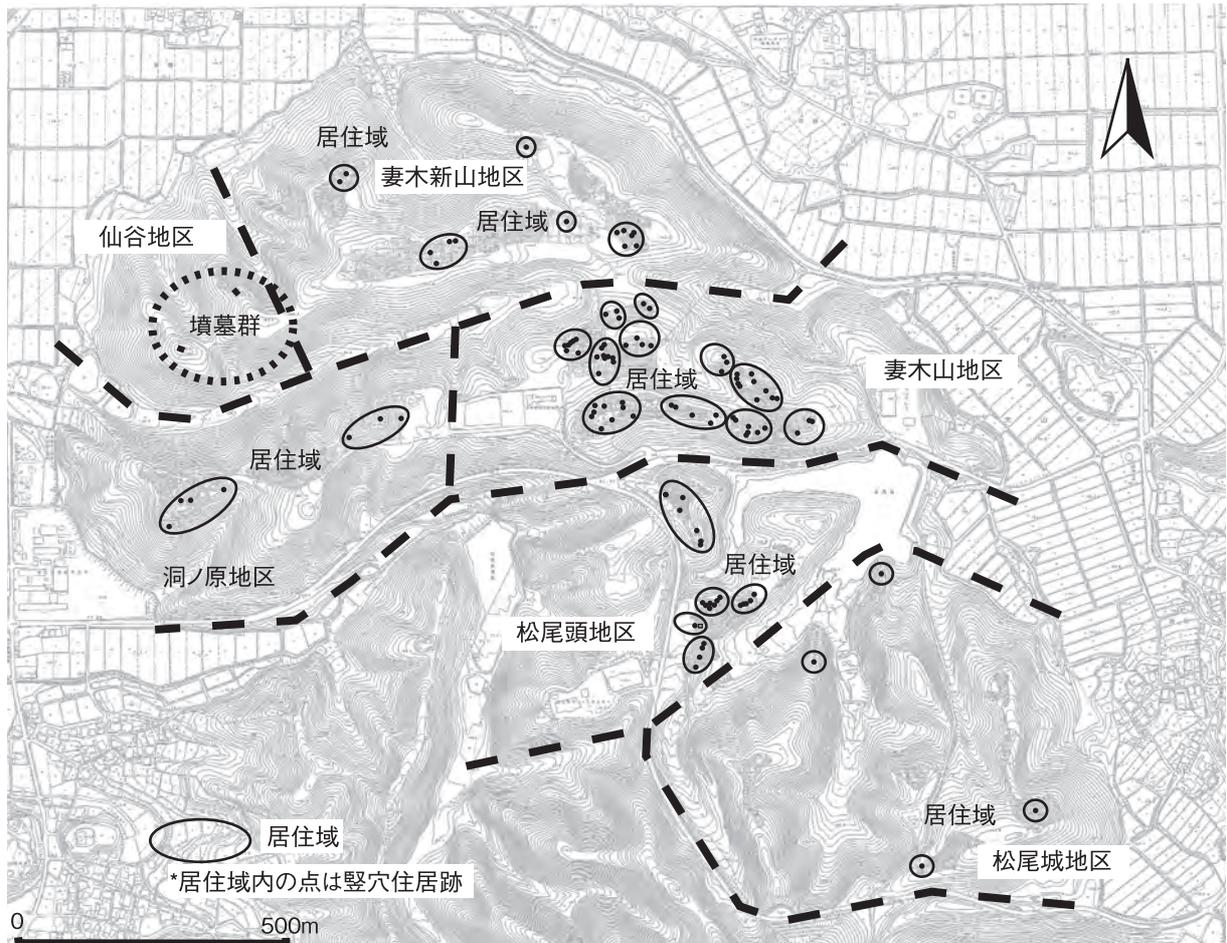
近年、山陰地方では、鳥取県中・西部の大山山麓において弥生時代中・後期の集落遺跡の調査事例が充実している。中期後半の遺跡には2～3棟の竪穴住居跡からなる集落と考えられるものが多く、その分布は分散的である。後期になると、中期の1集落規模に相当する規模の居住の単位が複数集合して、大規模で複合的な集落が形成される。大山町・米子市妻木晩田遺跡は、中期後葉までは小規模な集落であったが、後期初頭以降、複数の居住域が丘陵上に現れ、後期後葉には20カ所以上の居住域が丘陵上に展開している(図1)。こうした動きは、墳丘墓の造営と軌を一にはじまっており、墳丘墓に象徴される有力集団を紐帯とする新しい集団社会の形成がうかがわれる。

次に集落の構造を概観する。中期後葉の集落が検出された倉吉市関金町大山池遺跡(図2)には、2棟の竪穴住居跡と小型の掘立柱建物跡が分布する空間(空間A)と、独立棟持柱や庇をとともなうものを含む中・大型の掘立柱建物跡が分布する空間(空間B)があり、集落内に2つの空間が認められる。遺構以外に空間の機能差を示す資料を欠くが、竪穴住居跡を伴う空間Aは日常の生活の場であったと考えられよう。一方、空間Bの理解には、大山町茶畑山道遺跡(図3)の調査が参考になる。中期中葉の中・大型掘立柱建物跡で構成される空間には独立棟持柱を伴う大型の掘立柱建物跡があり、その付近には赤色塗彩された土器などが廃棄された土坑などがある。周囲からは銅鐸形や分銅形の土製品なども出土しており、祭祀に係わる場であった可能性が想起される。

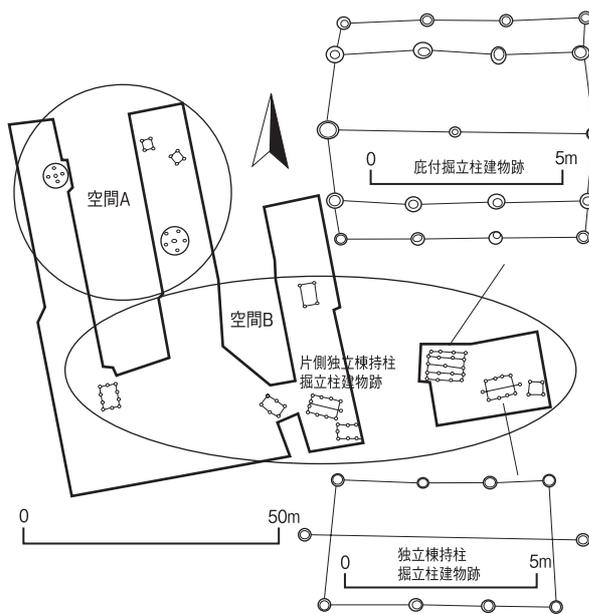
ところが、後期の集落遺跡には中期の集落のように分節化した空間を見いだしにくい。妻木晩田遺跡では後期後葉に両庇をとともなう大型掘立柱建物跡が特定の居住域に付帯している(図4)。同規模・形態の建物跡が他にはなく、最盛期の集落を象徴する建造物がここに存在したと考えられるが、妻木晩田遺跡では特定の集団がこうした施設を所有・管理していたと考えられよう。

また、妻木晩田遺跡の各居住域における竪穴住居跡や掘立柱建物跡の在り方は、地形の制約によるバリエーションはあるけれど、長期に居住が継続するような場所、とりわけ緩やかに起伏した丘陵部には、頂部に空閑地が設けられ、少し下った緩斜面に竪穴住居跡が環状に配置されることが一般的である(図5)。こうした在り方は居住期間を通じて維持されることが多く、土地の利用、居住のデザインが経年的に堅持されていることがわかる。倉吉市コザンコウ遺跡は短期的な居住が想定される集落遺跡で、後期後葉に埋没した3棟の竪穴住居跡が検出されている。一定の距離をおいて分布する各竪穴住居跡には掘立柱建物跡と貯蔵穴が伴っており、各世帯が各々2種類の貯蔵施設を保有していた状況がうかがわれる。ただし、掘立柱建物跡や貯蔵穴が群在する居住域が妻木晩田遺跡などにあることから(図4・5)、貯蔵施設を複数の世帯で共同管理している集団もあったとみられる。

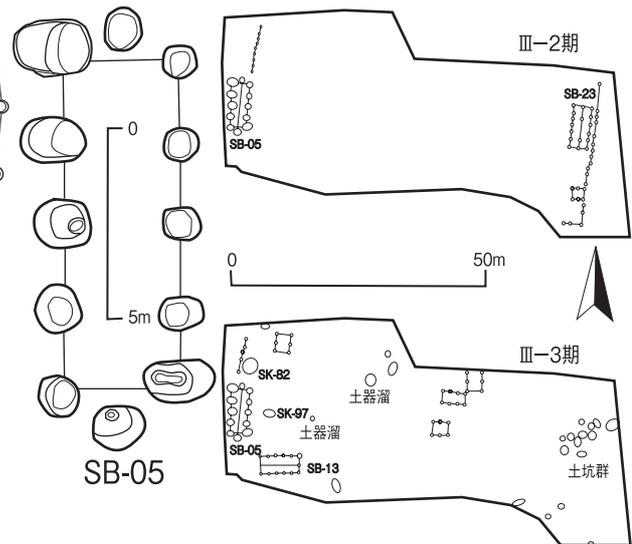
鳥取県内では焼失住居跡が多数検出されており、妻木晩田遺跡では竪穴住居の復元整備も行われている(図6)。竪穴住居跡の平面形は、後期前半まで円形が卓越するが、後半以降、方形を増すものが増加する。しかし、方形の竪穴に円形の周堤が伴うこともあり、竪穴が方形であっても、上屋を形成するサスが中心に集まる求心的な構造のものが少なくないと予想される。



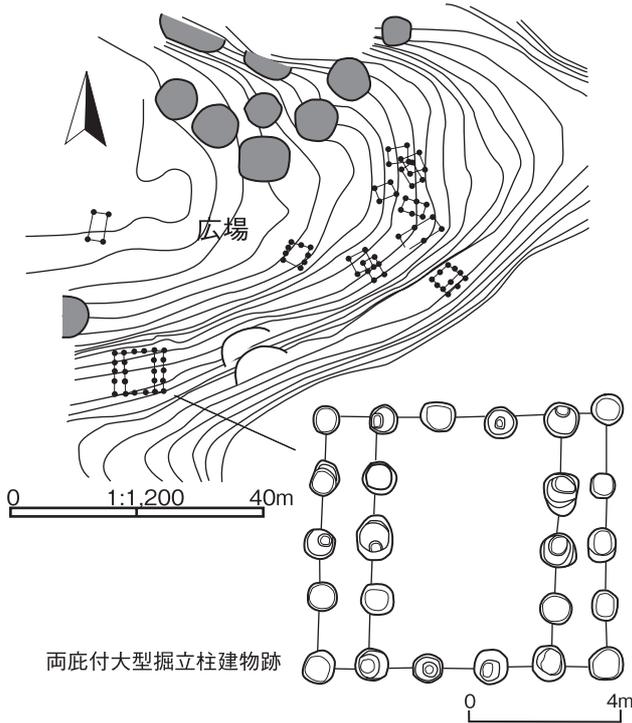
第1図 妻木晩田遺跡の居住域（後期後葉）



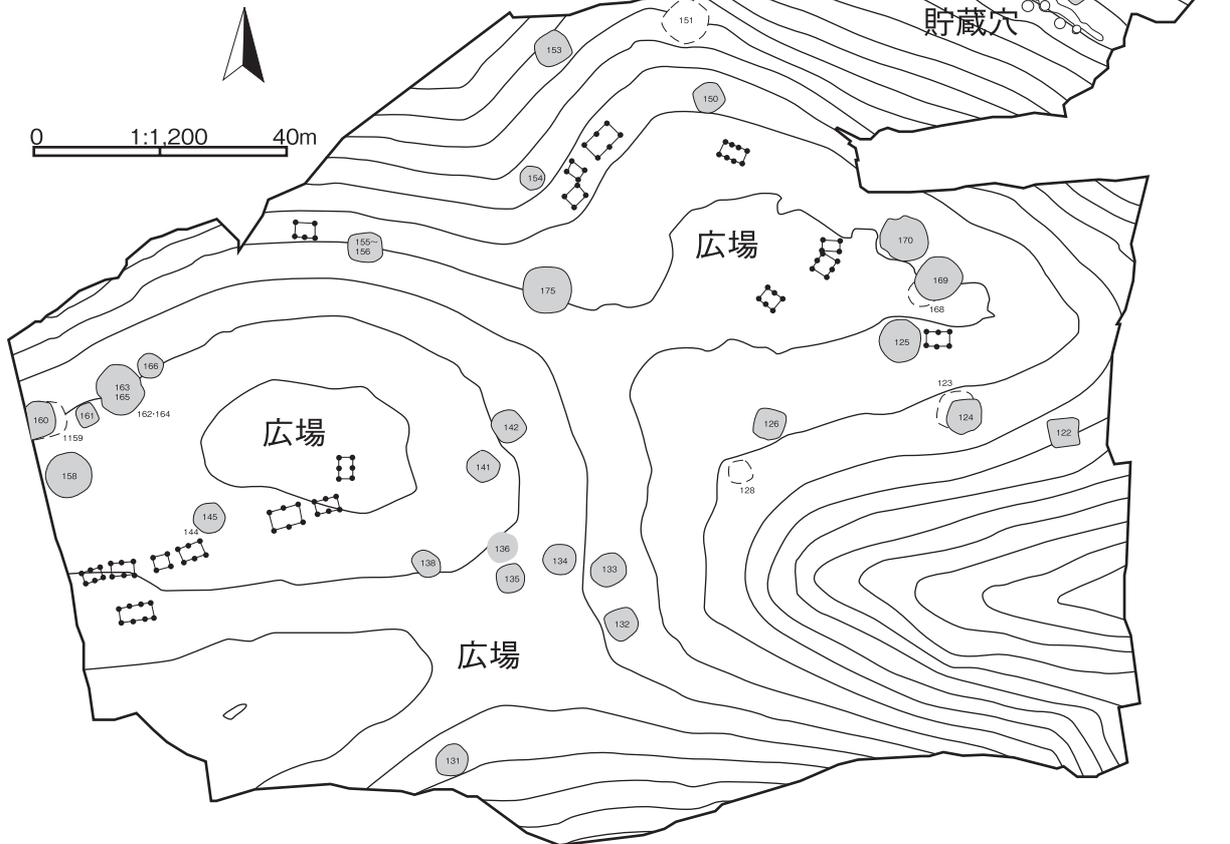
第2図 大山池遺跡（中期中葉）



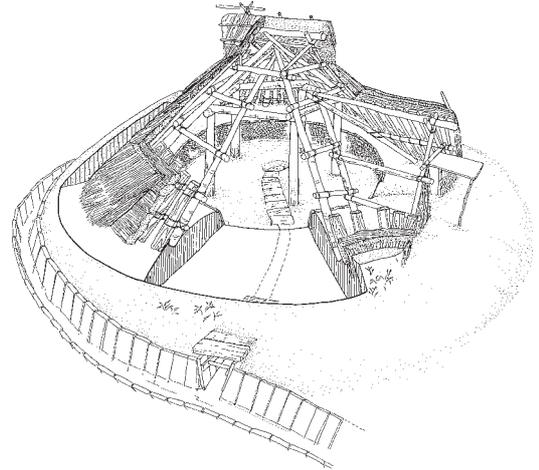
第3図 茶畑山道遺跡（中期中葉）



第4図 妻木晩田遺跡松尾頭地区3区(後期後葉)



第5図 妻木晩田遺跡妻木山地区3～7区(後期後葉)



第6図 復元竪穴住居跡
(妻木晩田遺跡洞ノ原地区西側丘陵住居2)

石川県の村と家

(財)石川県埋蔵文化財センター 浜崎悟司

発表要旨

石川県における弥生時代集落は金沢市塚崎遺跡の調査以来、発掘調査報告書での検討を中心に研究が進められてきた。弥生時代前半期については未だ調査例と分析を積み重ねつつある段階であろう。一方、弥生時代後半期に関しては調査事例の蓄積があり、様式論的に検討が行われている。

発表では弥生時代後期の当地における集落景観を構成した要素の検討の一環として、富山県江上 A 遺跡等に良好な検出例がある小型・環状の溝遺構を取り上げた。これは同遺跡では平地式倉庫などと報告されているが、その後の各報告書の検討等においては俎上にのぼることが少なかった遺構である。これら、住居とは考え難い小型の環状溝を「小環状溝」と呼び、江上 A 遺跡例を参考に平倉的な機能を想定することにし、県内の類似遺構を検索したところ、「小環状溝」には集落核（大型の竪穴（系）建物）あるいは高倉（掘立倉）との近接例がかなり高頻度で認められることがわかった。平倉との想定とは調和的な結果であるといえよう。検討を良好な検出例に限ったため一覧表の件数は少ないが、特徴が近似する遺構の断片的・部分的な検出例はさらに多いことが予想されるため、「小環状溝」の検討は当県における弥生時代集落遺跡の研究に新たな視点をもたらすことも期待される。

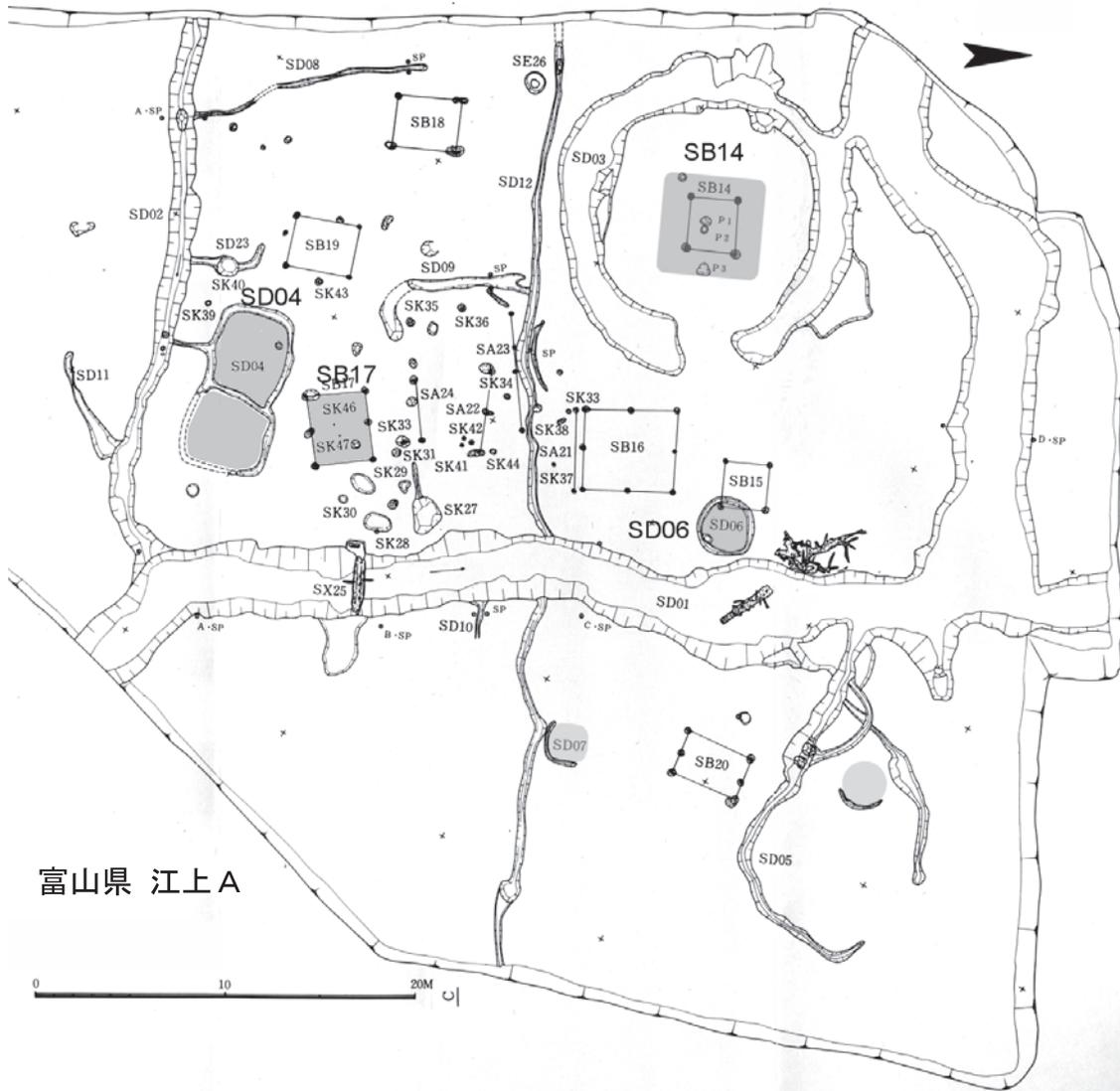
発表後の討議などから

各地の集落遺跡の調査事例が紹介され有意義であった。当県においては平野部における調査例が多く、検出される遺構群が理解し難い場合が少なくない。そのような場合でも遺構群は特殊性と普遍性を内包しているという認識をもって調査にあたる必要があると感じた。

「小環状溝」については、特に規模の大きなものについて、小型・無柱穴の「周溝をもつ建物」との峻別が困難なのではないかとの指摘を複数の参加者から受けた。遺跡個別の検討をさらにすすめるとともに今後の課題としたい。他形式倉との共伴・非共伴、時期や規模などの共通性といった点にも注目したい。

形式	集落核(N)			住居(H)				高倉(K)		土倉(D)		その他の建物等
	N1	N2	N3	H1	H2	H3	H4	K1	K2	D1	D2	
2次形式	竪穴系6・8	竪穴系4	竪穴系5	竪穴系4	竪穴系2	竪穴系0	掘立屋	布倉	掘立倉	穴倉	平倉	
3次形式												
4次形式												
...												

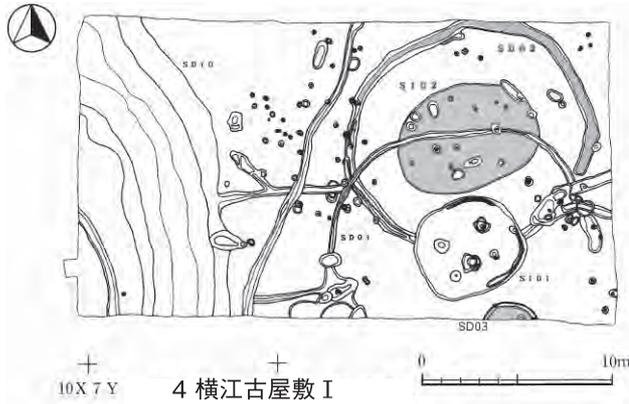
石川県の弥生時代後半における集落景観構成要素



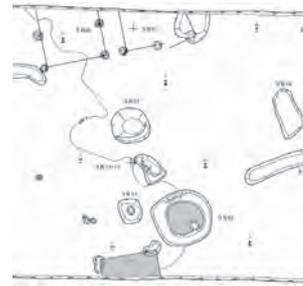
富山県 江上A

	遺跡名	旧国	立地	遺構名	平面形	大きさ内法	付P	溝幅	溝深さ	時期	備考
1	吉崎・次場 Ⅰ区	能登	低	SX12	張円方	380		70			
2	吉崎・次場 市13次	能登	低	SX01	張円方	160	○	40~60	30		高倉近 SD08近
3	押野うまわたり	加賀	低	SD10	円	320		35	18		1/4外
4	横江古屋敷Ⅰ	加賀	低	A区SD03	円	270		20~25	15		2/3外 SI02近
5	高橋セボネ	加賀	低	SD45	隅円方	200	○	40	30		高倉近
6	扇が丘ヤグラダ	加賀	低	H4年 SD01	張円方	380		30~70	10~15	中世?	同箇所では拡張造り替え 弥生か不明
7	扇台	加賀	低	SD01	張円方	200		35	5		ピット群近接
8	梅田BⅢ	加賀	低	下層 円形周溝	円	250	×	25	20		高倉近 中層は水田(深さ+20)
9	八里向山A	加賀	高	SX01	方	240	○	30	20		高倉近
10	八里向山A	加賀	高	SX02	長方	320*280	○	35	30		SB11近
11	奥原峠	能登	高	SX01	長方	470*430	?	15~25	15		SB01近
12	畝田B	加賀	低								2008年度調査 3基以上 高倉近
	江上A	越中		SD04	隅円方	400*370*2	?	55	25		高倉近 2基連接 炭化米出土
	江上A	越中		SD06	張円方	240	○	30~40	25		SB14近
	正印新	越中		SD12	隅円方	210	○	50	20	中世?	SB22近
	下老子笹川	越中		SI09K4	円	115	×	35	20		SI09床面で検出(深さ+20)
	瓜生堂Ⅰ区			溝139	円	180	×	30		中期	
	美し森B			3号特殊遺構	円	105	×	20~40	5~15	中期	

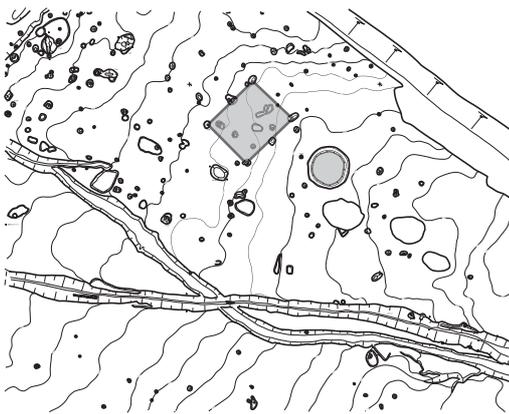
表 小環状溝一覧



10X7Y 4 横江古屋敷 I



2 吉崎・次場市13次

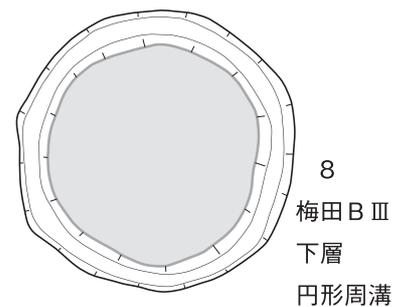


8 梅田B III 下層

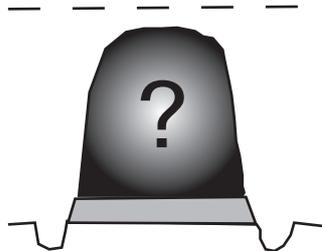


5 高橋セボネ

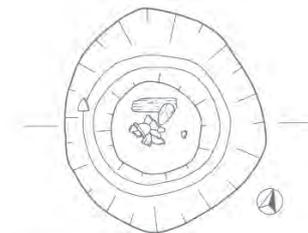
図 小環状溝の配置例 (約 1/400)



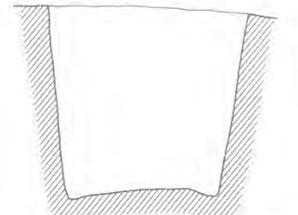
8 梅田B III 下層 円形周溝



復元案



32.70m



穴倉 (竹生野遺跡 24号土坑)

図 平倉の復元案と近似プラン穴倉との比較 (約 1/60)

金沢市内における山手の集落

金沢市埋蔵文化財センター 前田雪恵

はじめに - 金沢市の地勢と弥生遺跡の分布

金沢市は北東 - 南西に長く、その東半分は標高約80～120mの丘陵で、そこから複数の小河川が海や潟へ注いでいる。市域の西半分は平野で、海際は小規模な砂丘となる。

市内ではほぼ全域で発掘調査が行われており、弥生時代の遺跡の分布が『金沢市史』⁽¹⁾でまとめられている。そこではほぼ平行に流れる河川（伏見川・金腐川）によって市域を三つに大別し（A・B・C）、遺跡が集中する地区をグループ化した結果、Bの平野部に大きなグループがあり、拠点的な集落や、前期または中期から終末期に及ぶ存続期間の長い集落はここに集中していることがわかった。一方、A～C全ての丘陵裾や斜面など山手にも、少ないながら弥生時代の遺跡が分布している。

1 山手の遺跡の特徴

山手にある遺跡の要素を第1表にまとめた結果、平野部に所在する遺跡とは下記の点で異なることがわかった。なお竪穴系建物とは竪穴建物の一種と考えられているものを指し、床は半地下式で、地上に土壁を築き、壁の周りを周溝状に掘りこむ構造となっている。

存続時期が短く、その時期は後期後半～終末に集中する。

遺物に金属器を含まない。（塚崎遺跡は例外である。）

遺構に水利施設（井戸、溝）がない。

玉作りに関する遺構・遺物が少ない。（塚崎遺跡は例外である。）

同一遺跡内に集落と墓地が併存しない。（若松遺跡は例外か。）

建物は竪穴または竪穴系建物が多く、掘立柱建物、特に布掘建物は少ない。

建物の建替え回数、建物の数が少ない。

2 山手に集落を築く理由と目的

山手の集落は後発的に現れるから、その住人は、平地の集落から移住してきたものと前提する。そのうえで、山手の集落の性格を次のように推量してみた。

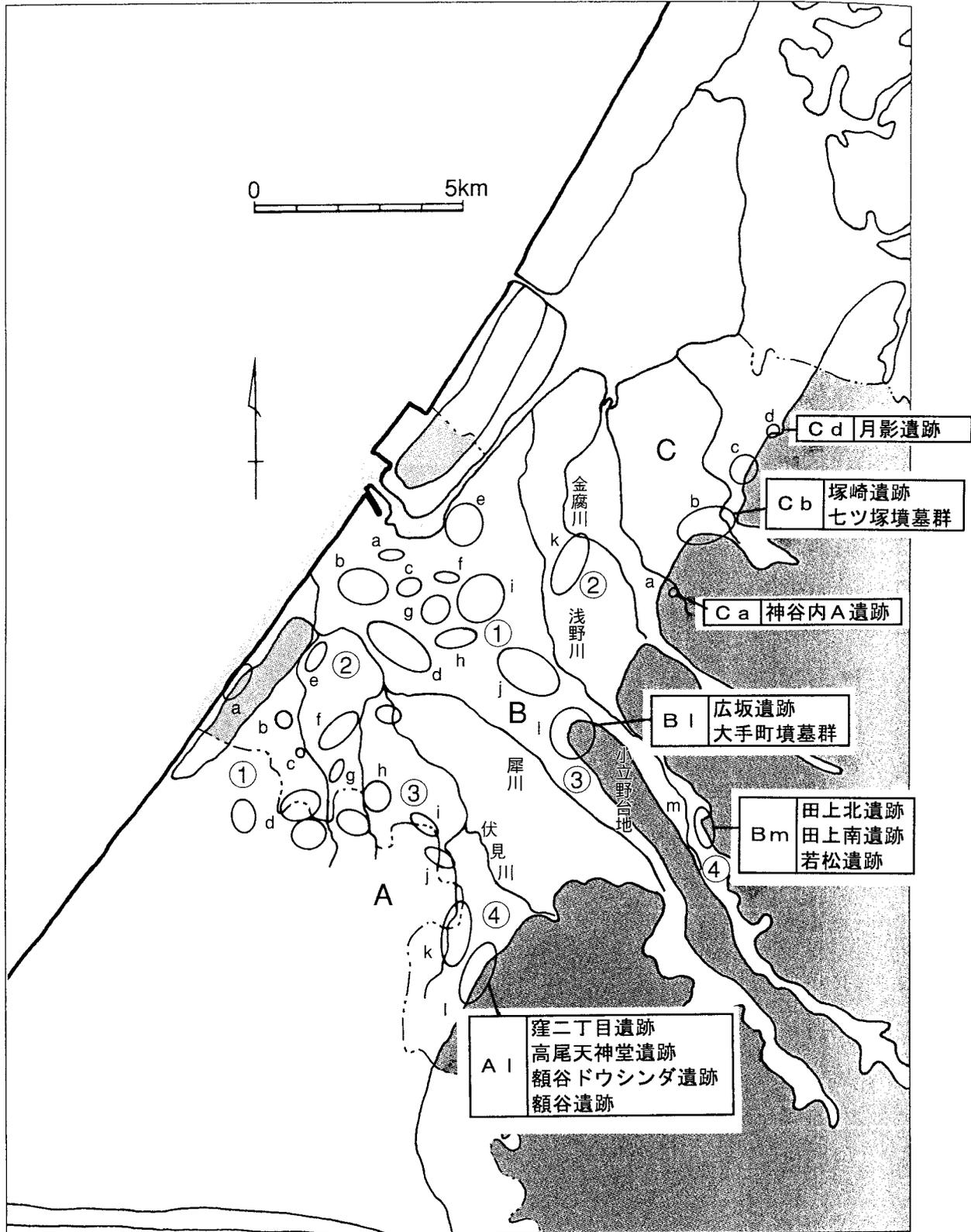
段丘下に平地があるにも関わらず段丘上に集落を築き、建物の戸数が少ない若松遺跡・田上北遺跡・田上南遺跡は、水害を避けるためのやむをえない選択の結果であり小規模な移住であった。

周囲に平地がない場所に集落を築き、建物の戸数が多く、建替えを行い、倉庫（布掘建物または大型貯蔵穴）をもつ塚崎遺跡・神谷内A遺跡・額谷遺跡は、何らかの意志を持って山手を選んだ大規模で安定した移住であった。

との対比として、全域を掘削しても戸数が少ない遺跡が発見された場合、平地から数家族単位で移住したもの、または集落のある機能だけを山手に移動させたものとする。

これらは戦時における「高地性集落」の要素を満たしていない。ならば山手に集落を築いた目的は何であったのか。今後の課題としたい。

註1 2004年 橋本澄夫ほか 「第一編 原始」『金沢市史 通史編1 原始・古代・中世』 金沢市



第1図 金沢市域の弥生時代遺跡の分布図（注1文献から改変）

- | | | |
|---|--|-----------------------------|
| <p>A 伏見川左岸</p> <p>安原川左岸 (a~d)</p> <p>安原川右岸~十人川左岸 (e~g)</p> <p>十人川右岸~高橋川左岸 (h~j)</p> <p>高橋川右岸~伏見川左岸 (k~l)</p> | <p>B 伏見川右岸~金腐川左岸</p> <p>犀川右岸~浅野川左岸沖積平野 (a~j)</p> <p>浅野川右岸~金腐川左岸沖積平野 (k)</p> <p>小立野台地先端周辺 (l)</p> <p>浅野川右岸河岸段丘 (m)</p> | <p>C 金腐川右岸 (a~d)</p> |
|---|--|-----------------------------|

第1表 金沢市内で発掘された主な山手の遺跡

地区	遺跡名	立地	検出面高 (m)	時期	検出遺構			土器以外の 遺物	備考	出典
					掘立柱・ 布堀建物	竪穴・竪 穴系建物	他			
Ca	神谷内A遺跡	丘陵先端	25~28	後半~終末	-	竪穴系3	土坑1・貯蔵穴1・土器だまり1	管玉6・砥石	周辺の尾根に古墳群あり	1
Cb	塚崎遺跡	丘陵先端の台地	29~32	後半~終末	掘立柱1・布堀3	竪穴27	土坑80余(貯蔵穴37・土坑墓か40余)・半環状溝2	鉄製工具・玉作・管玉・勾玉・ガラス玉・鏡片・土錘・匙状土製品	中核的集落大型竪穴複数集落をほぼ全掘隣の丘陵に七ツ塚墳墓群	2
	七ツ塚墳墓群	丘陵の側縁	55~71	後半~終末	竪穴1	-	台状墓3・方形周溝墓13・木棺墓38	鉄製工具・鉄製武器・管玉・勾玉	隣の丘陵に七ツ塚古墳群	3
Cd	月影遺跡	丘陵裾	20前後	終末	-	-	廃棄土坑1	貝殻・玉小片	調査面積32㎡	4
B1	広坂遺跡	段丘	24前後	中期後半~終末	竪穴2	-	溝・土坑・土器だまり1	-	-	5
	大手町墳墓群	段丘	23	後半~終末	-	-	方形周溝墓1・同区画溝1・同埋葬施設5・埋葬施設(木棺墓か)1	-	-	6
Bm	田上北遺跡		45~51	終末	-	掘立柱1	溝1	-	-	7
	田上南遺跡	河岸段丘上	52~53	終末	竪穴1	掘立柱2	土坑・溝	鉄鏃	-	8
	若松遺跡		42~49	終末~古墳初頭	竪穴3	掘立柱6	土坑・土器だまり1・周溝状溝7	石器・軽石	-	9
A1	窪二丁目遺跡	丘陵裾	44~45	後半	竪穴状1	-	土坑	砥石	-	10
	高尾天神堂遺跡	丘陵裾	43	終末	-	掘立柱1	土坑・弧状溝2	-	-	11
	額谷ドウシダ遺跡	丘陵裾	49	後半~終末	竪穴系1	-	-	-	-	12
	額谷遺跡	丘陵裾斜面	64~66	後半~終末	竪穴系9	掘立柱7・布堀1	土坑・溝	打製石斧・台石・砥石	-	-
59~64			後半~古墳初頭	竪穴系5	掘立柱4・片側布堀1	-	-	-	調査区は上記の続き	14

* 遺構がなく、遺物だけ発見されている遺跡は含まない。

* 「玉作」は玉の未製品もしくは工具をいう。

- 2002年 『金沢市神谷内A遺跡』金沢市文化財紀要184 金沢市埋蔵文化財センター
- 1976年 『塚崎遺跡』『北陸自動車道関係埋蔵文化財調査報告書』 石川県教育委員会
- 1976年 『金沢市七ツ塚遺跡』『北陸自動車道関係埋蔵文化財調査報告書』 石川県教育委員会
- 1962年 浜岡賢太郎・吉岡康暢 「加賀・能登の古式土師器」『古代学研究』第32号
- 2005年 『金沢市広坂遺跡(1丁目)』金沢市文化財紀要223 金沢市埋蔵文化財センター
- 2002年 『金沢市前田氏(長種系)屋敷跡』(財)石川県埋蔵文化財センター
- 2003年 『金沢市田上北遺跡・田上東遺跡-田上遺跡群-』金沢市文化財紀要198 金沢市埋蔵文化財センター
- 2006年 『金沢市田上南遺跡-田上遺跡群-』金沢市文化財紀要233 金沢市埋蔵文化財センター
- 2004年 『金沢市若松遺跡-田上遺跡群-』金沢市文化財紀要212 金沢市埋蔵文化財センター
- 2005年 『金沢市窪二丁目遺跡』金沢市文化財紀要218 金沢市埋蔵文化財センター
- 2000年 『金沢市内遺跡発掘調査報告書』金沢市文化財紀要158 金沢市埋蔵文化財センター
- 1984年 『金沢市額谷ドウシダ遺跡 金沢市無量寺B遺跡』金沢市文化財紀要44 金沢市教育委員会
- 1998年 『金沢市額谷遺跡』 石川県立埋蔵文化財センター
- 2006年 『金沢市額谷遺跡』(財)石川県埋蔵文化財センター

富山県の家と村

(財)富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 町田賢一

建物の変遷

弥生時代を4時期に分け建物を中心に県内の弥生時代の集落様相を概観したい。

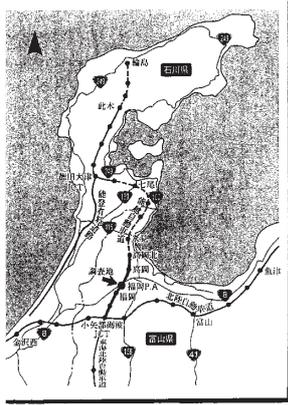
縄文時代晩期後葉～弥生時代前期 建物は、縄文時代以来伝統的な竪穴住居を主体とし、これに掘立柱建物が共存する。富山市古沢A遺跡で竪穴建物とみられる竪穴状遺構・柱穴状ピット群や巨大柱穴群、富山市開ヶ丘狐谷中山I遺跡で竪穴建物が1棟みついている。下老子笹川遺跡では、自然流路の岸辺に晩期後葉の建物14棟と晩期末葉の3棟からなる集落がみついている。遺跡の立地は、扇状地扇端部や丘陵裾部に集落がつけられる。なお、弥生時代前期は、大境洞窟がある程度である。

弥生時代中期 中葉から集落が構成される。建物は、「周溝をもつ建物」が出現し、射水市高島A遺跡・高岡市石塚遺跡・下老子笹川遺跡で2棟ずつ、黒部市堀切遺跡で1棟など県内各所で検出され、この時期には普遍的な建物と言える。遺跡の立地は、県西部を主とし、砺波平野の庄川扇状地扇端部、射水平野の旧放生津潟縁辺部に集落がつけられる。県東部は数少ないが、近年の調査で黒部市に堀切遺跡がみつかり、今後資料の増加が見込まれる。

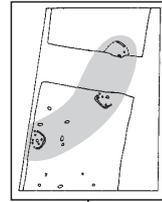
弥生時代後期 前時期に比べ遺跡が激増する。「周溝をもつ建物」は、上市町江上A遺跡・江上B遺跡・魚津市佐伯遺跡で1棟ずつ、下老子笹川遺跡で20棟、氷見市上久津呂中屋遺跡で3棟などがみついている。これらの遺跡では、竪穴建物や掘立柱建物が付随し、建物の構造でその用途を変えていたものとみられる。この他に魚津市湯上B遺跡や氷見市稲積天坂遺跡などのように竪穴建物のみからなる集落もあり、前者とは異なる集落の性格が伺える。遺跡の立地は、前時期が低地を主体としていたのに対し、台地や丘陵上にも集落がつけられる。県西部では、庄川扇状地扇端部や沖積地などの低地が多い。県東部では、常願寺川扇状地扇端部・沖積地・丘陵先端などに集落がつけられる。

弥生時代終末期 遺跡数は前時期とほぼ同数であるが、建物は「周溝をもつ建物」が下老子笹川遺跡と小矢部市下川原遺跡のみでこのほかは竪穴建物が主体となる。竪穴建物は、富山市南部I遺跡・小矢部市平桜川東遺跡で1棟ずつ、富山市富崎遺跡・鍛冶町遺跡で3棟ずつ、富山市打出遺跡・射水市中山南遺跡で9棟ずつなどがみついている。またこの時期から環濠集落(富山市新堀西遺跡・射水市日宮城跡など)や高地性集落(魚津市天神山城跡・富山市白鳥城跡など)が出現する。遺跡の立地は、前時期同様県内各地各所に集落がつけられる。一般集落は富山平野・射水丘陵・砺波平野など、環濠集落は沖積地および低丘陵、高地性集落は丘陵頂部につけられる。

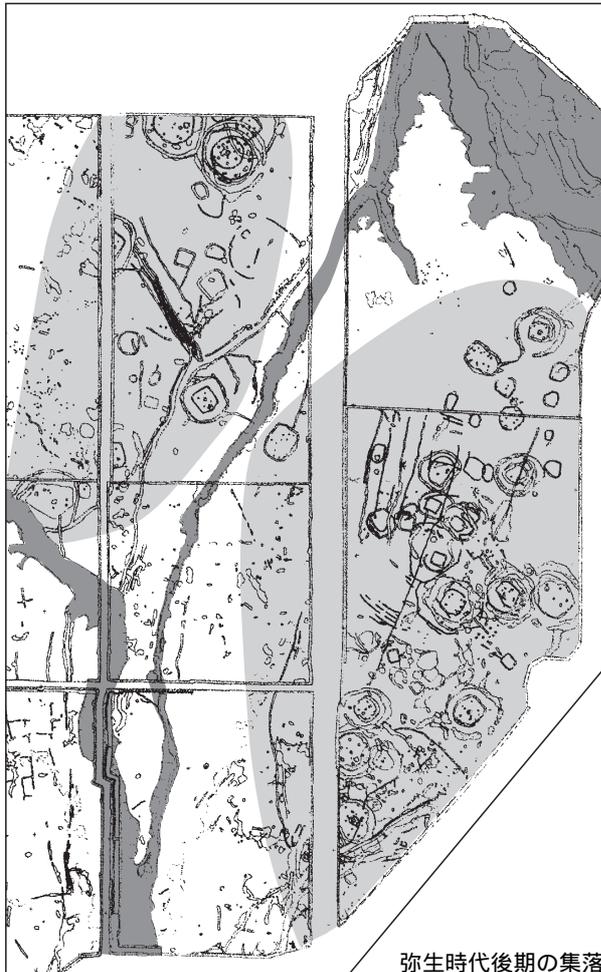
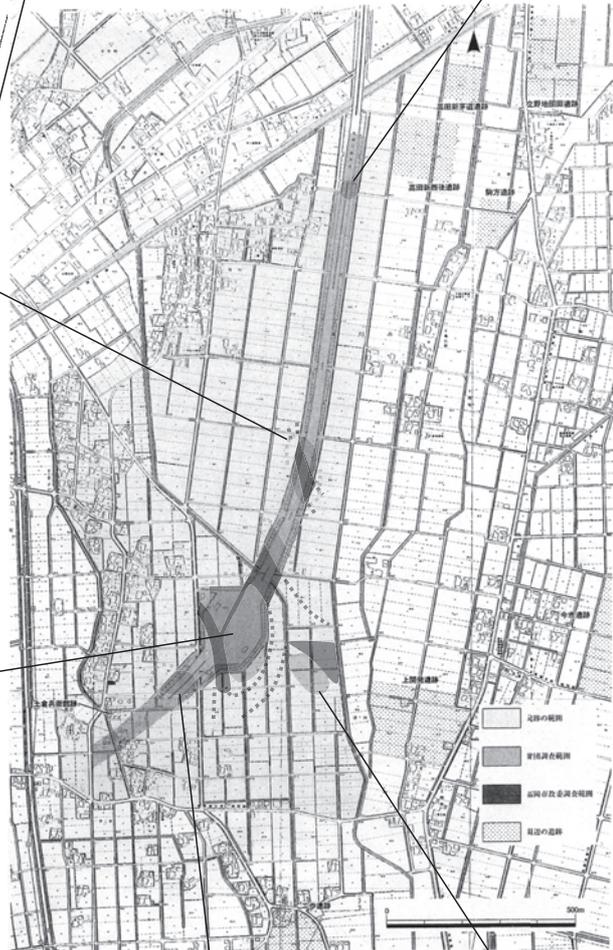
まとめ 以上のように富山県では、中期中葉以降建物を伴う集落がつけられ、扇状地扇端部など低地部に展開する。後期になると、遺跡が激増し、扇状地扇端部や沖積地を中心に県内各所に集落が営まれる。終末期には、扇状地扇端部などの低地部に加え丘陵部にも集落が営まれ、戦時下にあるためか環濠集落や高地性集落が誕生する。このように各時期で集落の様相が異なり、弥生時代を通して集落が営まれる遺跡は数少ない。こうしたなかで下老子笹川遺跡は、遺跡内で地点を変えながらもほぼどの時期の建物もあり、県内の弥生時代の集落様相を考える上で非常に貴重な資料になるであろう。



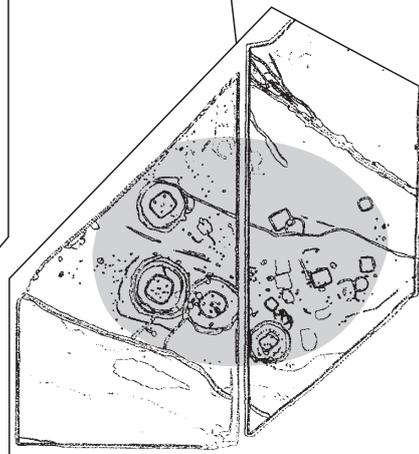
縄文時代晩期
末葉の集落



縄文時代晩期後葉の集落



弥生時代後期の集落

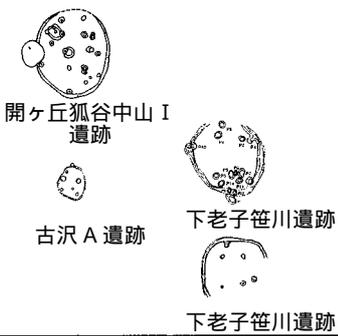
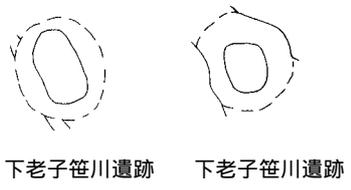
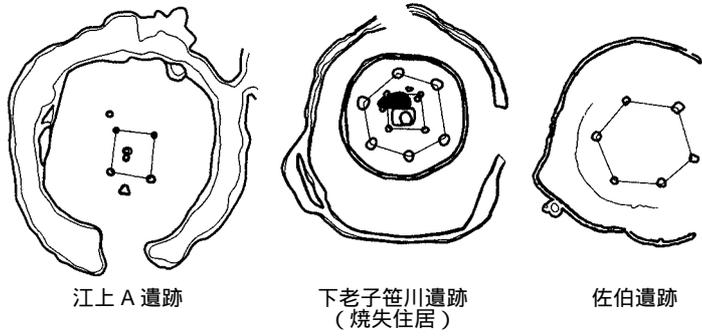
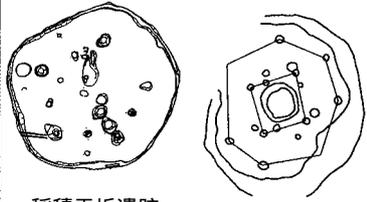
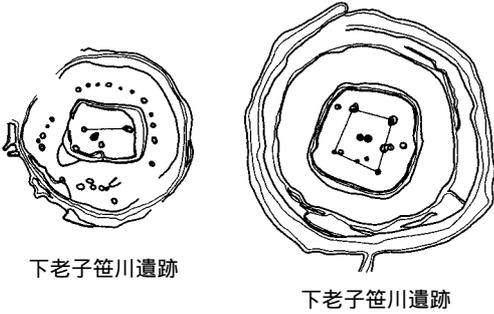
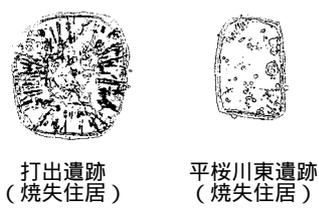


弥生時代終末期の集落



弥生時代中期
の集落

第1図 高岡市下老子笹川遺跡の集落 (1/2,000)

	周溝をもつ建物	竪穴建物
縄文時代晩期、弥生時代前期		 <p>開ヶ丘狐谷中山 I 遺跡 古沢 A 遺跡 下老子笹川遺跡 下老子笹川遺跡</p>
弥生時代中期	 <p>高島 A 遺跡 (焼失住居) 石塚遺跡 高島 A 遺跡 (焼失住居)</p>	 <p>下老子笹川遺跡 下老子笹川遺跡</p>
弥生時代後期	 <p>江上 A 遺跡 下老子笹川遺跡 (焼失住居) 佐伯遺跡</p>	 <p>稻積天坂遺跡 下老子笹川遺跡</p>
弥生時代終末期	 <p>下老子笹川遺跡 下老子笹川遺跡</p>	 <p>打出遺跡 (焼失住居) 平桜川東遺跡 (焼失住居)</p>

第 2 図 富山県内の建物変遷図 (1 / 500)

新潟県における弥生時代の家と村

(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団 滝沢規朗

海岸線の総距離が約300kmを有する新潟県は地域・時期毎に土器様相が異なる。ここでは地域を7つに、時期は3つに大別して必要に応じて細別する(第1図・第1表)。時期区分は集落・遺跡の消長をおおむね反映しているが、地域区分は便宜的なもので土器様式を十分には反映していない。弥生時代の建物は、23遺跡で100棟程確認できる。建物を平地と竪穴に大別し、柱穴配置や施設等で細別したが、属性は重複しており区分・系譜に問題を残す。遺跡の立地は丘陵上と低地の大別にとどめた。建物の大きさ・平面形は検出状況が良好なものの数値で認定した(第3・4図)。以下、時期区分毎に概要を記す(第6図)。

時期区分1：遺跡数は少ない。検出された遺構は再葬墓が主体であったが、丘陵上の尾立遺跡(信濃川右岸)・低地の猫山遺跡(阿賀北)で掘立柱建物が確認できる。いずれも柱の掘り方が大きく、独立棟持柱を有するものが目立つ。猫山遺跡の建物1は落棟式で、縄文時代晩期後葉から集落構成を開始する青田遺跡・藤平遺跡で類例が認められる(第5図)。この両遺跡は竪穴建物を伴わない点でも共通する。当該期の建物は縄文晩期後葉からの系譜を継承する段階との指摘がある[渡邊2005]

時期区分2：遺跡跡が増加する。建物が検出された遺跡はいずれも低地で、道端遺跡(阿賀北)、下谷地遺跡(柏崎平野)、吹上遺跡(頸城)、平田遺跡(佐渡)、来清東遺跡(魚沼)がある。道端遺跡・来清東遺跡とそれ以外で様相が異なり、緑色凝灰岩製の細形管玉を生産する3遺跡は円形の広溝式平地式建物を掘立柱建物が伴う。掘立柱建物は時期区分1のものに比べて柱穴が小さく、独立棟持柱を欠くなどから別系譜であろう(第6図)。平田遺跡で掘立柱建物を欠くが、これは狭小な調査面積が起因すると考える。

広溝式平地式建物は灰穴炉主体で、阿賀北と信濃系土器主体の魚沼まで分布していない。分布圏外の両遺跡で竪穴建物が検出された点、地床炉である点を重視したい。なお、竪穴建物は吹上遺跡でも確認されているが、いずれも玉作り工房と認識されており、道端・来清東遺跡例とは同一視できない。

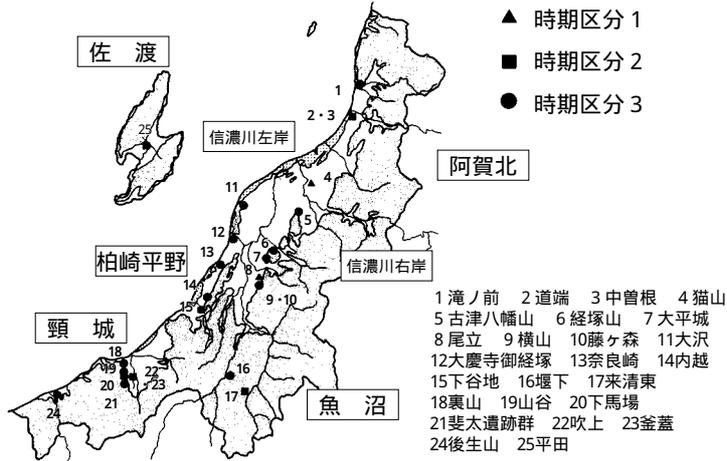
時期区分3：細別の2期に丘陵上で遺跡数が飛躍的に増加する[滝沢1999]。竪穴建物が圧倒的に多く、掘立柱建物は明確でない。広溝式平地式建物は低地(頸城・子安遺跡)でのみ存在する。竪穴建物の平面プランは東北系土器圏の阿賀北は円、北陸北東部系土器圏は隅丸方形を主体に、長方形プラン・多角形プランが頸城でのみ認められる。北陸北東部系土器圏の竪穴建物は、隅丸方形・主柱4本を基本とする。大型では多角形・主柱多角、主柱4本+支柱が、小型は主柱2本・なしが加わる。頸城で細別時期の2期で顕著な長方形プランは中・小型にのみ認められ、主柱2本・なしが多い。地理的に信濃の影響を想定したい。地域毎の動向として、細溝式竪穴建物が信濃川流域の両岸でのみ確認されること、支柱穴が確認できるのは信濃川左岸・柏崎平野と比較的海岸に近い点などがある。

屋内貯蔵穴は規模に係わらず2期から認められる。屋外貯蔵は穴蔵と思われ、布掘りの掘立柱建物は確認できない。穴蔵は方・円形プランで、集落内で2基が隣接する例が確認できる。研究会当日に話題となった環状小溝遺構は、丘陵上の奈良崎遺跡等(信濃川左岸)や、低地の遺跡で確認でき、今後類例は増加すると考える。

【主要引用文献】

滝沢規朗 1999「第3章第3節 集落」『新潟県の考古学』

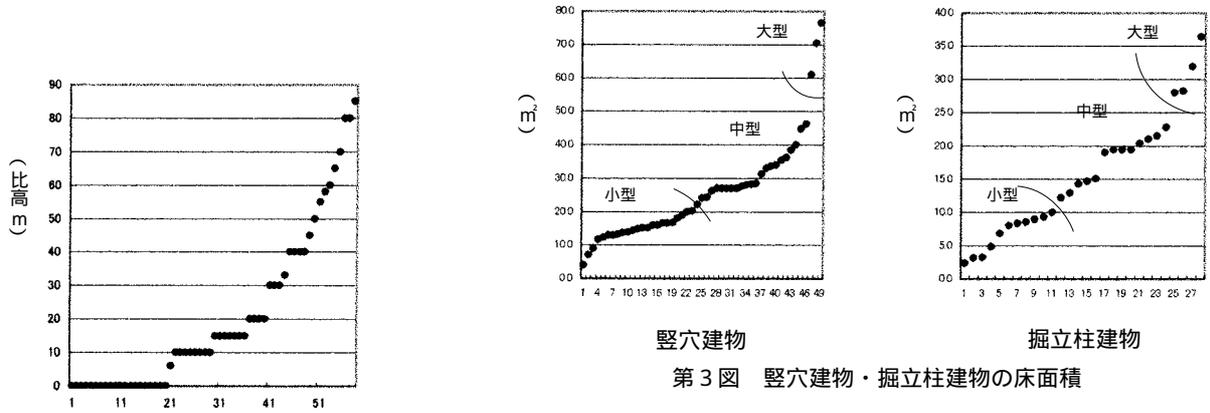
渡邊裕之 2005「新潟県の事例(下越)」『中部弥生研究会第11回例会発表要旨(当日資料)』



第1表 時期区分と併行関係

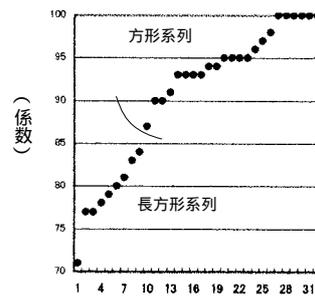
本稿	越後			北陸	北陸(南西部)型式
	大別	細別	田嶋2007		
区分1	渡辺1999	前期			
		中期1			
		中期2			
区分2			I期		小松
			+		磯部
			II期		専光寺-戸水B
区分3	1期		1期	1群 V-1 V-2 V-3	猫橋
	2期		2期	2群 2-1 2-2	法仏
		3期		3期	3群 3-1 3-2
	4期		4期	4群	白江
	5期		5期	5群	
	6期		6期	6群	

第1図 県内の弥生集落分布図と地域区分

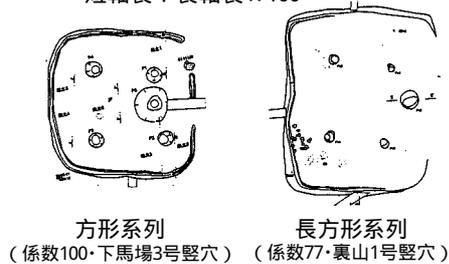


第3図 竪穴建物・掘立柱建物の床面積

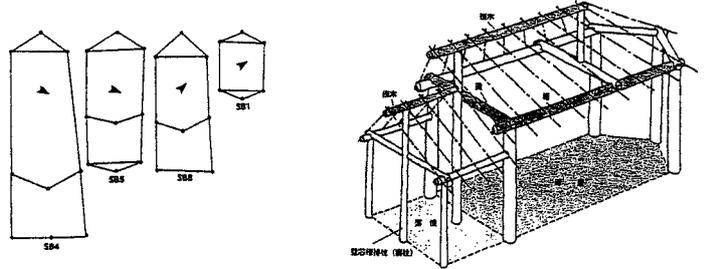
第2図 弥生時代後期(時期区分3)の遺跡立地



短軸長 ÷ 長軸長 × 100



第4図 竪穴建物の平面形

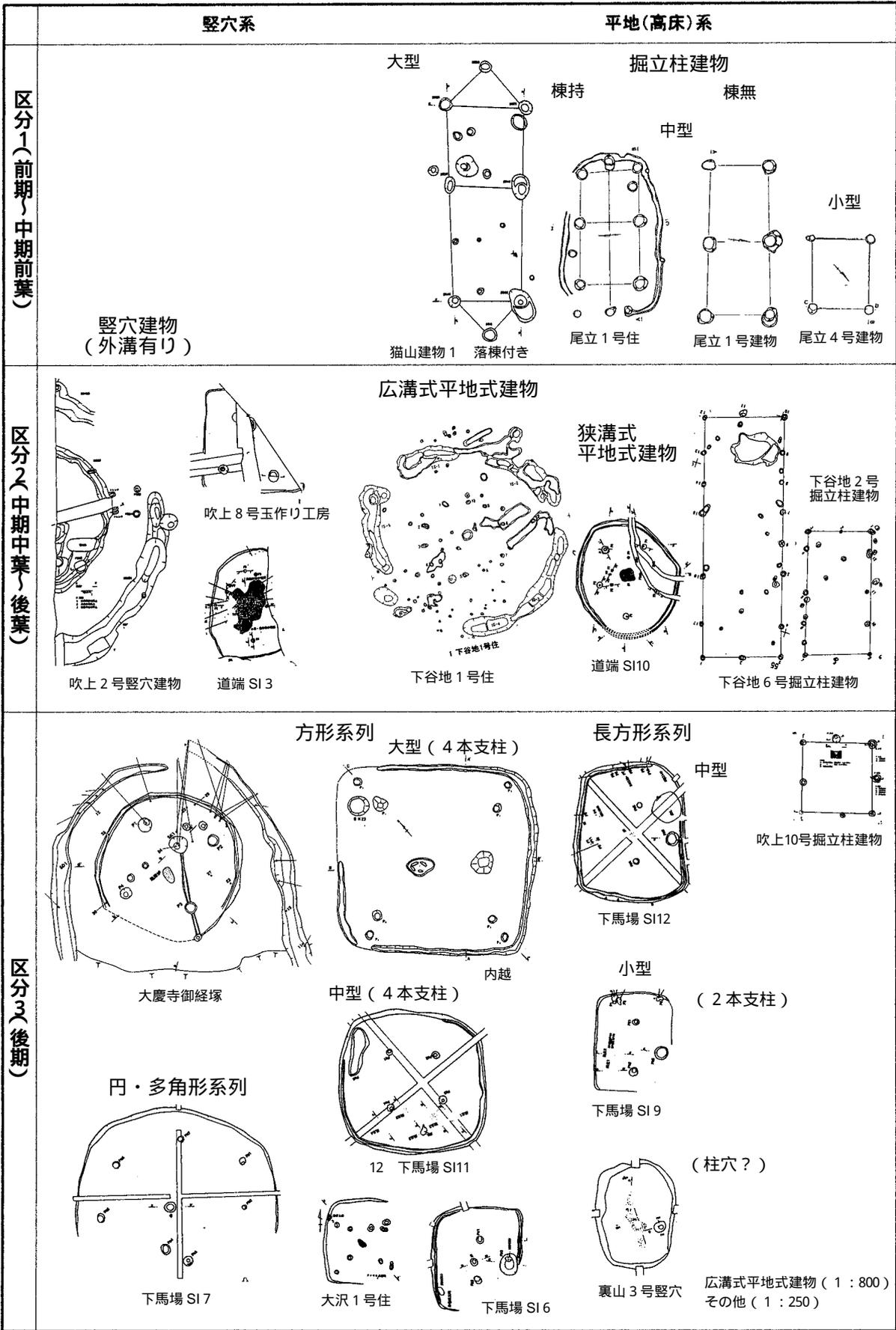


第5図 縄文時代晩期後葉の掘立柱建物

第2表 地域別建物の組み合わせ

時期区分	阿賀北	信濃川右岸	信濃川左岸	柏崎平野	魚沼	頸城	佐渡
1	掘立柱建物	掘立柱建物					
2	狭溝式平地 竪穴(楕円)			広溝式平地 掘立柱建物	竪穴(円)	広溝式平地 掘立柱建物 竪穴(円・方)	広溝式平地
	【東北・北陸】	【北陸】	【北陸】	【北陸】	【信濃】	【北陸・信濃】	【北陸】
3	竪穴(円)	竪穴(隅丸方)	竪穴(隅丸方)		竪穴(楕円?)	竪穴(隅丸方・長方形)	掘立柱建物 広溝式平地
	【東北】	【北陸(北東)】	【北陸(北東)】	【北陸(北東)】	【東北・信濃】	【北陸(北東)】	【北陸(北東)】

【 】内は主体となる土器の地域性



第6図 建物の変遷

東北地方日本海沿岸における弥生時代の家と村

秋田市教育委員会秋田城跡調査事務所 小野隆志

1 日本海沿岸における住居跡の分布

山形県・秋田県・青森県（津軽地区）における住居跡の検出数は、山形県2遺跡10軒、秋田県11遺跡19軒、青森県4遺跡7軒となっており、青森県は太平洋沿岸を含めると20遺跡76軒と非常に多い。

山形県では日本海沿岸からの検出例はないが、内陸の2遺跡はいずれも低湿地の自然堤防上に立地する。また、炭化米やアワ・ヒエが検出されていることから水田経営の可能性が期待される。秋田県では台地や段丘上に立地し、前期が最も多く、中期以降は住居跡の有無に関わらず遺跡数が激減している。青森県では日本海沿岸に少なく、太平洋側の南部・上北地区の検出例が多数を占めており、いずれも台地や段丘上に立地する。秋田県同様に中期以降の遺跡数が激減している。

2 住居の構造について

ほとんどが炉を中心とする対角線上に立てられた4本の主柱穴からなる竪穴住居であるが、5～6本柱の例や、小柱穴からなる側柱のみの例も見られる。主柱穴に加えて周溝の内外に側柱を立てる例があり、壁立式の住居であったことが分かる。特に中心から主柱穴を結んだ線の延長上に配置された柱穴はサスを受ける側柱であったと思われ、その他の柱穴は側桁を受けていたと考えられる。

炉跡は簡易な石囲炉を用いる例が多く、地床炉として検出されたものでも周辺から石が検出された例があり、元は石囲炉であった可能性がある。住居の平面形態は円形あるいは楕円形が多い。

これらの特徴は縄文晩期からの継続性が見られるものであり、弥生文化の受容に伴う住居構造の変化は小さかったと思われるが、前期の住居跡に竪穴部分の直径8m、面積50㎡を超える大形のものが目立ち、縄文晩期に比べて一時的な大形化が見られる。

3 集落の形態について

ほとんどの集落跡は竪穴住居跡1～2軒からなる小規模なものであり、住居が建て替えられた例は半数に満たないことから、やや短い期間に単独で営まれていた集落であったと考えられる。

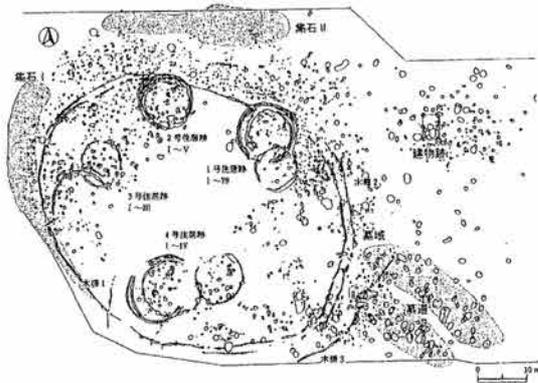
秋田市の御所野台地では、台地上の広い範囲で調査が行われたが、複数の住居が建て替えを行う継続性をもちつつ、その他の施設を有する集落跡として確認されたのは地蔵田遺跡のみであった。その他の遺跡は継続期間が地蔵田遺跡と重複すると考えられ、集落跡の他に墓域の遺跡も発見されていることから、地蔵田遺跡を拠点として異なる様相の遺跡が関連して存在していたことが考えられる。また、中期の地蔵田遺跡廃絶後に続く遺跡が台地上から発見されておらず、集落のあり方が大きく変化することが考えられる。大館市諏訪台C遺跡も同様の拠点となる集落であったと思われる。

なお、山形県・秋田県の3遺跡から炭化米や籾圧痕土器片が発見されているが、水田遺構や農耕具が伴った例はなく、集落と水田経営を直接結びつけるには至っていない。

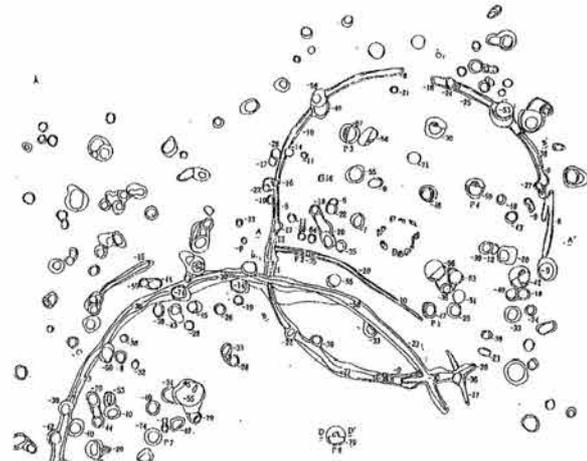
東北地方日本海沿岸地域の弥生時代住居検出遺跡一覧

番号	所在地	遺跡名	時期	軒数	主柱数	周溝の有無	炉跡	建替の有無	その他
山形県									
1	山形市	河原田遺跡	中期	3軒	4本	不明	不明	無	木植遺5基
2	山形市	向原遺跡	中～後期	7軒	5～6本、側柱	有1軒(側柱伴)	地床炉	無	炭化米・アワ・ヒエ出土
秋田県									
3	大館市	諏訪台C遺跡	前期	5軒	4本カ、側柱	有4軒(側柱伴1軒)	石囲炉、地床炉 土器埋設炉	1軒で1回	広場を中心に環状に配置 焼土遺構5基、集石3箇所 炭化米・羽圧痕土器片出土
4	男鹿市	横長根A遺跡	前～中期	1軒	4本	有(側柱伴)	地床炉(立石伴)	無	
5	象潟町	上熊ノ沢遺跡	前期	1軒	4本	無	石囲炉	無	
6	大仙市	小出IV遺跡	前期	1軒	4本	有(側柱伴)	石囲炉	無	
7	秋田市	鳳無台II遺跡	前期	1軒	4本	有(側柱伴)	石囲炉	2回	縄文晩期～弥生前期の土坑70基
8	秋田市	坂ノ上F遺跡	前期	1軒	4本柱	有(側柱伴)	石囲炉カ	無	
9	秋田市	地蔵田A遺跡	前期	1軒	4本柱カ	有(側柱伴)	地上炉カ	無	土坑14基
10	秋田市	地蔵田遺跡	前～中期	4軒	4本(5本カ)	有(側柱伴)	石囲炉 土器埋設路	2～6回	木柵に囲まれた集落 柵外に墓域や掘立柱建物 羽圧痕土器片出土
11	秋田市	湯ノ沢A遺跡	中期	2軒	4本	有1軒(側柱伴)	地床炉	3回以上	竪穴状遺構・土器埋設遺構を伴う
12	秋田市	狸崎A遺跡	中期	1軒	不明	無	地床炉	無	
13	小坂町	はりま館遺跡	後期	1軒	柱跡無し	無	地床炉	無	井戸跡(中期)1基、土坑墓2基
青森県									
14	深浦町	津山遺跡	前期	2軒	4本	有	石囲炉	1軒で1回	土坑墓、柱穴群
15	大鰐町	上牡丹森遺跡	前期	1軒	3本以上	有	石囲炉	無	
16	中泊町	郷文沼遺跡	前期	2軒	不明	無	石囲炉	無	
17	平賀町	駒泊遺跡	中期	2軒	不明	無	焼土面	無	

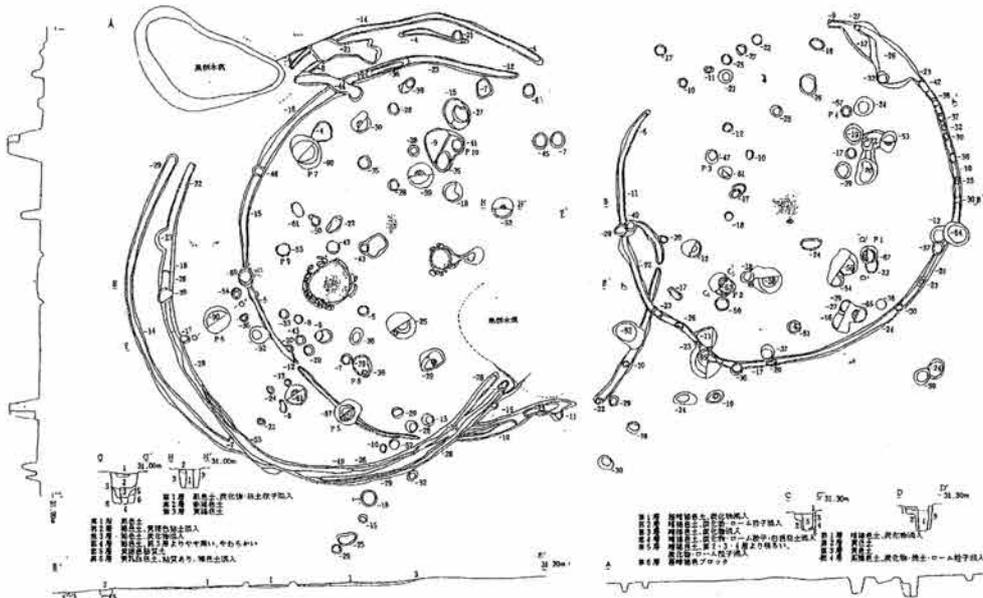
10 地蔵田遺跡



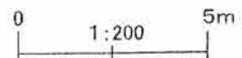
遺構配置図



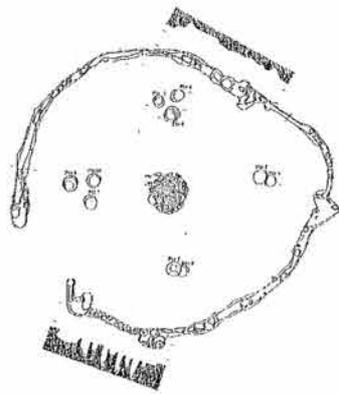
3号住居跡 (I部分) (前期)



4号住居跡 (I～IV) (前～中期)

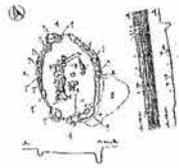


7 風無台Ⅱ遺跡

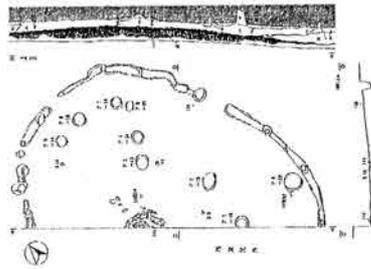


SI37(前期)

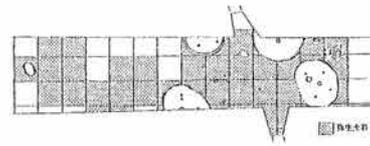
3 諏訪台C遺跡



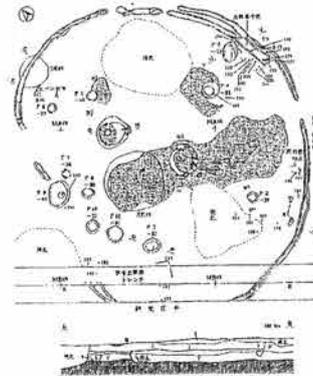
SI28(前期)



SI34(前期)

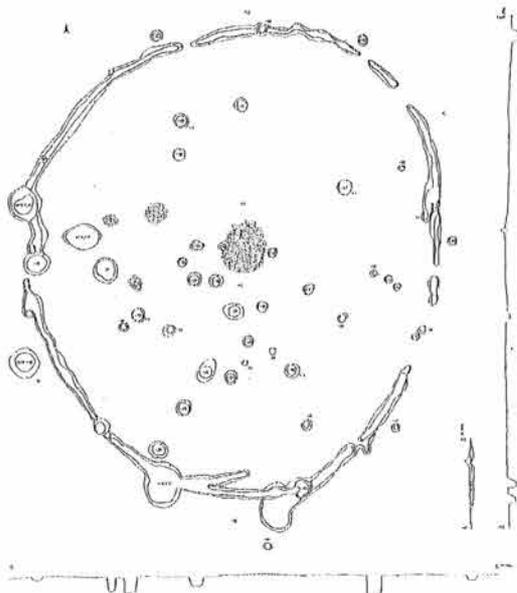


遺構遺物分布図



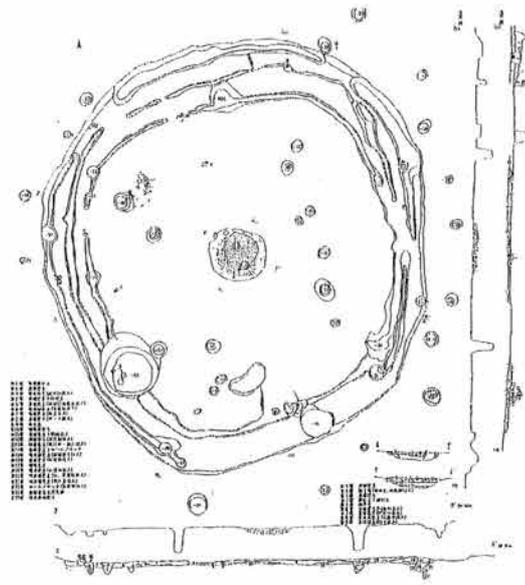
SI61(前期)

8 坂ノ上F遺跡



7号住居跡(前期)

11 湯ノ沢A遺跡

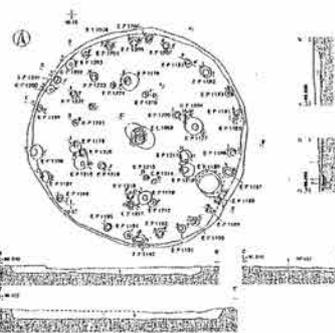


1号住居跡(中期)

2 向河原遺跡

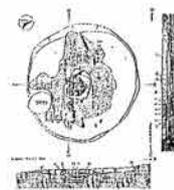


ST2615(中期)

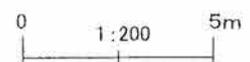


ST1068(後期)

13 はりま館遺跡



SI90(後期)



続縄文時代前葉から中葉の集落と住まい

北海道大学埋蔵文化財調査室 守屋豊人

はじめに

本報告の目的は、続縄文時代前葉と中葉に位置づけられる集落址を取り上げ、北海道における集落址の特色を示すことである。北海道における集落址の特色を遺構（竪穴住居址や土壇や屋外炉址）の組み合わせ及び、竪穴住居址の重複状況から概観すると、道南部、道央部、道東部に区分される。ここでは近年発掘調査され、報告された遺跡を取り上げ、各地域の集落に関する特色を概観する。なお、今回の報告では続縄文時代の時期区分として、鈴木信によってまとめられた続縄文土器の土器変遷観を参照した（鈴木2008）。

1. 道南部 函館市茂別遺跡（北海道埋蔵文化財センター1998）

標高約40mの海岸に面した段丘に位置する茂別遺跡は、発掘調査によって、縄文時代早期～晩期、続縄文時代前葉～中葉の資料が発見された。続縄文時代の遺構・遺物はⅢa層と称された地層に存在した。続縄文時代の遺構には竪穴住居址6基、土壇墓38基、土坑18基、石囲い炉2基、屋外炉址と考えられる焼土址54基があった。重複することがなかった各遺構は、結果的に遺構ごとに分布が偏って発見されたと現状では考えられる（図1）。竪穴住居址は海岸に近い場所に作られ、石囲い炉や焼土址は竪穴住居に近接した位置に存在した。土壇墓や土坑は竪穴住居址と離れた陸地側に存在した。竪穴住居址6基の規模、平面形態は、直径約2.6m～11mまでの円形（すべて）であった。竪穴内の中央には炉址（焼土址および石囲い炉）が存在し、各々の住居の壁高が平均10cmと浅かった。

茂別遺跡では竪穴住居址や土壇墓や焼土址が重複することなく、結果的に各遺構の分布が偏った状態で集落址が形成され、続縄文文化中葉に集落が廃絶されたようである。

2. 道央部 札幌市 K39遺跡人文・社会科学総合教育研究棟地点（北海道大学2004）

北海道大学構内に存在する K39遺跡人文・社会科学総合教育研究棟地点では、河川近くの微高地に立地した集落址が、続縄文時代前葉（14a層）、続縄文時代中葉（13b層、12c層、12a層）の合計4つの地層から発見され、間層を挟みながら重複していた（図2）。14a層では竪穴住居址3基、土坑7基、屋外炉址10基、焼土粒集中20箇所、炭化物集中49箇所が発見された。竪穴住居址はすべての平面形態が円形で、中央に炉址がみられた。12c層では竪穴住居址7基、土坑27基、屋外炉址10基、焼土粒集中7箇所、炭化物集中15箇所が発見された。竪穴住居址すべての平面形態は円形の竪穴に舌部とよばれる張り出しがみられ、竪穴の中央に炉址が存在した。12c層の竪穴住居址の内、第1号竪穴住居址は第10号竪穴住居址（13b層）の真上に掘り込まれ、両者は上下に重複していた。同様なことは12c層の第11号竪穴住居址と13b層の第12号竪穴住居址にもみられた。

この地点では、続縄文時代前葉と中葉の集落址が河川近くの微高地で若干の位置を代えながら重複すること、また、続縄文時代中葉以降、竪穴住居址が上下に重複して構築される特徴がある。

3. 道東部 北見市常呂川河口遺跡（北見市教育委員会2007）

この遺跡は常呂川によって形成された海岸近くの微高地（標高約4m）に位置し、縄文時代、続縄文時代、擦文時代（オホーツク文化を含む）の集落址であった。各時代の遺構、特に竪穴住居址（250基以上）は微高地上で著しく重複した状況であった（図3）。続縄文時代前葉から中葉の遺構には、竪穴住居址、土壇墓、埋甕、集石、屋外炉址がみられた。続縄文時代中葉に位置づけられる竪穴住居址3基（109号竪穴、109a号竪穴、109b号竪穴）は同じ場所で重複していた事例の一つである（図3）。

道東部の遺跡は、遺構の組み合わせだけでなく、竪穴住居址の重複や通時代的な竪穴住居址の重複

に特徴がみられる。

おわりに

道南部、道中部、道東部の遺跡を取り上げ、北海道における縄文時代の集落の特色が遺構（特に竪穴住居址）の重複状態にみられ、3つに区分されることを示した。数少ない遺跡をあつかつて特色を述べたため、課題が多く存在するが、一つの傾向は示したと考える。

引用文献

北見市教育委員会 2007 『常呂川河口遺跡(7)』

鈴木 信 2008 「縄文文化の鉄器・石器・渡海交易の関係について」『縄文文化とは何か』2008年度北海道考古学会研究大会資料

北海道大学 2004 『K39遺跡人文・社会科学総合教育研究棟地点発掘調査報告書』

北海道埋蔵文化財センター 1998 『上磯町 茂別遺跡』

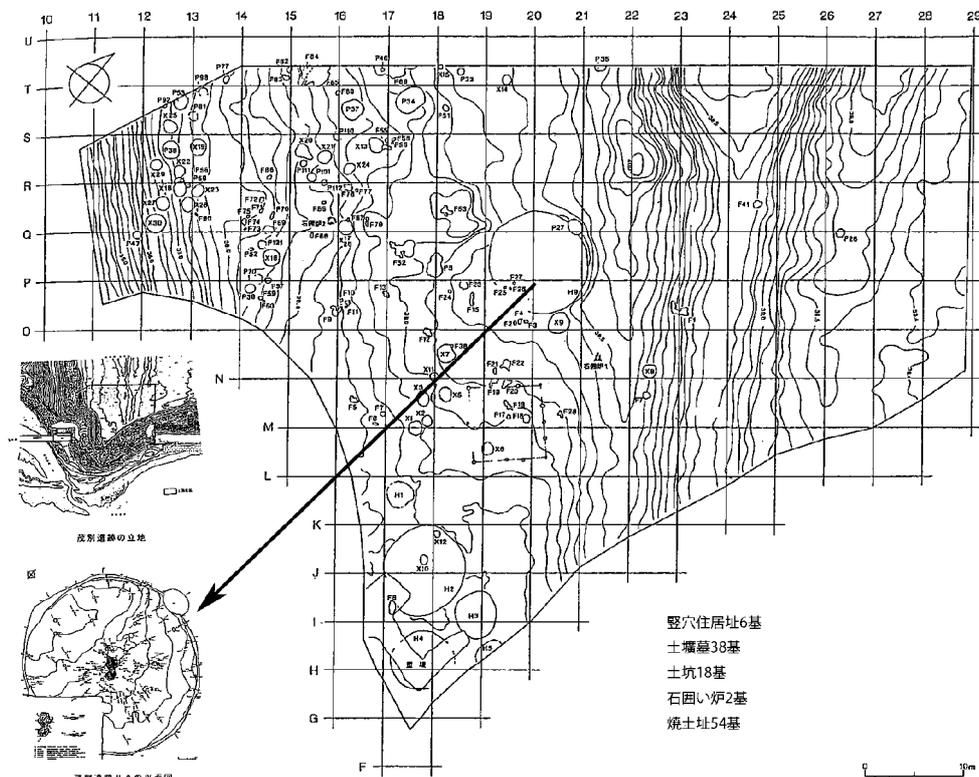


図1 茂別遺跡の遺構分布

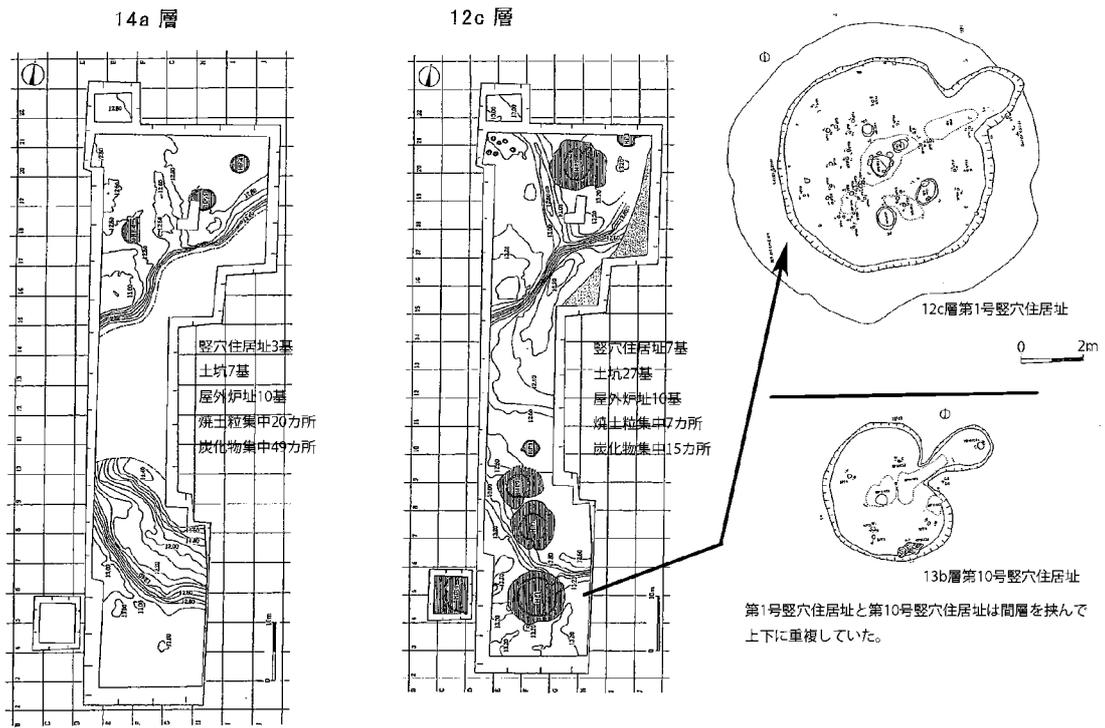


図2 K39 遺跡人文・社会科学総合教育研究棟地点の遺構分布

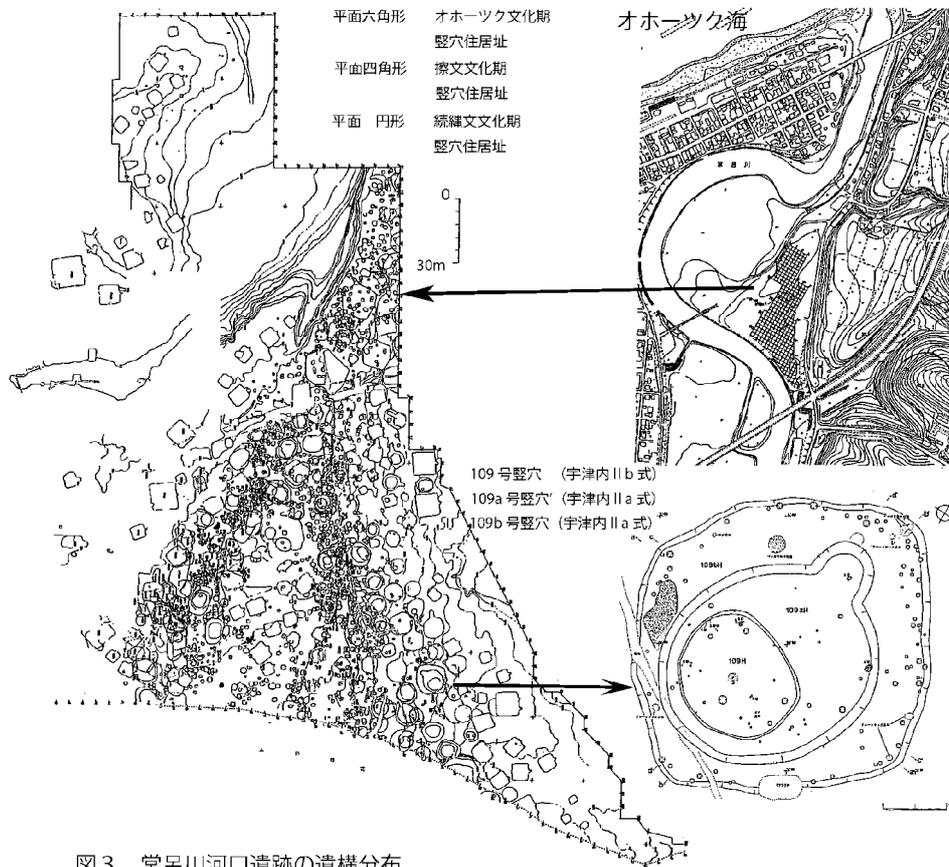


図3 常呂川河口遺跡の遺構分布

討論と展望

(財)石川県埋蔵文化財センター 安 英樹

地域別発表の後、討論を行った。討論では「弥生時代の家」、「弥生時代の村」の順で各地域の様相を確認した。最終的には「暮らし」について考えることを目標としていたが、時間の関係から、踏み込むことができなかった。ここでは当日をふり返りつつ、要点を記しておきたい。なお、研究会では「竪穴住居」と「竪穴建物」という用語が並存した。今回の発表内容では、その差異は後者が機能を特定しない意図があるという点のみであり、両者は構造的には同じものを指していると判断できるので、ここでは「竪穴建物」に統一しておく（「平地住居」と「平地建物」も同じ）。

弥生時代の家

各地域で住居に比定される「家」の平面形と主柱配置を比較した。炉などの施設や大きさについては、一律に比較できないので、参考にとどめた。九州は松菊里型住居の波及により前期から円形・2本主柱が発達する。後期にベット状遺構が一般化する様相は独特である。山陰は中期に円形・4本主柱が、後期に多角形・多主柱が明確になる。北陸は中期に多主柱の平地建物が明確になり、後期には竪穴建物・平地建物ともに大型が円形か多角形で多主柱、中小型が四角形で2～4本主柱に明確に分化する。富山県では中期の竪穴建物や二重の主柱配置など、希少な事例が確認されていることは注目に値する。新潟県は北陸他県と共通する部分も多いが、中期前半まで縄文時代の建物形式が確認でき、中期後半以降も東日本系の建物形式が確認できるなど、様相がやや異なる。東北は円形か楕円形で4本主柱が多い。地床炉が石囲炉をもつ。北海道は円形・不規則主柱で石囲炉をもつ。

以上から、「弥生時代の家」は地域により大きく異なることが明らかになった。概ね九州から北陸までは縄文時代とは明確に異なる「弥生時代の家」が確立するエリアとなる。古墳時代への移行に際しては方形・4本主柱に収束していくエリアでもある。東北と北海道は逆に縄文時代からあまり変化しない「弥生時代の家」が展開するエリアとなる。ただし、東北では前期に大型化するという九州と共通する変化を示しており、東・北へ波及した弥生文化の影響が想定できる。

弥生時代の村

弥生時代の「村」を構成する遺構の配置を各地域で比較した。立地については、各地域の地形とも関係してきわめて多様なため、参考にとどめた。九州では区画溝の変化が特徴的である。前期は環濠が貯蔵穴を囲む程度の存在であったものが、中期後半以降は大規模な村を計画的に建設する際に使用されるなど、区画意識が強まっていく。山陰では2～3棟の居住単位が存在するという発言があった。また、中期には村の立地が変化しており、山地・丘陵に立地する村が多くなっている。北陸では中期に多主柱の平地建物が出現して以降は、比較的遺構の配置がよく似た村が各県で展開する。中期は低地に集中し、後期は山地・丘陵へ進出するという立地もほぼ共通する。浜崎氏は後期の村について、核となる家、その他の家、倉で構成されるという概念と、「小環状溝」を平地式倉庫とする解釈を提示した。同様の遺構は前田氏も「周溝状溝」として抽出している。今後、村を復元する新たな視点となりそうである。東北では前期にやや特殊な村も確認されるが、短期間の小規模集落が主体であり、中期以降は村そのものが減少していく。北海道では竪穴建物・屋外炉・土坑墓の組み合わせがほとんど変化しない。

以上から、「弥生時代の村」もまた地域により大きく異なることがよく理解できた。遺構の配置とその時間的な変化ばかりでなく、立地についても様相差が大きく、きわめて地域性が強い。各地域の特徴については、区画溝の発達が先行する九州、高所立地と遺構配置が明確な山陰、中期から地域としてのまとまりが見られる北陸、弥生文化の一時的な受容とその後の衰退を窺わせる東北、弥生文化をほとんど受容しない北海道、とまとめておく。

討論では、「弥生時代の家と村」は弥生時代の前・中・後期といった同じ段階であっても、地域ごとに様相が大きく異なることを確認したにとどまる。しかし、最も基本的な「暮らし」の単位であるはずの「家」と「村」にこれほどの様相差があるということは、各地域の弥生時代社会が多様性に富んでいた状況を示唆するものであろう。弥生文化とは単純に列島に農耕をもたらしたただけのものではなく、おそらく、その波及と受容の過程において、縄文時代以来の伝統的社会も含めて、複雑な地域性を創出している。今回は踏み込めなかったが、その実態と背景を明らかにすることが、弥生時代の「暮らし」を考えることにつながるはずである。そのためには、討論した内容のほか、環境や生業、家の機能といった別視点での検討や、多岐にわたる内容の総合的な検討も必要であろう。今回の研究会は「弥生時代の家と村」の現状と課題を実感できた貴重な機会であった。



研究集会



地域別報告



討論



資料見学会

古墳確立期土器の広域編年

・・・東日本を対象とした検討(その2)・・・

田嶋 明人

はじめに

本稿では東海地域、中でも尾張を対象に検討する。当該地域では、古墳確立期の土器研究はもとより、古代、中世・近世の土器・陶器の研究においても多くの蓄積をもつ。古墳確立期の土器研究では、長い研究史をもち、研究者層は厚い。本稿では、尾張での該期土器研究を代表する存在とみている、加納俊介、赤塚次郎の研究を中心に検討を進めることとする。両氏の研究業績は東海は無論、中でも東日本の土器研究に多大な影響を与えている。本稿が両氏の業績を検討の対象とした由縁でもある。

一方、両氏の他に、尾張に限っても多くの方々が、重要な編年や論考を提示している。しかしそれら成果は膨大で、本稿では内容を十分に咀嚼できないまま、断片的な引用にとどまった。その点で、尾張の土器研究を浅くであっても網羅したものとはなっていない。力量不足による。

検討にあたって時間軸では、詳細な編年を示している赤塚の研究を軸に進め、様式区分の検討では加納の研究を軸に進めることになる。加納の編年は、漆町編年と様式区分で概ね一致していることから、表面的にせよ、およその理解ができる。対して、赤塚の編年は、徹底した型式分類により時間軸を設定する手法と、様式区分の指標で全く異なるように思われる。それ故、赤塚が目指す編年と様式区分は、未だ手探りの状況⁽¹⁾にある。

そのことはともかくとしても、尾張での土器編年は整備され、土器群の推移が分かりやすく提示されている。本稿で進める東日本域の土器編年を考える上で軸となる。同時に、北陸南西部と北東部との様相の検討にとっても学ぶべき部分が多い。それらのことから併行関係の確定はもとよりであるが、様式内容・区分の検討を重要課題と考えた。両氏の様式区分の大きな違いは、契機付けとなり、大いに考えさせられた。結果としては、かえって課題が増えたが、東日本域での併行関係を考える視点も、おぼろげながらみえてきたように思う。

ただ、検討作業では、尾張の状況に疎いまま、尾張の編年に、漆町編年での様式区分をトレースすることに終始したようにも思う。加えて、様式区分の検討にかなりの比重を置いたことから、抽象的で思いを述べる記述が多くなったように思う。両氏をはじめ尾張での研究業績を曲解した部分が多々あるのではないかとと思われる。ご叱正とご教示、そしてご寛恕をお願いしたい。

I 併行関係の検討

1 併行関係について

東海なかでも尾張との併行関係について検討する。検討の範囲は、漆町Ⅴ-1群(仮称)から漆町13群あたりまでとするが、Ⅴ-1群から漆町2群までは、大枠での時間軸しか示していないので(田嶋2007)見通しを示すに留めた。その事から、漆町3群(月影式)から漆町13群までが主たる検討対象となる。

尾張(東海)と北陸、主として北陸南西部との併行関係については、赤塚(赤塚1990)、加納(加

納1991)、甘粕 健・春日真実(甘粕・春日1994)、北島大輔(北島2000)、春日(春日2001)、恩田知美(恩田2004)等の他、北陸での東海系土器、東海での北陸系土器を検討した原田 幹の(原田1992, 1995, 1998)研究等がある。そして赤塚、加納、北島、恩田らは畿内との併行関係も提示している。畿内からみた東海との併行関係の検討では、関川尚功(関川1987, 1992)、小池香津江(小池1994, 2004)、辻 美紀(辻2002)、杉本厚典(杉本2004)等々の研究があるが、時期幅で限られたものが目立つ。重要な文献が抜けているように思われる。ご教示をお願いしたい。また、V様式併行期から漆町3群までの併行関係については、近江を介して検討をすすめた。近江は、あらためて述べるまでもないが、東海・北陸・畿内を結ぶ結節点にあり、東海と北陸、畿内と北陸との併行関係の検討にとってきわめて重要な地域といえる。しかし、今回の検討では、近江の状況について全く不勉強で、主として近藤 広の業績を「借用」する程度⁽²⁾でしか、その成果をとり込むには至らなかった(近藤2004)。

そのような状況にあるが、北陸と尾張の併行関係に畿内と尾張との併行関係を重ねることができたのは、尾張との併行関係の精度を高める上で、また、先稿(田嶋2008、以下先稿と略す)での畿内と北陸との併行関係の検証にとって大いに参考となった。

先学のこれら成果により、尾張と北陸の併行関係は、ほぼ整理されていると考えているが、先でも触れたように、中でも様式区分で検討すべき部分が多々あるように思われた。先学の成果を追認することとなるが、以下検討を進める。

2 八王子古宮式・山中式とV - 1期(仮称)～漆町2群

赤塚の編年によりながら検討を進めたい(赤塚1992c, 2001)。なお、該期については、栃木(栃木1995)、楠(楠1996)、の編年を参照いただければ幸いである。

1) 八王子古宮式とV - 1期

IV様式からの組成・形式を継承した段階として整理している。猫橋1号溝、同・9号溝(石川県埋文1997)等を標式とするが、溝資料であり、括弧付きで標識とした(田嶋2007)⁽³⁾。そのことから、併行関係の検討に足るまでの編年的整理はできていないが、IV様式からの形式を継承し、盤状の高杯Aの(赤塚2001)顕在等から、八王子古宮式段階と併行しよう。ただ、現状で標識としている資料には、山中I式段階での山中型高杯C類似形式等(赤塚2001)を含み時期幅をもつ。V - 1期については、八王子古宮式併行の様式として今後とも整理を進めたい。

高野陽子は、八王子古宮式から山中式への変化について、山中式を丹後での大山式と対応させ、その成立をV様式を二分する画期⁽⁴⁾としている(高野2004)。筆者も、V - 2期(仮称)からの動きは、IV様式での凹線文系土器群の波及に後続する、少なくともここで対象としている東海、北陸をも巻き込んだ波及期と捉えている。そのことから、V - 1期の下限ないしはV - 2期の成立時期は、八王子古宮式の下限、山中式の成立と時間軸での大きな違いはないとの予測でいる。

2) 山中式とV - 2期から漆町2群

V - 2期は、白山市・八田小鮎3号住6号溝(松任市教委1988)、同・旭SI64(松任市教委1995)、V - 3期(仮称)は、金沢市・桜田・示野中SB10等(金沢市教委1991)、漆町2 - 1群は、白山市・北安田南出3区SI1(松任市教委2007)等、漆町2 - 2群は、同・中村ゴウデン8号住(松任市教委1989)等、漆町3 - 1群は同・一塚SX22(松任市教委1995)等を標識とする。V - 2期からV -

3期は、楠の加賀での編年2期から3期。漆町2群は、楠の3期、栃木の能登での編年7期が該当しよう。

V - 2期とV - 3期は、一つの様式に包括して理解している。多地域の形式で合成された組成をもつ段階。その点で、該期の形式は、出自・系譜を明確にして、波及元ないし本貫域の型式と対比することで、多少は変容していようが併行関係を取りやすい。そのことから、高杯、器台等々を尾張の型式と直接対比することで、おおよその併行関係を予測できた。対して、漆町2群（法仏式）は、北陸固有型式が成立する段階である。地域形式が顕在化する段階とでき、いわゆる外来形式での対比が必要となるが、併行関係の検討に足るまでの資料を抽出できなかった。以上の状況を踏まえ、ここでは、該期を通じて北陸で一定量みられる近江での形式ないし類似形式、中でも器台での型式変化（図1）⁽⁵⁾を介して尾張との併行関係をみることにする。

V - 2期からV - 3期（仮称） 図1 - 2は、糸魚川市・後生山3号住の器台で（糸魚川市教委1986）V - 3期併行としたい事例である。近藤 広が近江V - 4期とする長浜市・大塚SB0003の（長浜市教委1995）器台（図3 - 2）と類似し、やや古相とできよう。近藤編年V - 4期は、山中Ⅰ式3段階からⅡ式1段階に併行とする（近藤2004）。丸山雄二も、大塚SB0003を大塚Ⅱ - 2期とし、山中式3段階併行（山中Ⅱ式1段階）とする（丸山1995）。当該器台を尾張の型式と対比するならば、山中式中期2段階（山中Ⅰ式3段階）をくだらない器台A（赤塚1992c）と類似する、ようにもみえる。

図1 - 1の白山市・旭SI64の器台は、V - 2期でも新相の土器群と供伴している。型式観で後生山3号住の事例に先行するとみて矛盾しないとできよう。供伴する近江系受け口甕は（図2 - 8, 9）近藤編年のV - 3期から4期あたりの型式と類似する。V - 2期でも古相とできる八田小鮎遺跡では、標式とした6号溝ではないが、Ⅱ区1号大溝、Ⅱ区8号溝等に、系譜の整理ができていないので図2に示したが、より古相としたい器台がみられる（図2 - 1. 2）。

近藤がV - 3期の標式とする長浜市・大東FO101（滋賀県教委1994）の器台（図3 - 1）と類似しているようにみられる。このことは、6号溝の受口状口縁甕が（図2 - 3 ~ 5）近藤編年のV - 3期にはのぼるとできることと齟齬はない。また、先での旭SI64では、口縁部に波状文をもつ高杯が

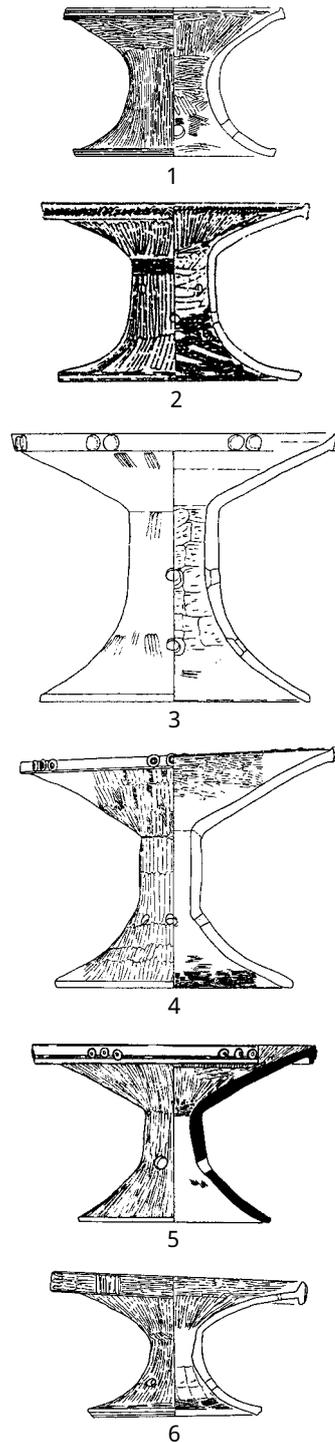


図1 器台の変遷 (S = 1/6)
 1 : 旭 SI64 2 : 後生山3号住 3 : 江上 A SD 1
 4 : 吉崎・次場 S - 5号溝 5 : 西山1号墓
 6 : 下老子笹川 SI 3

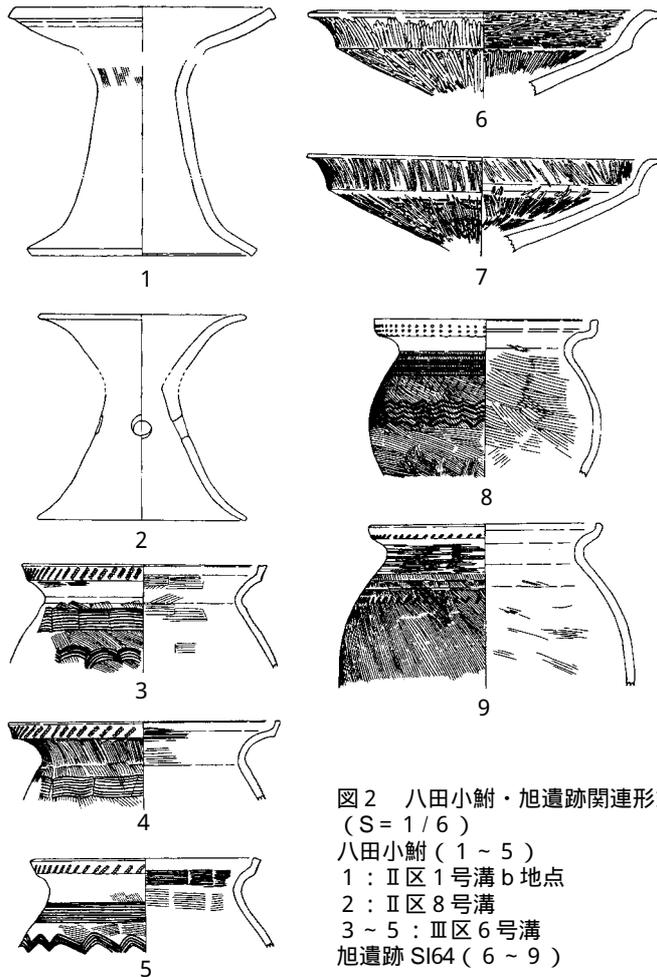


図2 八田小鮒・旭遺跡関連形式
(S=1/6)
八田小鮒(1~5)
1: II区1号溝b地点
2: II区8号溝
3~5: III区6号溝
旭遺跡SI64(6~9)

みられる(図2-6, 7)。尾張の形式と特定できるものではないが、山中Ⅰ式に中心をもつ形式と類似するとみることが可能であろう。

漆町2群 図1-4の羽咋市・吉崎・次場S-5号溝(石川埋文1988)の器台は漆町2-2群。近江型器台としたい形式で、類似の器台は、同・SD08-1(羽咋市教委1994)や鯖江市・西山1号墓(鯖江市教委1987)等にみられる。栗東町・下鉤SR土器群や新旭町の針江北SH1(滋賀県教委1992)の器台(図3-3)と類似し、近藤編年V-5期に比定できよう。同期は、山中Ⅱ式2~3段階に併行とする(近藤2004)。また、図1-5の西山1号墓の器台は、吉崎・次場の事例より新しいとできる型式で、杉浦が、石田Ⅱ期、廻間Ⅰ式0段階併行とする(杉浦2005)能登川町・石田北環壕3よりは(図3-4)古いとできよう。ちなみに、同墓で供伴した甕について(図3-5)原田は山中式新相ないし欠山式古相に選

る(原田1992)としている。

図1-3は、上市町・江上A SD01の事例で(上市町教委1992)溝資料ではあるが漆町2-1群の型式とみている。軸部が太く型式観でも吉崎・次場S-5号溝に先行する。近江での的確な類似例を確認できなかったが、漆町2-1群の併行関係を検討する資料として示した。

また、美濃では、近江での変容ないしは定量の丹後系、そしてその折衷とみられる形式が目立つが、その中である程度併行関係をうかがえる事例に岐阜市・下西郷一本松SB9(岐阜市教育文化2000)の有段擬凹線文甕(図3-10.11)がある。口縁幅が狭いが、漆町2群とできよう。また、大垣市・荒尾南SZ01の(岐阜県文化財保護1998)台付壺は(図3-12)北陸でみられる形式とはできないが、口縁部の形状を北陸からの影響とできるなら、漆町3群をのぼらない資料とみたい。恩田はともにV3期、山中Ⅱ式併行とする(恩田2004)。

以上、近江を介した間接的で、かつ大雑派な検討しかできなかったが、V-1期を八王子古宮、V-2期とV-3期を山中Ⅰ式、漆町2-1群と2-2群を山中Ⅱ式に併行すると予測しておきたい。ただし、厳密な併行関係やV-3期と漆町2群の境が山中式Ⅰ式とⅡ式の区分に対応するのか等々については、今後の課題としたい。

3 廻間Ⅰ式と漆町3群(月影式)

図1-6は、高岡市・下老子笹川A7地区SI3の器台で、漆町3群併行の土器群と供伴する(富山県文化2006)。石田北環壕3で、軸部がやや太く、系譜が異なると思われるが類似した型式がみら

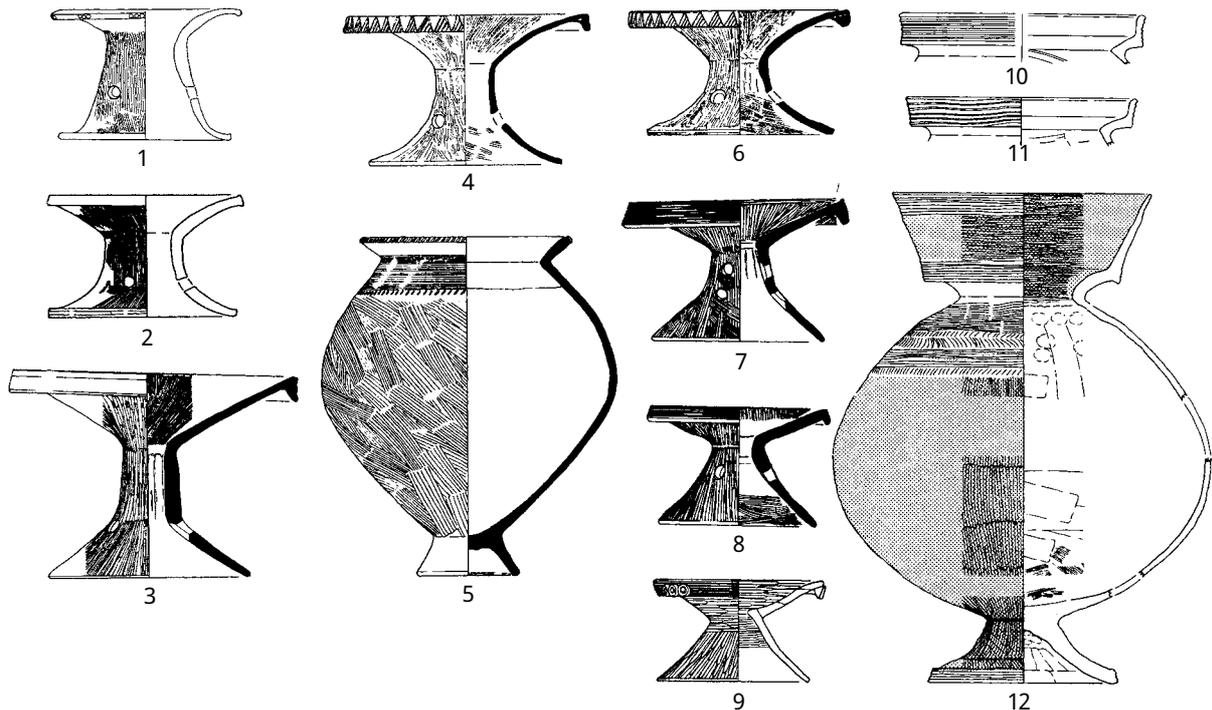


図3 器台等併行関係関連資料 (S = 1 / 6)
 1 : 大東 FO101 2 : 大塚 SB0003 3 : 針江北 SH 1 4 : 石田北環濠 3
 5 : 西山 1 号墓 6 : 石田北環濠 3 7 : 正伝寺南土器群 7 8 : 正伝寺南土器群 6
 9 : 勝川 SZ22 10 ~ 11 : 下西郷一本松 SB 9 12 : 荒尾南 SZ01

れる (図3 - 6)。杉浦は石田Ⅱ期とする (廻間Ⅰ式0段階)。近藤編年Ⅴ - 6期の標識資料には直接対比できる資料を見出せなかったが、小型化が進んでいる点に類似の変化がうかがえる資料に近藤Ⅵ - 1期の正伝寺南土器群6、同・7 (滋賀県教委 1990) がみられる (図3 - 7, 8)。近藤編年Ⅵ - 1期は、廻間Ⅰ式2段階から3段階に併行とする (近藤2004)。

尾張でも類似した型式 (器台 A 1) がみられ、変化も大枠で近江と類似している。原田は、先での正伝寺南や米原町・入江内湖西野 (滋賀県教委1977) の形式を東海系とし近江北部に多く分布するとする (原田1992)。そして、その系譜にあり確実に新しいとできる資料が春日井市・勝川 SZ22 (愛知県教育1984) にみられる (図3 - 9)。永井宏幸・村木誠は、Ⅶ - 2期、廻間1 ~ 3段階併行とし (永井・村木2002) 赤塚は廻間Ⅰ式3段階とする。また、正伝寺南土器群7 (図3 - 7) 也、『廻間遺跡』の編年表にみる廻間Ⅰ式1 ~ 2段階の型式に類似するとできよう (赤塚1990)。

該期での畿内との併行関係は、先稿では具体的な検討をしていないが、漆町3群 (月影式) のはじまりが弥生時代「末」 (森岡・西村2006) 纏向1式 (関川1976) 庄内0式 (寺澤1986) の成立あたりと連動すると考えた。

北島大輔は纏向1式との併行関係について、纏向東田地区北溝 (北部) 下層のブランドーグラス形高杯から山中式後期にさかのぼる可能性を上限とし、天理市・布留山口池地点第Ⅳ層の高杯 A から、廻間Ⅰ式0段階を下限 (北島2000) とする。恩田もブランドーグラス形高杯の型式観から庄内0式は、山中Ⅱ式3段階とするのが妥当とする (恩田2004)。加納は山口池地点第Ⅳ層の高杯を能田旭期古相とし (加納1991a) 赤塚は、廻間Ⅰ式2段階とする (赤塚1990)。近江に戻るが、伴野幸一は、先であげた正伝寺南土器群6とほぼ同型式とできる器台を、伴野編年Ⅵ - 1期とし (伴野2006) 森岡・西村は、該期を庄内式古段階古相併行としている (森岡・西村2006)。

該期についても、大枠での検討しかできていないが、廻間Ⅰ式の古段階と漆町3群が併行関係にあ

るとしておきたい。廻間Ⅰ式2段階あたりが漆町4群の上限、庄内式古段階古相と併行するとの予測
でいる。ただ、山中Ⅱ式3段階～廻間Ⅰ式0段階と瑞穂期のはじまりとの関係は微妙である。「併行
関係と課題」の項で再度検討する。

4 廻間Ⅰ式・Ⅱ式と漆町4群～漆町6群（白江式）

漆町4群での良好な供伴例はないが、漆町5・6群は多い。

漆町5群を上限とする妙高市・斐太上ノ平地区24号竪穴で(滝沢1994)S字甕A類模倣(原田1998)、
時期幅をもつが漆町5群主体の金沢市・近岡ナカシマ2号溝上層で(金沢市1986)S字甕A類(新)、
漆町5群新段階～6群古段階の資料では、金沢市・松寺B-2号土坑で(金沢市教委1985)S字甕B
類(古)(赤塚1990)、同・南新保P-54では(金沢市教委1983)廻間Ⅱ式1～2段階の壺A4が(赤
塚1990)が伴う。

東海では美濃、三河、伊勢等に良好な供伴事例がみられる。岐阜市・堀田・城之内SK106では(岐
阜市教委1996)口縁部先端を欠くが漆町5群とできる月影甕とS字甕B類が供伴、廻間Ⅱ式前半と
する(原田1998)。多量の漆町5群を主体とする北陸系土器を出土している嬉野町・貝蔵SD17・大
溝では(和気1999)S字甕A類新を中心にB類若干が見られ、廻間Ⅰ式後半(末)から一部Ⅱ式初
頭(原田1998)ないしは濃尾5群と供伴する(北島2000)。また、尾西市・西上免SK106では(愛知
県埋文1997)漆町5群から漆町6群とできる大型月影甕がみられる。供伴するヒサゴ壺は廻間Ⅰ式
新からⅡ式古とできようか。原田は、当該遺跡での出土資料は廻間Ⅱ式前半にほぼ限定される、とす
る(原田1998)。

畿内では、天理市・柳本遺跡群四ノ坪地点土坑7上層で(青木2000)で、S字甕B類と最新型式
の月影甕が供伴する。この資料は先稿でも触れたが、畿内編年では布留式古段階古相(森岡・西村
2006)にあたる。

他の東日本域でも供伴事例がみられる。ここでは省略するが、以上を整理するなら、漆町5群は、
S字甕A類(新)と確実に供伴し、堀田・城之内SK106でのS字甕B類に関しても廻間Ⅱ式前半に
供伴する型式とされる。漆町5群新しい漆町6群古の段階とした事例でも、松寺B-2号土坑、南
新保P-54でみたようにS字甕B類(古)ないし廻間Ⅱ式前半段階と供伴している。漆町5群は廻
間Ⅰ式4段階を上限に、廻間Ⅱ式前半にほぼ収まるとできよう。そして、漆町6群の上限はⅡ式中頃
となる。下限については、四ノ坪地点土坑7上層資料の扱いも含め、次の漆町7群の項で検討する。

対して、漆町4群については良好な供伴資料はないが下限は、漆町5群の上限との関連からS字
甕A類新段階以前、廻間Ⅰ式4段階頃より先行することになる。そのことは、赤塚が畿内との併行
関係で、漆町5群の上限あたりと併行する庄内式古段階新相の(西村2008)八尾市・美園DSX-304
の(大阪文化財1984)東海系高杯を廻間Ⅰ式4段階としていることと矛盾しない。一方、漆町4群の
上限については確定できる資料はない。先では、赤塚が纏向Ⅰ式の布留山口池地点第Ⅳ層の高杯A
を廻間Ⅰ式2段階としたことに触れた。加納は、能田旭期の古相とした。廻間Ⅰ式2段階はS字甕A
類の成立や廻間様式を特徴づける型式が確立する時期とされており(赤塚1990)、漆町4群の成立が
この段階あたりに併行する蓋然性は高いと予測しておく。後の「併行関係と課題」の項で今少し検討
する。

以上から、漆町4群は廻間Ⅰ式中頃から後半、漆町5群は廻間Ⅰ式と接点を持ち、廻間Ⅱ式の
前半、漆町6群は廻間Ⅱ式中頃以降と併行するとして、ここまでの整理としておく。

5 廻間Ⅲ式と漆町7群から漆町9群

漆町7群併行期以降は、北陸形式と東海形式との良好な供伴資料はない。畿内形式を介して併行関係の検討を進めたい。

廻間Ⅲ式は、S字甕C類の段階である。畿内でのS字甕C類の最古の供伴事例は、管見の範囲であるが、布留式古段階の古相から新相の間の(西村2008)八尾市・久宝寺724提で(大阪府2004)あるのか。そして、新しい事例には布留式中段階中相の朝集殿下層溝の他、布留Ⅱ式とされる大阪市・崇禅寺SK01(大阪府教委1982)等がある。このこととから、畿内編年を介するならば、廻間Ⅲ式は、大枠で漆町7群から漆町9群に併行し、漆町10群の一部を含むことになる。

漆町7群 赤塚は、廻間SZ01の小型器台Cを廻間Ⅲ式2段階とする。小型器台Cは、布留式中段階古相に出現する形式とされ(森岡・西村2006)、廻間Ⅲ式2段階は、漆町8群が上限となる。また、赤塚は、廻間Ⅲ式3段階を朝集殿下層溝段階(布留式中段階中相)併行としている。この整理で良ければ、漆町7群は、廻間Ⅲ式1段階以前となる。

赤塚は、漆町7群を廻間Ⅱ式4段階からⅢ式1段階併行とする。そして、廻間遺跡での廻間Ⅱ式4段階以降の布留祖形甕を0式布留甕(寺沢1986)と対応させた(赤塚1990)⁽⁶⁾。筆者も布留祖形甕から、廻間Ⅱ式4段階、纏向・辻土坑4下層段階と漆町7群の上限とが併行すると想定していた経緯がある。しかし、先稿では当該土坑資料を漆町6群新段階併行として整理した。現時点では辻土坑4下層の位置づけを根拠に漆町7群を廻間Ⅱ式4段階に上らせることはできなくなった。

廻間遺跡では廻間Ⅱ式2段階ないしは3段階から布留祖形甕がみられる。廻間遺跡での布留祖形甕は数点とはいえ、イレギュラーなあり方とはできないであろう。布留祖形甕の型式変化は明らかとはいえず、型式比較は慎重でありたいが、当該資料には、纏向・辻土坑4下層の資料の一部と酷似する型式がみられる。辻土坑下層資料についてはS字甕B類中・新段階の他、A類もみられる(加納他1988)。このことから資料群に幅があるともとれるが、辻土坑4下層の段階が廻間Ⅱ式3段階、場合によってはⅡ式2段階と併行するとできるなら、廻間Ⅱ式1段階までみられるとするA類が該期にみられても良いようにも思う。加納は、庄内3式(庄内新段階前半)の纏向東田南部溝中層にA類少、B類多としてA類が伴うとする(加納1991a)。小池香津江は桜井市・城島で纏向3式後半の資料とS字甕A類が供伴する、とする(小池1994)。また、北島は、A類は濃尾8群(廻間Ⅱ式3段階)まで残るとし(北島2000)、岐阜市・堀田・城之内の整理をした高木洋は、S字甕による厳密な時間軸の設定に疑問を投げかけている(高木1996)⁽⁷⁾。

崇禅寺Ⅱ区土器溜まりでは(大阪府教委1982)、S字甕B類中段階、小型器台B、小型高杯Cがみられ、赤塚は廻間Ⅱ式3段階を中心とする良好な資料とする(赤塚1990)。供伴する畿内形式について山田隆一は、庄内2式とする(山田1992)。この理解は、赤塚が庄内3式とする併行関係と概ね整合するといえるが、杉本は庄内式期Ⅳ(米田1991)とし、庄内式期Ⅳの基準資料として八尾市・中田一丁目土坑2をあげる(杉本1999)。廻間Ⅱ式3段階は庄内式期Ⅳ併行とする。漆町編年では7群併行とすることになる。杉本の指摘によるならば、廻間遺跡での廻間Ⅱ式3段階と纏向辻土坑4下層の布留祖形甕が類似することの説明はつく。北島も、辻土坑4下層段階を廻間Ⅱ式3・4段階とし、3段階を含める(北島2000)。

漆町7群の畿内との併行関係については、中田一丁目土坑2段階から萱振SE3段階、布留式古段階(森岡・西村2006)と併行する、とした。現状で中田一丁目土坑2段階に上るS字甕C類は確認できていない。対してB類は、先述の四ノ坪地点土坑7上層にみられる。当該資料の全容は明らかでないがB類の段階とできるなら、廻間Ⅱ式併行とできよう。当該土坑からは月影甕が出土してい

る。先稿ではこの月影甕型式と漆町7群の最古の一群(永町ガマノマガリ25土坑)が併行する可能性を指摘した。このことは漆町7群がB類の段階、廻間Ⅱ式にのぼることを示す。また、辻土坑4上層からも月影甕が出土している。上層資料中には下層資料が混ざっており、上層の年代観を踏まえるならば、月影甕は下層に伴うとするのが自然な理解といえる。そして、この月影甕の型式は、先での四ノ坪地点土坑7上層に類似するが、僅かであっても型式で確実に古いとできる。そのことは、四ノ坪地点土坑7上層段階を廻間Ⅱ式4段階とすることと、辻土坑4下層段階がそれより古い廻間Ⅱ式3段階までのぼるとすることと矛盾しない。

四ノ坪地点土坑7上層資料の全貌が明らかでない点で保留部分を残すが、漆町7群の古い一群が、S字B類の段階、廻間Ⅱ式4段階に上るとみたい。漆町7群は、廻間Ⅱ式4段階から廻間Ⅲ式1段階に併行するとしておく。そして、漆町6群の下限を廻間Ⅱ式3段階におくこととなる。今後とも、近畿でのS字甕等東海形式の供伴資料を検索続け、再考したいと考えている。ご教示をお願いしたい。

なお、先稿では、漆町6群が畿内編年での庄内中段階後半から新段階後半までをカバーするのでは、間延び感を拭えないとした。上記結果を踏まえ、畿内と尾張の併行関係を示すならば、庄内2式新、3式古と3式新(辻土坑4下層)が廻間Ⅲ式3段階を中心に2段階を一部含む程度の時期幅と併行することになる。漆町6群の時期幅としては違和感はないが、畿内編年での窮屈感⁽⁸⁾は、廻間編年との対比でも課題として残る。

漆町8群、漆町9群 廻間Ⅲ式2段階以降には、尾張でも畿内系形式が散見される。

廻間Ⅲ式2段階では、清洲市・朝日1区SK01に布留甕がみられる(宮腰1986)。廻間Ⅲ式3段階では、瀬戸市・吉田奥2号住で(瀬戸市教委1992)布留甕と小型丸底壺がみられ、大蔵順子は廻間Ⅲ式3段階、纏向4式併行とする(大蔵1992)。大蔵が指摘するように布留式中段階中相より古いとみたい。赤塚が廻間Ⅲ式3段階の標識とする岩倉市・岩倉城SX1201(服部1990・愛知県埋文1992)には、小型丸底壺、有段口縁鉢、小型器台Cがみられる。小型器台Cは変容している可能性があるが、小型丸底壺、有段口縁鉢ともに布留式中段階中相とできよう。同じく朝日63B区SB02の小型丸底壺も(石黒1989)畿内系の形式とできるならば、布留式中段階中相としたい。対して、廻間Ⅲ式4段階とする可児市・宮脇2号住の小型丸底壺は(宮腰1988、第4図4)布留式中段階中相までは確実にのぼるように思われるが、検討したい。

屈折脚高杯での供伴事例も、赤塚が廻間Ⅲ式4段階とする清洲市・朝日63B SZ01上層(石黒1989)、名古屋市・若葉通SB02(名古屋市教委1989)や、朝日63J区SB12(愛知埋文1994)等々でみられる他、供伴は明らかでないが型式的に古相とできる事例として一宮市・宇福寺(愛知県埋文2006)、一宮市・八王子Ba区NR01(愛知県埋文2002)の事例もある。若葉通SB02の事例を畿内系とできるか、朝日SB12の事例をD類出現前に特定できるか等の検討を残しているが、屈折脚高杯は、廻間Ⅲ式後半には出現していたとできよう。

畿内形式の型式観については、漆町編年との併行関係を考える目安として付記したが、もとより目安の域をでていない。畿内研究者の教示を待ちたい。このことを保留するにしても、廻間Ⅲ式2段階あたりから4段階が漆町8群、漆町9群と併行するとするのは難しくない。ただ、先にも触れたように、4段階が漆町9群に収まるのか、漆町10群を含むかについては、漆町9群自体の整理を残しているが、次項での月縄手SX03下層、同・SX02下層の屈折脚高杯の(愛知埋文1994)型式観から漆町10群を含むとしておく。

6 松河戸様式と漆町10群～漆町12群

律令期の土器にみられるように、該期は、東西南部までほぼ共通した形式をもった土器群が展開しており、大枠での併行関係の検討は容易でさえある。漆町8群までの個性化に対し漆町9群からはじまる斉一化の動きの中で当該土器群を評価することもできる。赤塚・早野の一連の研究（赤塚1994、早野2001、赤塚・早野2001、早野2006b）によりながら検討をすすめたい。

併行関係は、結論的には、漆町10群が松河戸Ⅰ式前半の1段階、漆町11群が松河戸Ⅰ式前半の2段階から後半、漆町12群が松河戸Ⅱ式、漆町13群が宇田Ⅰ式と宇田Ⅱ式の1段階、漆町14群が宇田Ⅱ式2段階と併行すると理解している。辻は畿内との併行関係について、辻編年2段階（古）を松河戸Ⅱ式1段階、2段階（新）を松河戸Ⅱ式2段階、3段階を宇田Ⅰ式としている。辻の併行関係を介しても、畿内編年と赤塚等の尾張編年、漆町編年との併行関係は、整合するとできる。

松河戸Ⅰ式 松河戸Ⅰ式前半の1段階は、S字甕C類が残り、D類が出現する（赤塚1994）。1段階の名古屋市・月縄手SX03下層、同・SX02下層の資料では高杯A1が残り、高杯A2は典型的屈折脚高杯の形態を保つ。また小型丸底壺Aもみられる（赤塚1994）。漆町10群、畿内での布留式中段階新相と併行するとできる。なお、月縄手SX03下層、同・SX02下層の屈折脚高杯は、漆町10群でも古相にさかのぼるものではない。このことは、先で廻間Ⅲ式の下限を漆町10群の中に求めたことの根拠でもある。

前半でも2段階は、月縄手SX03上層、同・SX02上層の資料をあてている。S字甕C類はほとんどみられなくなり、高杯A2は脚部がふくらみ、小型壺はA類に変わってB類が主体を占めるとする。そして、器台、鉢類、柳ヶ坪型壺等もこの段階をもって消失したものと考えられるとする（赤塚1994）。高杯A2の変化、小型壺B類は、漆町11群にみる特徴であり、器台、鉢類の消失については微妙な表現をとっているが、漆町11群併行であることをうかがわせる。若干の保留部分を残すが、2段階からⅠ式後半が漆町11群に併行するとみる。

松河戸様式の中で漆町10群併行期、畿内での布留式中段階新相に属するのはごく一部、Ⅰ式1段階に限られることとなる。赤塚は、松河戸Ⅰ式の標識を月縄手上層とし、漆町10群併行としているが（赤塚2002）、Ⅰ式の標識資料としては妥当としても時間軸はとも賛同できない。そして、松河戸様式は、漆町11群併行期以降の様相でイメージされているとみる。

松河戸Ⅱ式 該期での尾張編年、中でも早野の名古屋市・志賀公園土器集積資料を用いた松河戸Ⅱ式から宇田Ⅰ式にかけての編年は、格段に精度が高い（早野2001）。表1は、早野の編年対照表を一部改変し（早野2001）、辻が示した畿内との併行関係を（辻2002）付記した。

松河戸Ⅱ式（志賀公園1・2段階）は、大型高杯Aの出現、小型壺Bの増加、さらに宇田甕が出現する（早野2001、赤塚1994）。前二者は漆町12群の指標とできる。北陸では、漆町12群併行とできる宝達志水町・南吉田葛山1号住居（押水教委1992）でS字甕D類が供伴している。宇田甕の供伴からⅡ式2段階と併行するとする明日香村・山田道2次SD2570は（奈良国文研1991）、漆町12群併行とできようか。辻がⅡ式2段階を辻編年2段階（新）とすることとも整合する。

なお、尾張では該期で大型高杯Aが出現するとするが、先稿で触れたように畿内、和泉では、布留式新段階古相（松河戸Ⅰ式併行期）に出現するとしている（西村・池峰2006）。このことは漆町12群とする漆町編年とも整合しない。また、Ⅱ式1段階での併行資料として、S字甕D類の供伴から八尾南井戸6上層をあげている（大阪府教委1991）。辻は当該資料を八尾南SE26併行とし（辻2002）、田中清美は八尾南SE22併行とする（田中2000）。八尾南SE22併行ないしさらにさかのぼる可能性はないのか。大型高杯Aの出現時期も含め検討課題としたい。いずれにせよ、松河戸Ⅱ式が漆町12群

と併行関係にあることは確かとできる。

宇田式 宇田Ⅰ式 2段階（滋賀公園 4期）の新相とする SU11に椀が供伴する。当該資料は、漆町 13群新相の漆町金屋サンパンワリ97土坑より古く、古相の漆町金屋サンパンワリ157土坑より新しいが、大椀で新相の97土坑段階に近い型式とできる。漆町13群新相は ON46、TK208、TK23型式の須恵器と供伴しており、滋賀公園 4期は、TK216、ON46型式と併行するとしている。若干の時間差は椀にみる型式差を反映しているのか。滋賀公園 4期は漆町13群新相併行とすることで矛盾はない。

宇田Ⅰ式 1段階は、小型壺 A・B の激減に加え甕型式の多様化、中でも高杯 D の出現を指標とする（早野2001）。小型壺の激減は、漆町13群での動きと対応する。また、甕型式の多様化については、漆町13群になると布留甕が衰退し「くの字」甕に交代するが、連動した動きとできようか。高杯 D は、漆町編年では同形式は提示できないが、布留系の形式と異なる椀形高杯が漆町13群にはみられる。これらのことから、漆町13群古相併行とすることで、宇田Ⅰ式 1段階から 2段階への推移を良く理解できる。辻が該期を辻編年 3としている事とも矛盾はない。ただ、宇田Ⅰ式 1段階では椀（土師器）は確認できていない。椀の有無は遺構資料での組成の偏りである可能性を残すが、2段階においても尾張では少ないようである⁽¹⁰⁾。

このような整理で良ければ、須恵器型式での併行関係は、宇田Ⅰ式 1段階が TK73となり、併行する辻編年 3段階も TK73としている。漆町編年では12群の新相頃を TK73としており整合しないが、今後とも検討を進めたい。

表 1 編年対照表（赤塚・早野2001を一部改変・追記）

	尾張型須恵器 (猿投窯系)	陶器窯	志賀公園遺跡	濃尾平野	畿内	辻 (2002)	
松戸Ⅱ式	1		1期 SU01	大毛池田95Ba 包含層 門間沼95Eb 福田 SD01・SB04	八尾南井戸 6 上層	2段階 (古)	
	2	TG232	2期 SU13	正木町竪穴住居	山田道 2 次 SD2570	2段階 (新)	
420 宇田Ⅰ式	1	I - 1	TK73 3期 SU10 SU14	NR07 下層	朝日新資料館地点	平城下層 SD6030上層	3段階
	2	I - 2 I - 3	H - 111 (H - 48) TK216 ON46	4期 SU12A・B 群 SU12西・北西 SU11	大須二子山下層 八王子95BaNR01 - 3層 四反畑遺跡 (韓式系)		
500 宇田Ⅱ式	1	II - 1 II - 2	城山 2 H - 11 TK208 TK23	(5期)	同者包含層 上浜田調査区 2 遺物集中部 馬引横手 SD31上層		
	2	II - 3 II - 4	下原 TK47 MT15	SD06	勝川62FNR01 儀町正楽寺 SK05		
儀町式	III - 1 III - 2	H - 61	TK10	(6期)	儀町正楽寺 SK11 岩倉城 SZ1302 土田 SZ11		

II 併行関係と課題

1 「併行関係と課題」の検討にあたって

表 2 には、尾張での赤塚（赤塚1990，1992a，1992c，1994，1997，2001，赤塚・早野2001）と加納（加納1991a）の様式区分の対照に加え、畿内での森岡・西村の区分（森岡・西村2006、西村2008）と漆町編年での区分を対比した。尾張での赤塚と加納の様式区分の違いはあまりに大きい。漆町編年

での区分は、概ね加納に近いとできよう。森岡・西村の区分は、松河戸様式以降で尾張の区分と類似する。

赤塚編年と漆町編年での画期とを対比するならば、漆町4群（白江式）の画期、漆町7群の（小）画期、漆町9群の画期、漆町11群の画期が、廻間様式、松河戸様式内に含まれ、漆町14群の画期は宇田様式に包含されている。廻間様式と松河戸様式の境さえ、漆町編年での画期と整合しない。

様式区分については、先稿でも触れたように統一を強いるものではないが、区分には描き出される歴史像、描き出したい歴史像が自ずと反映される。同一地域を扱った赤塚と加納でさえ大きく異なる。この違いを尾張の特性に帰すことはできないであろう。

様式区分での議論は、地域内、正確には同一土器様式圏の中では良く議論されている。熾烈な議論さえある。しかし、土器様式圏を異にした地域間ないしはより広域間では、驚くほど低調といえる。筆者には、加納の土器論を軸とした一連の論考以外には（加納1991b, 1995, 1997, 2000ほか）すぐに思い浮かぶものはない。このことは、土器が普遍的存在で量も膨大で、他地域の土器に精通するのは至難であることが一つの理由であろう。地道な研究を続けている他地域の成果に踏み込むことへの遠慮も大きな要因としてであろう。そして、もっとも気に懸かるのは、土器編年を時間軸の設定と考えている研究者が少なくないと思われることである。そこでは、併行関係は議論されても、様式区分や様式の特徴での比較は、主要な関心とはならない。また、付言しておくが、どこから土師器とするかに係わる様式区分の議論は旺盛であるが、布留式古段階あたりまでが中心で、以降の議論は相対的に低調である。古墳時代土器研究の関心時期の反映ともいえるが、以降とした時期での様式の検討は、土師器のはじまりの評価とも大いに係わる。様式区分の広域での比較作業を大いに展開すべきと考える。

尾張での加納と赤塚の様式区分は、もとより個人見解であるが、該期、東日本域での土器研究の大きな潮流を反映したものであるとともに、現実にその流れをリードする役割を担っていると理解している。ここでの「Ⅱ併行関係と課題」では、二人の様式区分と評価を主要な検討課題とすることになろう。

2 山中式と漆町2群（法仏式）

赤塚は、山中式を3大別（前期、中期、後期）5段階に編年した（赤塚1992c）。その後、山中式に先行する様式として八王子古宮式を設定。山中式については、Ⅰ式とⅡ式に2大別し、それぞれを3段階、全体で6段階からなる編年を示した。そして、旧稿での中期をⅠ式3段階とⅡ式1段階に分割した（赤塚2001）。様式の二分は賛同したいが、旧稿での、後期から出現するとしていた高杯A4、鉢B3、鉢C、壺A2、E2、甕B2等と山中Ⅱ式との係わり、中でもⅡ式1段階との係わりについての説明がない。そして、山中Ⅱ式3段階の様相が分かり辛くなった。

山中Ⅰ式とⅡ式 赤塚は山中式について、「山中様式は前様式と比較すると、大きく異なる多様なデザインをもつ異質な土器型式の集合体であり・・・略・・・成立当初、その範囲は濃尾平野低地部に限定でき、伊勢湾沿岸部に広範囲に認められるような普遍性はない。ところが山中様式後半になると様相が一変する。それは山中式後期の段階であり・・・略・・・まず、濃尾平野の低地部を中心に存在した山中様式が周辺地域に影響を与えはじめ・・・略・・・南関東へもその波紋は拡大する」と要約する（赤塚1996）。

この指摘は、北陸でのV-2期、V-3期と漆町2群の様相に通じるものがある。V-2期、V-3期に地域色がみられないとはしないが、多地域の形式からなる合成的な土器様式といえる。「集合

表2 尾張編年、畿内編年と漆町編年

森岡・西村編年		漆町編年		赤塚編年		加納編年			
		1期(仮称)		八千七百弐式					
		2期(仮称) 3期(仮称)		山中式	1 2 3				
		漆町2 1群 漆町2 2群 (法仏式)		山中式	1 2 3				
弥生時代後期 「末」		漆町3 1群 漆町3 2群 (月影式)		廻間式	0	瑞穂期			
		庄 内 式	古段階		古相 新相	白 江 式	1 2 3 4	能田旭期	
中段階			漆町4群	廻間式	1 2 3 4		廻間期		
新段階			漆町5群 漆町6群		1 2 3 4		塔の越期		
布 留 式		古段階	古相 新相	漆町7群 漆町8群 漆町9群 漆町10群	1 2 3 4	西北出期			
		中段階	古相		漆町11群 漆町12群	松河戸式	前半 後半	1 2 3 4	松河戸期
			中相						
新段階	新相	漆町13群 漆町14群	松河戸式 宇田式 宇田式	1 2 1 2	宇田期				
中 期				宇田式	1 2				

併行関係の詳細は本文を参照願いたい

が、次の西谷式あるいは山中Ⅱ式、漆町2群等々の様式を構成する形式群の在り方と大きく異なる点と考える。それは該期での地域色の評価と係わる。

該期土器群について高野は、大山式と西谷式に分けるが、擬凹線文土器様式として一括する。赤塚は山中様式で一括するが、Ⅰ式とⅡ式での顕著な様相差を指摘する。北陸での筆者は、Ⅴ-2期とⅤ-3期を大別様式とし、漆町2群とは大別様式で分離した。この様式区分の違いには該期土器様式に対する評価が当然に反映されているのである。諸地域間にみられる共通性と地域独自の推移をあとづける作業を進めていきたい。

3 廻間様式成立期の様相と漆町3群(月影式)

先項では、漆町3群(月影式)のはじまりを廻間Ⅰ式のはじまり頃に求めた。このことについての補足も含め、該期での様式的特徴について検討する。

赤塚は、廻間Ⅰ式について、「閉鎖的・個性化を志向するような様相を強める時期」、「3世紀前半期には日本列島の各所で見られるような土器様式の個性化・孤立化が進行する」とする(赤塚1996)。そして、山中様式と廻間様式を区切る要素として、加納の用語を借りれば形制として(加納1995)

体」とはこのことを指すとみたい。そして、土器群にみる地域差は、どの地域の形式を受容したかの違いで現れる。対して、漆町2群は北陸型の地域形式を生み出す。漆町2群期は、Ⅴ-2期、Ⅴ-3期の形式を母体として地域形式を生み出すのは確かであるが、Ⅴ-2期、Ⅴ-3期に地域の特徴がみられるとしても、漆町2群での地域形式を生み出す動きとは様式内容で大きく異なるとできる。また、漆町2群で北陸型の形式が移動するのも、山中Ⅱ式の動きと共通する。

高野陽子は、丹後での事例を挙げ、Ⅴ-2期、Ⅴ-3期併行期と漆町2群併行期を大山式、西谷式とし、擬凹線文土器様式として一括する。そして、三坂神社式と大山式以降の土器様式には系統的な違いがあり、大山式は「在地色が強く発現する形式群の成立を標識とする」とする。独自多様な形式の出現、地域色の強い形式群によって形成される、ともする(高野2006)。土器群の系統の違いは、尾張、北陸の理解と一致するが、丹後では地域色の顕在も強調される。該期に顕著な地域色をもつ地域が存在することは確かであり、北陸には丹後の形式も波及する。が、一方で該期の形式は広域に分布し、それぞれの地域で組成としてあるのも実態である。先での合成的な土器様式である。このこと

形態の内彎志向を基本とした様式全体のデザインの統一とし、具体的には甕・壺の多様な形式の出現、径深比率での変化から径稜比率での変化に転換した新たな有段高杯の出現等、をあげる（赤塚1992）。

個性化・孤立化との指摘は、北陸南西部の漆町3群（月影式）にみられる特徴と酷似する。形制においても法仏型から月影型へ変化する。該期は、地域形式が一層顕在化する段階とでき、顕著な個性をもった地域型式からは該期の交流の状況はみえづらいが、共通した土器変化の背景には、広範囲での頻繁な交流、情報の交換があったとみたい。このことから漆町3群（月影式）の成立と、廻間様式の成立とがほぼ同時に進行したとみるのは根拠のないことではない。

赤塚は廻間様式成立の具体的指標として、薄甕としてのS字甕、八王子SK73の高杯（A5か）の出現をあげ（赤塚1992）、小型精製土器群を廻間「様式」成立との関連で重要視する（赤塚2001）。中でも、高杯は、小竹森が近江の地域色を検討する中で、「欠山期の高杯形土器は、東海においても前段階からの移行に断絶」がある（小竹森1988）と指摘するように、該期の様式区分と大きく係わる重要な形式とみたい。

まず、高杯についてみる。加納は、瑞穂期（古）の標識に名古屋市・瑞穂4次SB02（名古屋市教委1987）廻間SB02等をあげ、「高杯・長頸壺を中心に内彎志向が現出する」段階とする（加納1991a）。瑞穂4次SB02の高杯はA5ではなくA4にあたるのであろう。赤塚は、瑞穂4次SB02を山中式5段階とし（赤塚1992a）、内彎志向を山中様式後期に求めるが（赤塚1990）、一方で八王子SK73段階での高杯杯部の変化を劇的と評価し、供伴するS字甕（0類）とともに、廻間Ⅰ式0段階を設定した（赤塚2001）。村木誠は、A4にあたるであろう高杯について、瑞穂4次SB02に先行する2次SB4の資料をあげ（名古屋市教委1982）、住居の切り合いが激しく混入の恐れがあるとしながらも、山中式4段階（Ⅱ式2段階）に高杯Fがみられるとする（村木1999）。

A4ないしA5の系譜にある高杯が、廻間様式以前にみられるのは確かとできる。赤塚は、廻間様式成立期の高杯の変化について、径深指数、径稜指数で説明しているが、A4からA5の変化を「型式」変化とできても、様式区分に相当する変化とは捉えにくい。

赤塚がもう一つの指標としたS字甕0類の出現については、早野が松坂市・阿形SD95（三重県埋文1992）の事例をあげ、供伴資料から「0類古段階の出現は山中式の終末段階にさかのぼる可能性をもつと考えられる」とする（早野2000）。そして、0類の成立時期については、赤塚と加納の間でも一致していないように思われる。また、小型精製土器群についても、山中Ⅱ式3段階の瑞穂4次SB02に小型精製内彎土器がみられる。廻間様式のはじまりは、これらのことに未確定の部分があり、截然とした区分が難しいことだけは確かなようである。このあたりのことが、瑞穂期と廻間0式との議論に係わっていると考⁽¹¹⁾えている。

北陸南西部での漆町2群から漆町3群への変化には、月影甕の成立や高杯の径稜比率での速やかな変化から、様式区分の妥当性はともかく「区別」は比較的容易である。その点で尾張の様相とは違いがみられるようである。対して、形式群全体をみた場合には、変化が跛行的である可能性も残しており、漆町2群から漆町3群に継承される形式も少なくない。そこには尾張と類似した側面も指摘できる。

尾張では該期に甕・壺の多様な形式が出現するとする。しかし、北陸南西部での月影甕の成立は、多様な甕形式を出現させる動きではなく、月影甕に収束する動きであり、尾張とは大きく異なる。その点では、北陸北東部での該期での甕の動きと類似している。能登形甕の系譜とできる形式は漆町2-2群併行期には確実にみられる。しかし、該期での当該甕を地域甕と評価する事はできない。早野

が、廻間Ⅰ式0段階から3段階のS字甕について、「S字甕は、多様な甕、あるいは多様な薄甕の一つとしての位置を与えられるにすぎない」と指摘することと(早野2000)、似ている。そして、地域甕としての位置を獲得するのは、漆町4群併行期と考えている。北陸北東部で、該期に新たな形式が成立しないとはできないが、北陸南西部と比較して顕著な形式を見出せず、法仏型の型式を引きずるのが実態である。時間軸での整理が必要であるが、盤状の大型高杯や台付きの細頸壺等、漆町3群以降の本陸北東部に特徴的な形式の顕在は、能登形甕同様、漆町4群併行期以降との予測である。次項での課題となるが、このことでも尾張と似ていると予測している。先で、該期の尾張では「截然とした区分が難しい」としたのは、このことを指す。ただし、高杯は除外されよう。

該期の動きには、広範囲での頻繁な交流と、情報の交換があったとできようが、北陸でみた場合、南西部と北東部ではその推移に違いがみられる。北陸南西部での特徴は、西日本域での状況と比較・検討してみたい。北陸北東部の動きは、全く同一とはできないまでも尾張と類似する。該期での様式移行の在り方を類型化できるのか、東日本域での特徴を抽出できるのか、その評価も含め課題としていきたい。

また、該期、漆町3群については、様式的画期であるとしながらも、継起する形式がみられることや、地域形式を誇示する様式的気風を指標に、漆町2群と大別様式で括った(田嶋2007)。赤塚は、廻間様式の成立を古墳時代、土師器のはじまりとするが、このことでの議論も課題として残った。

地域甕について付言する。赤塚は、該期での薄甕・地域甕を、系列的な変化において器壁を薄くする薄甕B類と全く異なる手順・技法を用いて薄甕を創出したA類とに分け、S字甕、庄内甕をA類、月影甕をB類とした(赤塚1996)。興味深い視点であり、0類はともかく、A類としたS字甕と庄内甕が、成立時期、普遍化の時期で一致していることとあわせ留意しておきたい。そして、該期での土器変化にみた様相差との係わりも興味深い。ここでは、S字甕A類の出現と普遍化は、庄内甕同様、月影甕に遅れると整理しておく。

4 廻間Ⅰ・Ⅱ式と白江式

加納は、廻間様式を瑞穂期、能田旭期、廻間期、塔の越期の(小)様式に分け、廻間Ⅰ式を瑞穂期、能田旭期、Ⅱ式を廻間期、Ⅲ式を塔の越期とする。そして、廻間期の開始については能田旭期末、廻間Ⅰ式にさかのぼる可能性を残した(加納1991a)。

廻間Ⅰ式とⅡ式を括る赤塚と、その間に画期を設定する加納との様式区分は尾張だけにみられるものではない、と考えている。同一とはできないまでも、北陸での谷内尾の編年(谷内尾1983)は前者に、漆町編年は後者にあたる。畿内では寺澤の庄内式(寺澤1986)は前者、森岡・西村の庄内式は(森岡・西村2006)後者とできようか。ただし、加納は廻間期に画期を求めるのに対し、漆町編年と森岡・西村編年とは、能田旭期併行期の中に画期を求める点で異なる。廻間Ⅲ式は次項で触れることとし、ここでは廻間期の特徴と白江式の成立期と係わる能田旭期、廻間Ⅰ式でも中頃から後半の様相について検討する。

1) 廻間期について

赤塚は、廻間Ⅱ式成立期について、甕ではⅠ式まで台付甕の主体であった甕Bに変わり、S字甕B類が出現し、甕全体の9割を占めるにいたるとし、Ⅱ式を区切る最大の要因とする。高杯ではB1の消滅、B2の小型化。いわゆる小型器台の成立を上げる(赤塚1990)。また、有段口縁壺の出現も該期のこととする(赤塚1997)。そして、廻間Ⅰ式4段階からⅡ式にかけての土器移動を「第1次拡散

期」とする。しかし、該期土器移動に伴う変化に関しては、集落動態や大規模な土木工事を例に挙げながら、「第1次拡散期に伴う秩序の解体は認めにくい」とし「廻間様式そのものにも変化が認められ」ないとする(赤塚1996)。顕著な土器移動、形式・型式での顕著な交替等があったとするが、(小)様式区分に留めるのである。

原田は、「第1次拡散期」について、「廻間Ⅰ式4段階をさかのぼることはない・・・中略・・・多くの資料は廻間Ⅱ式の初頭まで下」(る)とした上で、伊勢湾系土器波及期の「器種は廻間Ⅰ式に成立あるいはその系譜上にあるものであるが、・・・略・・・小地域に偏在していた器種も多い。・・・略・・・小型器台、小型(開脚)高杯は廻間Ⅰ式のなかにその祖形を見出せるが、廻間Ⅱ式初頭に再編された器種でありそれ以前とは異なる意味合いをもつ器種として注意する必要がある(加納1997、原田1998)。・・・略・・・東日本において大きな影響を与えた伊勢湾系土器群であるが・・・略・・・当初よりセットをなしていたものが波及したのではなく、拡散とほぼ同時期に伊勢湾地域においても新たに再編成された土器群であり、見方をかえれば、伊勢湾系の拡散、定着とは、伊勢湾地域を含む東日本における土器群の再編成と一部器種の普遍化現象、あるいは東日本的な共鳴現象として捉えられるのではなからうか。」としている(原田2000)。

原田は、「第1次拡散期」と連動して、尾張の土器様式が確立したとする。その状況は、早野が濃尾平野でのS字甕の定着について、0～Ⅰ段階(廻間Ⅰ式0～3段階)は0～3割程度であったものがⅡ段階(廻間Ⅰ式4段階からⅡ式1段階)には6～7割前後を占め、甕の主体として定着する(早野2000)とすることからもうかがえる。東日本域での小型器台等共有形式からなる土器様式群の形成については、北陸でも明確には漆町5群のこととできる。いわゆる東日本型とできる高杯、そして小型器台は、外来系土器とできるのであろうが、組成として展開する。高杯や小型器台を尾張系譜とできるか、北陸でのオリジナルとして評価すべきかはともかくとして、尾張での「第1次拡散期」に連動した動きの中で、東日本域で土器様式が刷新される地域がみられ、形式を共有した土器様式(群)が成立するのは確かといえる。

もう一点、先でも触れたが、赤塚は廻間Ⅰ式期の様式的特徴について、「閉鎖的・個性化を志向するような様相を強める時期」とする。しかし、個性化・孤立化とする様式的特徴を、廻間Ⅰ式4段階以降の盛んに土器移動させる土器様式がもつ特徴とはできないのではないかと。確かに尾張では土器を移動させても、外来系土器を受け入れないようである。それは個性堅持の一つの指標であろうが、該期での有段口縁壺の出現一つをみても外からの影響抜きには評価できない。該期に尾張の個性をみだせても、「閉鎖的」、「孤立化」とする廻間Ⅰ式の様式的特徴と一括することはできないと考える。

該期東日本域での土器移動では、尾張が枢軸的役割を担っていたのは確かであろうが、その領域は特定する必要がある。北陸南西部での土器移動は、「第1次拡散期」の段階で移動ルートが変化すると想定している。それまでの北陸北東部を經由した関東(東北)ルートが途絶え(遮断?)⁽¹²⁾ 代替えであるかのように、伊勢から上総(内房)へのルートでの移動が盛行するとの予測⁽¹²⁾ している。このルート転換は、廻間期での土器移動と無関係とはできないであろう。そして該期での土器移動は東日本に限らない。列島レベルでの動きとできる。該期の土器移動は、列島レベルで共有形式を生み出す動きともできる。現象的には「閉鎖的・個性化」を志向していたそれぞれの地域様式の再編・統合の動きとできる。ただし、該期の土器移動は、畿内等一局に収斂する動きでもなければ、地域を限れば地域形式を解体する動きでもない。廻間期に大きな動きがみられるのは確かである。

加納は、「瑞穂期以下の諸期は土器編年でいえば細別にあたる。・・・略・・・大別は唯一の様式上の大きな画期、すなわち重大な器種構成の変化に基準を置くべきだと考える。廻間期は、器台・鉢が消

失する一方、小型器台が出現し各種小型鉢が盛行する。ここに瑞穂期以下の諸期における最初の大きな様式的画期を見出し、大別の境界を設定したい」とする(加納1991a)。

また、加納は、土器変化にはAタイプとBタイプがあるとした筆者の理解を(田嶋1995)と取り上げ、該期での変化は、東国ではA・Bタイプが同時に進行した画期とする(加納1997)。筆者は、北陸を視野に該期はAタイプの変化期と理解していたが、加納が指摘するとおり東日本域には両タイプが同時進行した地域が確実にみられるようにも思われる。その見極めの視点を明確にし、変化を具体的に検証、領域を確定していく作業は重要な課題と考える。該期の画期性と土器移動の評価にも係わろう。尾張はAタイプ変化の領域として整理しておく。

2) 能田旭期と白江式

白江式については、漆町編年時には土器移動が明確にみられる漆町5群、廻間期併行期からとしていた。その後、漆町4群段階での、もっぱら移出のみの土器移動が明らかとなり、在来形式でも、とくに祭式土器群での壺から鉢への移行、台付き形式の顕在、装飾器台の定型化等の変化を評価し、漆町4群から白江式とした(田嶋2006, 2007)。このことにより漆町4群での白江式の設定は、僅かであつても廻間期に先行することとなった。

白江式との対比で、そのはじまりと併行する能田旭期の土器群の特徴と土器移動について検討する。能田旭期での様式評価は、先での、波及形式は「廻間Ⅰ式のなかにその祖形を見出せる」との評価と(原田2000)関連しよう。そして土器移動では、地域間で遅速があると考えている。そのはじまりと終焉を検討し、尾張の土器移動をその時間軸のなかに位置づけるのが基礎的作業と考えている。

なお、このことの検討の前に加納の指摘に触れておく(加納1991)。加納は、能田旭期と廻間期の界線には未確定な点が残っているとし、東日本での土器交流が能田旭期末に遡る可能性がある。畿内との併行関係がいまだ不安定なこともあって、交流の開始時期に関する東・西日本の相互関係でなお不明な部分が残っている。しかしいまは、廻間期をもって東海地方最古の土師器としておく、とする。前者は、廻間期の上限が能田旭期に遡る可能性を残した指摘と理解できようが、留意すべきは後者にある。加納の意は正確には分からないが、畿内との併行関係が確定し、交流の開始時期が明らかになれば、能田旭期と廻間期の評価と界線の見直しもあるとしているのは確かとできよう。しかし、尾張の土器移動は、畿内との併行関係の確定と関わりなく廻間期頃であるのは動かないはずである。どのような意味で畿内との併行関係、交流の開始時期のことを指摘したのであろうか。このことの議論はこれ以上できないが、その後、庄内甕・S字甕等の薄甕の出現、開脚の小型器台・小型高杯の出現、古墳出現期の全国的な土器交流の始まり、についての伊勢湾地域と畿内との時間軸に触れている(加納2004)。以下での検討と深く関わるように思われたので、ここに挿入した。

加納は、能田旭期の特徴として、「東海地方を代表して拡散公布する器形が出現」、「種々の器種に小型品が一定量存在する」等々を指摘する(加納1991a)。赤塚も、廻間Ⅰ式2段階以降、S字甕A類の成立、高杯でのA2、A3、B2の出現、壺でのパレス文様の確立や壺Cでの基本形の成立、鉢B1の消失等をあげる(赤塚1990)。そして、赤塚があらたな時代の幕開けを知らせる形式とした小型精製土器群は(赤塚2001)、Ⅰ式後半段階には衰退ないしは動態がわからなくなる。

この動きは、両氏が、廻間Ⅰ式中、能田旭期で、廻間期(様式)を象徴する形式が成立し、山中様式からの形式の消失、ないしは廻間Ⅰ式前半での形式が衰退する動きがあったと、しているととれる。確かに、該期では小型器台等の共有形式は明確でないし、廻間様式が組成としての確立に至っていないともできよう(原田2000、早野2000)。が、ちなみに漆町4群併行期の北陸北東部での能登形

甕は、多分に印象の域を出ないが、甕構成比で50%を超えることはないとみている。そのことから、廻間期での動きを過小に評価するものではないが、該期での廻間期を特徴づける形式の成立等々を、廻間期成立の契機として評価する必要があるように思われる。そして、この理解に立てば地域形式の確立と共有形式の有無は切り離されることになる。赤塚が土器移動を踏まえても「廻間様式には変化はない」とするのは、このあたりのことを指しているのであろうか。

地域間においては、土器移動と小型器台等共有形式の組成化は必ずしも連動しない。さらには、地域形式の確立と土器移動の時期も必ずしも連動しない。このことを土器移動からみる。

北陸南西部では、先に触れたように能田旭期併行期の中で土器移動を開始する。それは、西方への移動のみではなく、東方では越後・信濃までは確実にみられる。漆町5群以降の土器移動との比較では、移入は原則みられず、移出の範囲も特定されるが、量においては、必ずしも希少とはできない。そして、北陸南西部での土器移動は、尾張での「第1次拡散期」に先行するが一連の動きと理解できる。⁽¹³⁾

一宮市・宇福寺で漆町4群頃の北陸型器台（愛知県埋文2006）が出土している。早野は、当該遺跡周辺では中部高地・北陸系土器が顕在することをあげる。少なくとも北陸型器台は「第1次拡散」期に先行する尾張での土器移動の事例とできる。

安城市・本神遺跡では環濠から多量の叩き甕他が出土している（安城市1998）。「第1次拡散期」に先行する動きとできる。⁽¹⁴⁾他にも釈迦山遺跡（安城市2001）、鹿乗川流域遺跡群F地区（安城市2005）等でも叩き甕他がみられる（加納2007）。そして、三河での叩き甕は、その移動ルートからみて伊勢でも、土器移動がはじめていたことを示すことができよう（加藤1998）。

美濃、飛騨でも該期に土器移動がみられる。大垣市・今宿15層（岐阜県文化財保護1998）、関市・南青柳SB9（岐阜県文化財保護2002）、同市・砂行大溝（岐阜県文化財保護2000）、同市・深橋前SBA10（岐阜県文化財保護2003）、飛騨市・中野大洞平4号住5号住、SZ3（岐阜県教育文化2006）等に、北陸系の形式がみられる。変容著しい型式が目立ち、丹後系の形式との区別が不分明な型式も含むことから時期の特定は難しいが、漆町4群にのぼる資料を含むとみている。恩田は、上記砂行大溝、中野大洞平を除く美濃の事例についてⅣ2期、廻間Ⅰ式2・3段階併行とし、美濃山間部では、Ⅵ2期になると北陸系土器や近江系土器がみられるようになる、とする（恩田2004）。

尾張低地でもその北部では土器移動がはじめていた可能性があり、三河では明確な土器移動がみられた。美濃・飛騨でも土器移動がみられ、伊勢でも予測できた。畿内では、該期に吉備や東四国を中心とした土器の移動がみられる。北陸南西部の土器移動をもち出すまでもなく、該期には「第1次拡散」期に継起する動きとできる土器移動が、列島のいくつかの地域でははじめていたのは確かとできる。土器移動は地域ごとに時期差があり、畿内への土器移動では山陰系土器群が遅れるのは周知の事である。

S字甕A類古段階の土器移動がみられないのは、尾張においても主体となる存在ではないことと関連するののか（早野2000）。関川は、大和ではA類段階では受口状口縁甕がもたらされたと思われるとする（関川1987）。また、甕以外の形式についてはどのような状況にあるのか。等々の検討作業を残しているが、定量的な土器移動が廻間期にあるのは確かであろう。そして能田旭期の尾張が土器移動のはじまりの渦中に在ったことも確かであろう。

「地域形式の確立」、「共有形式の組成化」そして「土器移動」は、いったん切り離して検討する必要があると考えている。その事で地域的特徴がみえてくると考える。尾張での、廻間期の動きはきわめて大きく、「第1次拡散期」での土器移動により東日本域へ多大の影響を与えた事実は動かない。

しかし、能田旭期の中での形式・型式変化を評価し、廻間期の画期を、広域編年の中に位置づけることで、尾張の特徴と、「第1次拡散期」の意味するものが、よりみえてくるように思われる。

5 廻間Ⅲ式と漆町7群

先では、漆町7群は廻間Ⅱ式4段階からⅢ式1段階に併行するとした。

赤塚は、廻間Ⅱ式4段階からⅢ式1段階での多くの変化を指摘するが、とくに注目すべき変化に、廻間Ⅱ式後半での高杯A2の消滅、A4の出現、高杯文様の終焉。Ⅲ式1段階でのパレス壺類Aの衰退、同じく壺Cの衰退をあげる。その変化は、廻間1式後半段階あたりで確立した廻間様式固有形式の衰退にあたると思う。それは漆町7群での月影形式衰退の動きと重なる。

一方、該期には、S字甕C類が出現し、柳ヶ坪型壺(E1)等々の新たな地域形式を生み出す。そして、外来系形式の波及は少ない。北陸南西部での、布留祖形甕に代表される外来形式波及と地域形式を急激に衰退させる動きとは大きく異なる。

しかし、該期まで地域甕を存続するのは尾張だけではない。東日本域ではむしろ通常の形といえる。さらに尾張では、該期を前後して新たな固有の形式を生み出し、尾張の地域色は、形式・型式を変えて維持されるが、これまた東日本のいくつかの地域でみられる動きである。このことから、具体的な形式は次項で触れるが、該期は廻間Ⅰ式後半以降に確立した尾張の特徴的形式が一端変質し、再編成が始まる時期として評価する必要があると考える。それが尾張では地域の特徴を堅持していたとしても、廻間様式盛期の形式が衰退し、新たな装いをもつて再編される変化のもつ意味は小さくない。該期には、あたりまえのことであるが、畿内においても庄内式から布留式に転換するのである。畿内でも、様相で同一とはできなくとも、「地域」形式の転換を図るのである。

なお、様式区分では、併行関係から漆町7群が廻間Ⅱ式とⅢ式をまたぐことになる。このことについては、赤塚が、Ⅱ式の中で土器様相に変化が現れるとしていることや、加納がS字甕C類の指標に関し、B類にみられる頸部外面の沈線はC類の指標ではないか(加納2000)としていること等を踏まえるならば、小様式区分に検討の余地が残っているようにも思われる。

6 廻間Ⅲ式後半と松河戸様式

廻間Ⅲ式後半の変化 廻間Ⅲ式2段階の廻間SZ01周溝出土の土器群には、畿内系有段口縁壺、小型器台C(西村2008)がみられ、出自はともかくとしても尾張では新出形式とできる鉢がみられる。墳墓としての特性を加味する必要もあるが、該期において定量の畿内系形式が波及していたのは確実といえる。また、廻間Ⅲ式3段階以降には、上記形式に加え布留甕、有段口縁鉢、小型丸底壺、屈折脚高杯等の畿内系形式が、僅かとはいえその量を増加させる。

赤塚はⅢ式後半期(3・4段階)の特徴について、S字甕C類新段階、柳ヶ坪型壺、低脚高杯類、器台H・I・F、小型丸底壺といった所謂従来の古墳時代前期を代表する土器群を伴うものである。また小型精製土器3種が尾張平野でやっと出揃う時期である。この時点における器台の特徴を一言でいえば東海系器台の消滅にある。とする。さらに、廻間Ⅲ式期には東海系器台とは系譜の異なる器台H・Jが参入し、後半期でその形態も含めて定着する。また貫通孔をもたない形態が増大して、器台Iも含めて畿内系器台の影響が随所に認められるようになり、それと同時に東海系器台とおきかわるような在り方をみせる(赤塚1993)とする。

以上は、器台の検討を目的とした論文からの引用であるが、該期の状況を明快に述べると共に、Ⅲ式2段階とⅢ式後半段階での布留系形式の在り方の違いについても、重要な指摘をしているととれ

る。廻間Ⅲ式2段階は、畿内系形式の明瞭な波及という点でⅢ式1段階までの土器群とは様相で変化がみられ、Ⅲ式後半段階は、畿内系形式が一層波及する。赤塚が論点とした小型器台では東海系器台が衰退し、布留系の影響を受けた器台に置き換えられたとする。布留甕の増加もⅢ式3段階以降とする（赤塚1993）。小型器台以外の形式の置換には触れていないが、一部にせよ祭式土器が畿内系形式に塗り替えられたとでき、廻間Ⅲ式後半には、尾張において、北陸南西部でみた漆町9群に類した変化が進行していた、とできるのではなからうか。

廻間Ⅲ式後半と松河戸Ⅰ式1段階 赤塚は上記の指摘をしながらも、Ⅲ式後半を廻間様式に留め、その動きを一層進めた段階の松河戸Ⅰ式前半1段階とは、松河戸様式、大別様式で分離する。一方、加納は、廻間Ⅲ式1段階も含め塔の越期とし、松河戸Ⅰ式前半1段階を西北出期、松河戸Ⅰ式2段階から松河戸期とする。そして、西北出期と松河戸期との間に様式上の画期をおく。赤塚と加納の相違は、微調整で済む議論ではない。

図4には、該期の尾張でみられる形式をあげた。赤塚の分類に即せば（赤塚1990 編年図）1は柳ヶ坪型壺でもE2、2は山陰系口縁の甕で60のタイプ、3の高杯はA2（赤塚1994）4の小型器台は157、5の小型丸底壺は288のタイプである。まず指摘しておきたいことは、これら形式は廻間Ⅲ式後半併行期には確実にみられ、松河戸Ⅰ式前半までは確実に継続することである。同様の推移をみせるものに、布留甕、屈折脚高杯、布留型器台、屈折鉢、小型丸底壺等の畿内系形式がある。

これら形式の中で、屈折脚高杯は、廻間Ⅲ式後半での希少さもあって、赤塚は、その普及を松河戸様式成立を象徴する要素とするが、吉田英敏は、可児市・宮之脇B地点の調査を踏まえ、屈折脚高杯は前Ⅲ期（廻間Ⅲ式後半、筆者追記）で「突如4倍になる」。前Ⅲ期について「次期の変化が現れはじめるといえよう」とし（吉田1994）、廻間Ⅲ式後半期から松河戸Ⅰ式前半への連続性を指摘する。東日本域では、廻間Ⅲ式後半期に汎東日本型とできる高杯から屈折脚高杯への転換をはじめたとするのが実態であろう。東日本域での希少地域として尾張を位置づけられようが、その動きの顕在をもって様式的画期とするのは、尾張では時間軸の指標となろうが、広域編年にはなじまない。同一の様式とすることで、地域間での跛行的な動きと尾張の位置がみえてくる、と考える。

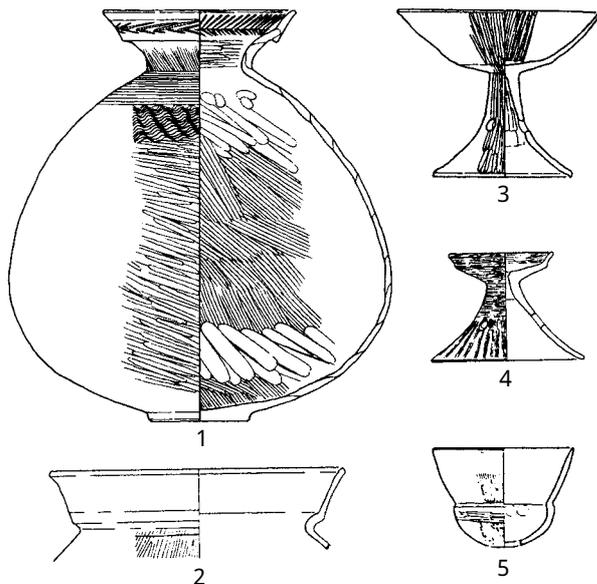


図4 尾張にみられる形式（S=1/6）
1：廻間SZ01 2：若葉通SB2 3：月縄手SX02下層
4：岩倉城SX1201 5：宮之脇2号住

図3に戻る。図3にあげた形式の全てを尾張出自とは考えていないが、尾張にこだわらなければ、ほかにも伊勢型二重口縁壺、結合器台（滝沢2005）中実脚の高杯、そして今後検討を進めたいが、千葉型五領甕（大村1994）、東北南部にみられる精美な調整の「くの字」甕等々、東日本域固有の形式は多い。それらは廻間Ⅲ式後半には確実にみられ、一部は畿内にも展開するが、おもに東日本域に展開する形式とできる。東日本域でも、畿内の布留式の動きと連動するように固有形式が成立・展開していたのである。そして、一部の固有形式の成立は廻間Ⅱ式に遡ろうが、廻間Ⅲ式後半には揃い、松河戸Ⅰ式の前半に継起する。これら形式は、東日本域での固有の動きを象徴していると捉える。松河戸Ⅰ式1

段階を松河戸様式に含めることは、これら幾多の地域形式の消長おも分断することになる。

東日本域でのこれら形式の消長、その土器移動と領域の整理・評価は、今後進める東日本域での検討作業の中でのきわめて重要な課題と考えている。

松河戸Ⅰ式Ⅰ段階について 先項と一部重複するが、松河戸様式と松河戸Ⅰ式Ⅰ段階の様相を対比する。松河戸Ⅰ式Ⅰ段階は、その組成においてそれ以降と異なる小様式と考える。そして、松河戸様式の中では異質である。

赤塚は、廻間Ⅲ式と比較して松河戸Ⅰ式になると、「基本的な型式群が大きく崩れ、器種そのものが変わってしまう点が重要である・・・略・・・多くが消失ないし激減し、替わって屈折高杯に代表されるまったく新たな形式が参入する。と同時に高杯の量的な比率も一気に増大する。さらに壺や小型壺にもあらたな形式が存在するようになる。・・・略・・・器壁の厚化、調整技法の著しい省略化が全体の器種に見られ」（る）とする（赤塚1994）。しかし、赤塚が指摘するこれら変化は、屈折高杯の普遍化を除けば、松河戸Ⅰ式Ⅱ段階以降のことにあたる。そして、大枠的にいえば、Ⅰ段階は赤塚の指摘とは逆に、廻間Ⅲ式後半の形式が継続するとできても、屈折高杯さえ含め、新たな参入形式はない。強いてあげればS字甕D類と、赤塚が予測としてⅠ段階に登場するとする小型壺Bは除外される。このことは、赤塚が作成した編年図をみれば明らかなことである。廻間Ⅲ式に参入した畿内系の形式はⅠ段階に続く、先で地域形式とした形式群も確実に継続するのである。早野は、三ツ井Ⅱ期を松河戸Ⅰ式Ⅰ段階とし、その組成から「様式移行期」の実相として、「この段階にあらゆる器種の変化がみな揃って実現した訳ではないことを明らかにした」とし、該期の組成を詳しく記述している（早野1999）。

松河戸様式に対する赤塚の指摘は、Ⅱ段階以降の様相であることは、あまりに明らかである。しかも、該期の指標とされるS字甕D類の登場も「形式」変化か「型式」変化かの議論がのこるのである。

加納は、西北出期と廻間期の間で大画期があると明確に指摘した（加納1991a）。赤塚は加納の指摘を「基本的には小型精製土器の崩壊に基づく原則論」とする（赤塚1994）。原則論としたのは、「型式学に基づく分類や組成研究からは文化を見通す基本的な視点が見えにくい」との理解によるもの（赤塚2001）ととれるが、はたしてそう言い切れるのか。

赤塚は、様式設定にあたって「最も重要で心がけている点は、その全体性であるイメージ性「志向性」と考えている」（赤塚・早野2001）とする。該期での屈折高杯の普遍化でみるならば、目立つ形式であり、現象面での刷新は目をはるものがある。列島レベルでの共有形式でもあり、従前までの尾張の個性とは異質な形式として強烈な印象を与えたともとれる。赤塚の言葉を借りれば、「全体性であるイメージ性」と係わるのであろうか。しかし、松河戸Ⅰ式前半のⅠ段階での屈折高杯の普遍化は、廻間Ⅲ式からの「志向性」、尾張は拒否していたとしても、広域的には「志向性」の帰結なのである。そして何よりも指摘しておきたいことは、Ⅱ段階以降の土器群は、Ⅰ段階の「志向性」から継起する土器様式でない、と考えていることにある。

高木洋は、岐阜市・堀田・城之内遺跡の検討から、「S甕Dも屈折脚高杯もそれ独自では元屋敷期との画期を主張するほどの内実を伴っていないということが出来る」とする（高木1996）。

7 松河戸様式と宇田様式

先項では、赤塚・早野の松河戸Ⅰ式Ⅱ段階以降のⅠ式を漆町11群、松河戸Ⅱ式を漆町12群、宇田Ⅰ式からⅡ式Ⅰ段階を漆町13群、Ⅱ式Ⅱ段階を漆町14群併行とした。

該期の様式区分では、加納は、漆町11群と12群併行期を松河戸期とする小様式で一括し、宇田期と対峙させる。そして、宇田期の成立を廻間期、松河戸期に続く第3の様式的大画期とする（加納1991a）。赤塚・早野は、松河戸式をⅠ式とⅡ式に細分するが様式では一括し、Ⅰ式とⅡ式は、宇田様式に対峙する様式とは評価していないとできる。そして、赤塚の八王子古宮式以来の様式区分は大別様式とみられることから、加納同様、松河戸式と宇田式は大別様式での区分と、とれる。

畿内の様式区分と比較すると、森岡・西村の布留式新段階が松河戸Ⅰ式1段階を除く松河戸期、「中期」のはじまりが宇田期のはじまりとできよう。そして森岡・西村は、松河戸期併行期の布留式新段階を布留式中段階の後続様式と評価し、宇田期併行期を「中期」の画期とする（森岡・西村2006）。森岡・西村の宇田期の様式的評価は、加納、赤塚・早野と共通するとできる。そして、布留式新段階を布留式中段階と連続した様式としている点では、尾張での評価以上の大画期ととらえていることにもなろう。布留式中段階と布留式新段階との様式評価は、先稿でも多く触れたので省略し、ここでは、松河戸期と宇田期の区分についてみる。

漆町編年では、松河戸期併行期を漆町11群と12群の（小）様式に区分し、宇田期併行期も漆町13群の（小）様式として捉えた。そして、漆町11群から13群までを大別様式で一括し、漆町14群の成立を画期とした。

赤塚が指摘するように、松河戸Ⅱ式には、高杯Cの参入、小型壺の増加、宇田甕の成立がある（赤塚1994）。対して宇田様式では、その当初において、甕Dの出現、小型壺A・Bの消滅（激減）、高杯D期が出現し（早野2001）、この様式内に椀も確立する。加賀の事例で追加するなら、甕、広口甕（鍋）、湯沸かし甕等が確実に定着し、煮炊具においても新たな組成を完成させる。その点で、松河戸Ⅱ式（漆町12群）と宇田式（漆町13群）の変化を対比すれば、宇田式での変化がより大きいともとれる。しかし漆町編年では、漆町11群にはじまった中期土器様式への階梯の中に漆町11群、漆町12群、漆町13群を位置づけており、漆町13群をのみを別の大別様式とする理解はとらなかった。

この議論は、漆町8群と9・10群での様式区分に通じるものがある。漆町13群では椀の成立等々、次の様式に続く顕著な形式がみられることから、新たな様式のはじまりともとれる。その評価が該期の様式区分と係わっていると考える。が、続く漆町14群では須恵器の定量的な供給により土師器と須恵器の機能・用途別分化が進行し、一方では、須恵器供給状況に極端な地域格差が現れ、そのことを背景とした大きく異なった土器様式が形成される。そして組成では高杯が減少し、主食器が椀・杯に変わる等の変化がみられる。これら動きは、大きく括れば漆町11群からの動きともできるが、地域窯の稼働による素材も含めた様式構造差の顕在や、より直接的な律令型の食器組成の模索等を指標とすれば、漆町13群からではなく、漆町14群にはじまる動きと評価すべき、ととらえる。繰り返すが、宇田期、漆町13群は、漆町11群からはじまった推移の完成期としての小様式と評価する。

今後とも検討を続けたいが、この理解に立つ限り、松河戸様式と対峙させる形での宇田様式の設定には賛同できない。そして、宇田Ⅱ式後半が様式内容で宇田様式で括れるとも考えていない。

本稿を書くにあたっては、資料調査はもとより、休日に時間を作っていただきご教示をお願いしたり、突然の電話でご教示、資料の送付をお願いしたりもした。また、日常的にご教示いただいている方々も多い。未筆ながらここに御礼申し上げます。

註1 赤塚編年を「徹底した型式分類による時間軸の設定」とした。あえてこの形容をとったことの、意とすることを赤塚1990により2点示しておく。それは、赤塚編年との併行関係を考えていく上での前提事項でもある。

第1点。廻間SZ01東溝屈曲部内側から柳ヶ坪型壺が2点出土している。赤塚は、SZ01墳丘上で祭りが実施されその時の道具が投棄されたものとし、その時期を廻間Ⅲ式2段階とする。ところが編年図をみると、柳ヶ坪型壺249は廻間Ⅲ式2段階、250は廻間3段階に編年されている。このことは、249は廻間Ⅲ式2段階に主体的な型式であり、250は廻間3段階に主体的な型式と評価した型式分類の成果なのであろう。が、ならば投棄の時期は廻間Ⅲ式2段階なのか3段階なのか。それとも時期幅があったのか、との解釈も生まれる。それは、廻間Ⅲ式2段階とする柳ヶ坪型壺(E2)成立の時期とも係わる。そしてこのことから「段階」は(細別)様式ではないと判断している。当該資料は一括資料でない可能性を残しており、赤塚も「段階」を細別様式として再構築する必要がある(86ページ)としているが、あえてこだわったのは、他にも類似箇所がみられ(註7)ここに廻間編年の特徴があるとみたからである。

第2点。廻間編年の「キイ」は、まずもってS字甕にあるとできよう。S字甕A・B・C類は、結果としてであれ、Ⅰ式からⅢ式の「式」に対応している。そのことから、「式」の区分は、S字甕による時間軸での区分であっても、土器動態でくられた(小)様式ではない、「段階」の区分と同様、と思えてしかたない。

赤塚は、「式」は(小)様式区分であるとしている、ととれる。S字甕の形式(型式)分類と土器動態とが合致する事もあるし、小様式で括ることを全くしなかったとはしないが、赤塚自身が示す諸形式消長の詳細な記述と「式」の区分は、必ずしも一致していない。さらには、廻間式と松河戸式との区分、大様式間の区分と考えるが、そこでもS字甕が登場する。後項で触れるが廻間Ⅲ式後半と松河戸Ⅰ式前半1段階を構成する形式(型式)の違いは、極論すれば、S字甕D類の有無しかない。そこには赤塚の思いはともかくとして、S字甕により区分されている実態がある。

赤塚の「段階」、「式」は時間軸での区分なのであろう。ないしは時間軸を優先した区分なのであろう。土器様相による区分は、その手法から時間軸を曖昧にする側面をもつ。形式、型式の五月雨的变化は把握しづらい。赤塚は、厳密な時間軸を設定し、土器の様相は、その時間軸のもとで整理することを目指したのかもしれない。土器様相の変化は、「段階」、「式」の中にあっても、またいでもかまわないのである。現にそのような記述が各所にみられる。土器様相を軸とした編年での「段階」、「式」とは、直接的に対比できないことを承知する必要がある。上記での筆者のS字甕による区分が優先されている、等々は、的を射ていないのである。ただし、廻間様式等、「様式」を冠した場合の土器群の評価は、この限りではない。

註2 近江では、植田文雄(植田1994)、宮崎幹也(宮崎1994)、丸山雄二(丸山1995)、杉浦隆支(杉浦2005)等が東海と畿内との併行関係を提示し、兼康保明(兼康1990)、伴野幸一(伴野2001・2006)は、畿内との併行関係、近藤 広は東海との併行関係を提示している(近藤2004)。

註3 田嶋2007では、表1で南新保J区1号溝を該期の標式としてあげた。当該資料は、古代の遺物を含み遺物量も少ない。該期の資料を含む猫橋1号溝と混同したとしか思えない全くのミスであり、ここに削除、お詫びしたい。

註4 該期は大きな画期とできる。ただし、八王子古宮式あるいは丹後での三坂神社式、北陸でのV-1期の様式帰属については、V様式の範疇で理解して良いのか検討の必要があると考えている。

註5 図1は、V-2期から漆町3群までの器台であるが、必ずしも、北陸において主体をなす形式ではない。V-3期の事例としてあげた図1-2の型式までは、近江系と特定できるものではなく、それぞれの地域で子細には型式的変異もあろうが、北陸も含め、広範囲に分布する形式(共有形式)とみたい。対して、図1-3の漆町2-1群以降の形式は、小竹森が、近江が分布の(筆者追記)中心的地域であるとするC類とD類に相当するとみられる(小竹森1998)。そして、尾張では、図1-2の型式までは類似資料がみられるが、その後は、別の型式変化を辿ったとみている。該期の近江系形式に関しては兼康保明、近藤 広より教示をえた。

註6 廻間Ⅲ式1段階とする見解も提示(赤塚1992b)

註7 布留祖形甕がみられるSB52は、遺構の時期ではⅡ式2段階から3段階とする。一方、同豎穴出土の高杯99は編年図で

廻間Ⅱ式2段階と扱われ、当該布留祖形甕はⅡ式4段階とする。そして布留祖形甕の出現時期は、別にSB60の資料をあげⅡ式3段階からとする(赤塚1990、99、101ページ)。

SB52に供伴するS字甕の組成は、廻間Ⅱ式2段階の標識とするSB33、SB48の組成と類似しているようにみえ、対して、Ⅱ式3段階とするSB60とは明らかに異なる。S字甕の分類には不案内であり、当該竪穴資料を一括とできない可能性も大いにあり、同時に型的的操作を経た結果とも思われるが、当該布留祖形甕をⅡ式2段階でなく4段階とすることの根拠が分からない。それ故、布留祖形甕の供伴のはじまりは、2段階でも良いようにさえ思われる。

註8 今回の検討によれば、廻間Ⅱ式3段階頃に併行するのは、庄内式中段階後半でもなければ、新段階前半でもなく、新段階後半(辻土坑4下層)となる。そして、赤塚はⅡ式3段階前後に、多くの形式・型式変化があることも指摘している(赤塚1990 第6表)。このことは漆町6群の間延び感のみでなく、逆に間延び感のあった布留0式(古段階)の時期幅、そして様式的特徴と評価にも係わる。現状では多くの検証作業を残しているが、今後検討を進める上での留意事項と考えている。

註9 小型壺B類は1段階に出現するとしている(赤塚1994)。

註10 早野浩二教示。椀の出現に時期差のある地域がみられるのか、検討課題としたい。

註11 瑞穂期と廻間Ⅰ式0段階との時間軸。加納は名古屋市・瑞穂4次SB02、廻間SB02を瑞穂期古段階の標識とする。赤塚は4次SB02を山中Ⅱ式3段階、廻間SB02を廻間Ⅰ式0段階とする。本稿では、瑞穂期(古)として包括された土器群が、山中Ⅱ式3段階と廻間Ⅰ式0段階に分解されていることから、瑞穂期と廻間Ⅰ式のはじまりには大きな時間差がないととらえておく。

このことは、本文で検討している高杯A4の出現時期の問題でもある。当該形式を山中Ⅱ式の形式とみるか、廻間式の形式とみるかは、北陸での漆町2群(法仏期)の北陸型形式の成立との関連でとらえるか、漆町3群(月影式)での新たな形式の成立との関連でとらえるかに連動する。上記、瑞穂期と廻間Ⅰ式0段階との時間軸での理解は、漆町3群(月影式)成立期の動きととらえることになる。そしてこのことは山中Ⅱ式3段階の評価と係わる。今後とも検討を続けたい。赤塚次郎の教示を得ている。

註12 漆町4群から6群にかけての土器移動については、別稿「大型建物造営期の「越」の土器様相」で触れた(印刷中)。

註13 土器移動は該期に限られたことではない。北陸南西部の土器移動でみた場合、直近では漆町2群から3群の古段階にみられるが、3群の中に中断ないし減少する時期があると予測している。このことを普遍化できるのか、西日本ではどうか等検証作業を残しているが、北陸南西部の土器移動に中断ないし減少期がみられることから、該期での土器移動を「第1次拡散」期と一連の動きと、とらえた。

註14 加納俊介教示。また、川崎みどりには資料の提供を受けた。

引用・参考文献(論文等)

青木勘時 2000「S字甕・二重口縁壺集成 奈良県」『S字甕を考える』第7回東海フォーラム三重大会

2006「第Ⅰ部 古式土師器の編年集成 大和地域」『古式土師器の年代学』大阪府文化財センター

赤塚次郎 1990「廻間式土器」「土器・土器群の形成」『廻間遺跡』愛知県埋文

1992a 「廻間Ⅰ式覚書92」『庄内式土器研究』1

1992b「東海系のトレース」『古代文化』第44巻第6号

1992c「山中式土器について」『山中遺跡』愛知県埋文

1993「東海系器台覚書」『庄内式土器研究』4

1994「松河戸様式の設定」『松河戸遺跡』愛知県埋文

1997「廻間Ⅰ・Ⅱ式再論、西上免古墳を巡る2つの問題」『西上免遺跡』愛知県埋文

1996「前方後方墳の定着」『考古学研究』3巻2号

- 2001「濃尾平野における弥生時代後期の土器編年」『八王子遺跡』愛知県埋文
- 2002「総説 土器様式の偏差と古墳文化」『考古資料大観』第2巻
- 赤塚次郎・早野浩二 2001「松河戸・宇田様式の再編」『研究紀要』第2号 愛知県埋文
- 甘粕 健・春日真実 1994『東日本の古墳の出現』山川出版社
- 石黒立人 1989「朝日遺跡」『年報 昭和63年度』愛知県埋文
- 石野博信・関川尚功 1976『纏向』桜井市教委
- 植田文男 1994「湖東北域の近江系について」『庄内土器研究6』
- 大蔵順子 1992「吉田奥遺跡」『上之山』瀬戸市教委
- 大村 直 1994「戸張一番割遺跡の覆形」『史館』25
- 恩田知美 2004「美濃地方における弥生時代後期から古墳時代初頭の土器様相」『美濃の考古学』第7号
- 2005「東海地域における地域間交流」『美濃の考古学』第8号
- 春日真実 2001「新潟県大洞原C遺跡の弥生時代末から古墳時代初頭の土器」『研究紀要』第3号 新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 兼康保明 1990「9 近江地域」『弥生土器の様式と編年』木耳社
- 加藤安信 1998「伊勢湾地域の叩き甕」『榑崎彰一先生古希記念論集』
- 加納俊介・浅野清春・北村和宏 1988「愛知県岩倉市小森遺跡出土の土器」『古代』第86号
- 加納俊介 1991a「土師器の編年4 東海」『古墳時代の研究』6 雄山閣
- 1991b「東日本における後期弥生土器研究の現状と課題」『東海系土器の移動から見た東日本後期弥生土器』第8回 東海埋蔵文化財研究会実行委員会
- 1993a「東日本における後期弥生土器研究の現状と課題」『転機』第4号
- 1993b「東日本における後期弥生土器研究の現状と課題・その2」『転機』第4号
- 1995「古式土師器の構造論的研究序説」『三河考古』第12号
- 1997「廻間式か元屋敷式か」『西相模考古』第6号
- 2000「S字甕の分類を考える」『S字甕を考える』第7回 東海考古学フォーラム三重大会
- 加納俊介・石黒立人 2002『弥生土器の様式と編年（東海編）』木耳社
- 加納俊介 2004「第三章 第1節 新時代への胎動」新編安城市史1
- 2007「第三章 特論 釈迦山遺跡・中狭間遺跡の放射性炭素年代測定」新編安城市史10 資料編考古
- 楠 正勝 1996「第5章 まとめ」『西念・南新保遺跡Ⅳ』金沢市・金沢市教委
- 北島大輔 2000「古墳出現期の広域編年」『S字甕を考える』第7回東海考古学フォーラム三重大会
- 小池香津江 1994「大和における東海系土器の流入」『庄内土器研究』5
- 2004「弥生後期の和と「山中式」『山中式の成立と解体』（第11回東海考古学フォーラム三重大会実行委員会
- 小竹森直子 1988「近江の地域色の再検討」紀要 第1号 滋賀県文化財保護協会
- 近藤 広 2004「近江からみた弥生後期の伊勢湾地域」『山中式の成立と解体』（第11回東海考古学フォーラム三重大会実行委員会
- 杉本厚典 1999「第三章 遺構・遺物の検討」『崇禅寺遺跡発掘調査報告』Ⅰ 大阪市文化財協会
- 杉浦隆支 2005「第3節 土器の考察」『石田遺跡』Ⅰ 能登川町教委
- 関川尚功 1976「纏向遺跡の古式土師器」『纏向』桜井市教委
- 1987「欠山・元屋敷と畿内の併行関係」『研究・報告編』第3回東海埋蔵文化財研究会 欠山式とその前後
- 1992「大和出土の東海系土器」『庄内土器研究』3
- 高木宏和 1998「美濃中濃域の古式土師器編年案について」『土器・墓が語る』第6回東海考古学フォーラム

- 高木宏和・鈴木元・小野木 学・村木 誠・宮越健司・石黒立人 2000「濃尾地域における古墳時代初頭の地域差」『S字甕を考える』第7回 東海考古学フォーラム三重大会
- 高木 洋 1996「第2節 各時代の集落動向について」『堀田・城之内』岐阜市遺跡調査会
- 高野陽子 2004「近畿北部における弥生後期土器様式と山中式」『山中式の成立と解体』(第11回東海考古学フォーラム三重大会実行委員会)
- 2006「第I部 古式土師器の編年集成 丹後地域」『古式土師器の年代学』大阪府文化財センター
- 滝沢規朗 1994「新井市斐太遺跡群の出土土器について」『新潟考古』第5号
- 2005「新潟県における古墳時代前後に盛行する装飾器台・結合器台について」『新潟考古』第16号
- 田嶋明人 1986「漆町遺跡出土土器の編年的考察」『漆町遺跡I』石川県教委
- 1987「2遺構・遺物の検討」『永町ガマノマガリ遺跡』石川県教委
- 1995「土器と古墳時代」『北陸古代土器研究』第5号 北陸古代土器研究会
- 2006「白江式」再考」『吉岡康暢先生古希記念論集 陶磁器の社会史』
- 2007「法仏式と月影式」『石川県埋蔵文化財情報』第18号(財)石川県埋文
- 2008「古墳確立期土器の広域編年」『石川県埋蔵文化財情報』第20号(財)石川県埋文
- 田中清美 1999「SE703出土韓式系土器と土師器の編年的位置づけ」『長原遺跡発掘調査報告Ⅶ』大阪市文化財協会
- 2000「韓式系土器と5世紀の土師器」『S字甕を考える』第7回 東海考古学フォーラム三重大会
- 辻 美紀 1999「古墳時代中・後期の土師器に関する一考察」『国家形成期の考古学 大阪大学考古学研究室10周年記念論集』
- 2002「河内地域における古墳時代中期の土師器」『長原遺跡発掘調査報告Ⅸ』大阪市文化財協会
- 寺澤 薫 1986「畿内古式土師器の編年と二・三の問題」『矢部遺跡』橿原考古学研究所
- 栃木英道 1994「能登地域の庄内並行期の土器群の変遷」『庄内式土器研究』7
- 1995「第8章 考察」『谷内・杉谷遺跡群』石川県埋蔵文化財センター
- 永井宏幸・村木誠 2002「3尾張地域」『弥生土器の様式と編年(東海編)』木耳社
- 日本考古学協会新潟大会実行委員会 1993『シンポジウム2 東日本における古墳出現過程の再検討』
- 西村 歩・池峰龍彦 2006「第I部 古式土師器の編年集成 和泉地域」『古式土師器の年代学』大府文化財センター
- 西村 歩 2008「中河内地域の古式土師器編年と諸問題」『邪馬台国時代の摂津・河内・和泉と大和』香芝市教委、香芝市二上山博物館
- 伴野幸一 2001「論考1 下長遺跡出土土器の編年的位置」『下長遺跡発掘調査報告書Ⅸ』守山市教委
- 2006「第I部 古式土師器の編年集成 近江地域」『古式土師器の年代学』大阪府文化財センター
- 服部信博 1982「岩倉城遺跡下層出土の古墳時代前半期の遺構と遺物」『年報平成7年度』愛知県埋文
- 早野浩二 1996「濃尾平野における布留式甕について」『年報』平成7年度 愛知県埋文
- 1999「3 弥生時代後期から古墳時代」『三ツ井遺跡』愛知県埋文
- 2000「S字甕の履歴(1)」『S字甕を考える』第7回 東海考古学フォーラム三重大会
- 2001「志賀」公園遺跡における古墳時代中期の土器について『志賀公園遺跡』愛知県埋文
- 2006a「(3) 他地域系土器」『島崎遺跡 伝法寺本郷遺跡 中之郷北遺跡』愛知県埋文
- 2006b「(8) 松河戸・宇田様式についての二、三の問題」『島崎遺跡 伝法寺本郷遺跡 中之郷遺跡』愛知県埋文
- 原田 幹 1992「北陸における東海系土器の動向」『石川考古学研究会誌』35
- 1994「S字甕の拡散からみた東海系土器の動向」『庄内式土器研究』5
- 1995「第2章 考察 上荒屋遺跡出土の「東海系」土器について」『上荒屋遺跡I』
- 1998「東海出土の北陸系土器」『考古学フォーラム10』考古学フォーラム

- 2000 「S字甕の波及と定着をめぐる問題」『S字甕を考える』第7回 東海考古学フォーラム三重大会
- 丸山雄二 1995 「第Ⅵ章 考察」『大塚遺跡』長浜市教委
- 宮崎幹也 1994 「近江湖北地域における庄内式併行期の土器」『庄内式土器研究』8
- 宮腰健司 1986 「朝日遺跡」『年報昭和62年度』愛知県埋文
- 1988 「宮之脇遺跡第2号住居跡出土土器について」『古代』第86号
- 村木 誠 1999a 「第8章 まとめ」『埋蔵文化財調査報告書30』名古屋市教委
- 1999b 「付編5名古屋域における弥生時代後期土器と環濠集落の動向」『埋蔵文化財調査報告書30』名古屋市教委
- 森岡秀人・西村 歩 2006 「第Ⅳ部 総括」『古式土師器の年代学』大阪文化財センター
- 谷内尾晋司 1983 「北加賀における古墳出現期の土器について」『北陸の考古学』石川考古学研究会
- 米田敏幸 1981 「第2節 古墳時代中期の土器について」『八尾南遺跡』八尾南遺跡調査会
- 1991 「土師器の編年 1近畿」『古墳時代の研究 6』雄山閣
- 1994 「河内における庄内式土器の編年」『庄内式土器研究』7
- 吉田英敏 1994 「第1項 古墳時代前期の土器について」『川合遺跡群』可見市教委
- 山田隆一 1992 「大阪府下出土の東海系土器」『庄内式土器研究』3
- 和氣清章 1999 「伊勢に於ける土器交流点」『庄内式土器研究』20

参考・引用文献（報告書等）

石川県教委・石川県埋蔵文化財センター

1987 『永町ガマノマガリ遺跡』、1988 『吉崎・次場遺跡』、1997 『猫橋遺跡』

羽咋市教委 1994 『吉崎・次場遺跡』

押水町教委 1992 『南吉田葛山遺跡Ⅱ』

金沢市・金沢市教委

1985 『金沢市南新保D遺跡』、1983 『金沢市西念・南新保遺跡』、1985 『金沢市松寺遺跡』、1986 『金沢市近岡ナカシマ遺跡』、1995 『上荒屋遺跡Ⅰ』、1991 『桜田・示野中遺跡』、1996、『金沢市西念・南新保遺跡Ⅳ』

松任市教委

1997 『松任市竹松遺跡』、1988 『松任市八田小鮎遺跡』、1989 『松任市中村ゴウデン遺跡』、1995 『旭遺跡群』、2000 『松任市中興・長竹遺跡』、2007 『白山市北安田舟橋遺跡 白山市北安田南出遺跡』

糸魚川市教委 1986 『新潟県糸魚川市後生山遺跡発掘調査概報』

富山県文化振興財団 2006 『下老子笹川遺跡発掘調査報告』富山県文化振興財団

上市町教委 1982 『北陸自動車道遺跡調査報告 上市町木製品・総括編』

鯖江市教委 1987 『西山古墳群』

愛知県教育サービスセンター・愛知県埋蔵文化財センター

1984 『勝川』、1992 『岩倉城遺跡』、1994 『貴生町遺跡Ⅱ・Ⅲ 月縄手遺跡Ⅱ』、1994 『松河戸遺跡』、1994 『朝日遺跡Ⅴ』、1997 『西上免遺跡』、2001 『志賀公園遺跡』、2002 『八王子遺跡』、2006 『V字福寺遺跡の調査』『島崎遺跡 伝法寺本郷遺跡 中之郷北遺跡』

名古屋市教委

1982 『瑞穂遺跡発掘調査概要報告書』、1987 『瑞穂遺跡』、1999 『埋蔵文化財調査報告書30』、1989 『若葉通遺跡』

安城市教委

1998 『本陣遺跡』、1999 『中挟間遺跡』、2001 『釈迦山遺跡』、2005 『鹿乗川流域遺跡群Ⅲ』

三重県埋蔵文化財センター 1992 『ヒタキ廃寺・打田遺跡・阿形遺跡ほか』

岐阜県埋蔵文化財保護センター・岐阜県教育文化財団

1998 『今宿遺跡』、1998 『荒尾南遺跡』、2000 『砂行遺跡』、2002 『南青柳遺跡 南青柳古墳大平前遺跡』、2003 『深橋前』、2006 『西ヶ洞廃寺跡 中野山越遺跡 中野大洞平遺跡大洞平5号古墳』

岐阜市教育文化振興事業団 1996 『堀田・城之内』、1999 『城之内遺跡』、2000 『下西郷一本松遺跡』

可児市教委 1994 『川合遺跡群』

瀬戸市教委 1992 『上之山』

滋賀県教委 1977 『矢倉川中小河川改修に伴う入江内湖西野遺跡発掘調査報告書』、1990 『正伝寺南遺跡』、1992 『針江北遺跡・針江川北遺跡(Ⅰ)』

長浜市教委 1995 『大塚遺跡』

能登川町教委 2005 『石田遺跡』

守山市教委 2001 『下長遺跡発掘調査報告書Ⅸ』

京都府埋蔵文化財調査研究センター 2003 『京都府遺跡調査報告第33冊』

奈良国立文化財研究所

1980 『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅲ』、1981 『平城京発掘調査報告Ⅹ』、1991 『山田道2・3次調査』、『飛鳥・藤原宮発掘調査概報21』

大阪府教委・大阪文化財センター・大阪府文化財センター

1982 『崇禅寺遺跡発掘調査概要・Ⅰ』、1983 『萱振遺跡発掘調査概要・Ⅰ』、1984 『美園』、1987 『久宝寺北』、1991 『八尾南遺跡発掘調査概要』、1995 『陶邑・大庭寺遺跡Ⅳ』、1996 『陶邑・大庭寺遺跡Ⅴ』、1999 『河内平野遺跡群の動態Ⅶ』、2004 『久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書Ⅵ』

大阪市文化財協会 2001 『長原遺跡発掘調査報告Ⅳ』、2003 『長原遺跡発掘調査報告Ⅵ』

八尾南遺跡調査会 1981 『八尾南遺跡』

八尾市文化財調査研究会 1988 『小阪合遺跡』、1995 『中田遺跡』

石川県埋蔵文化財情報

第21号

発行日 2009(平成21)年3月31日

発行 財団法人 石川県埋蔵文化財センター

〒920 1336 石川県金沢市中戸町18番地1
TEL 076 229 4477 FAX 076 229 3731

URL <http://www.ishikawa-maibun.or.jp/>
E-mail address mail@ishikawa-maibun.or.jp

印刷 株式会社 橋本礎文堂

© (財)石川県埋蔵文化財センター